

二十七 篝 火 (廿六歳七月の事)

此の頃では、内大臣の迎へた愚かな姫君の噂が、世間の人々の笑ひ話の種となつてゐた。それを聞いて、源氏君は、娘の愚かさを世間に弘まらせるやうな軽々しい取り扱ひ方をする内大臣の心がけが、うとましくも思はれた。

やがて、秋風の吹く頃になると、源氏君は淋しさが一層増して、思慕の情に猶更堪へきれなくなつたので、玉鬘の部屋で一日を遊び暮す事が多かつた。折しも、五六日頃の月がはや隠れてしまつたので、源氏君は、庭先に焚いた^(三)篝火の消え方になつたのを燃えつけさせて、次のやうな歌を口ずさんだ。

篝火に立ち添ふ戀の烟こそ世には絶えせぬ炎なりけれ

(篝火に立ち添ふ烟のやうに、私のそなたを戀ふる戀の炎はいつまでも消えませんが、折から花散里の方で、夕霧が友達の柏木などと箏笛の合奏をしてゐるので、源氏君も興を催

されて、人々をこちらに呼びよせ、ともに弾いたり歌つたりした。柏木は玉鬘に心を懸けてゐるので、かういふ機会にその心を打ち明けようと思つたが、人目を憚つて素知らぬ顔をしてゐた。

○

此の巻は、花散里の巻や關屋の巻とともに全篇中最も短い。庭に篝火、殿上には合奏といふ所に、初秋らしい気分が現はされてゐる。それ以外には何の意味もない巻である。

なほ螢の巻で、年頃の娘には戀愛小説を讀ませるなど誠めたり、此の巻で、娘はあまり世間の人の口の端に乗らぬやうに、奥深く育てるがよいなどと記してゐるのは、即ち作者の、年頃の娘の教育方針に對する考へが出てゐる所で、作者があくまでも貞淑でゆかしい、寧ろ保守的な女性を理想としてゐた事が知られる。かういふ點はなほ他の巻でも時々見える。

(一) 夜中警備の爲め庭に篝屋を設けて篝火を焚いた。又庭に風情を添へる爲めにも焚いた。

(二) 巻名の出所。

六條院に歸つて居られる秋好中宮の住居では、庭先に秋の草花が咲き亂れて美しかった。

八月には、野分が例年よりも烈しく吹いて、風に弄ばれる草木の様を、紫上も庭先近く出て見てゐた。夕霧は大風の見舞に紫上の所にやつて来たが、妻戸の開いてゐる隙間から、その紫上の、氣高い美しさを見ては、惱ましい氣持にもなつた。やがて、さり氣なく、夕霧は父の源氏君に會つて大風の見舞を申し上げ、それから直ちに三條宮に參つて、祖母の大宮に力をつけて慰めた。その晩夕霧は、幾ら思ひ返しても、紫上の面影が目先にちらついて、眠る事が出来なかつた。暴風は一晚中吹き荒れて、木や屋根や塀などの折れ毀れたものが數知れずあつた。

翌朝、夕霧は六條院へ出かけて、父から見舞の手紙を托されたので、それを持つて秋好中宮の部屋に參つたが、やがて源氏君も中宮の所を訪れて、それから明石上を見舞ひ、玉鬘を慰め、花散里の所にも廻つて歸つた。此の御供をして歩いた夕霧は、父に別れて妹の明石の姫君

を見舞ひ、こゝで雲井雁へ見舞の手紙を書いて、使に持たせてやつた。後で夕霧は、紫上は櫻、花散里は山吹、此の姫君は藤の花のやうだと、人々の容色を思ひ出したりしてゐた。そしてまた三條宮なる祖母大宮の所に行つて見ると、内大臣も來合はせてゐて、雲井雁や近江君の事を話し合つてゐた。

○

野分の吹き荒んだ秋の一日の事が書かれてゐる。源氏君や夕霧が、方々の女を見舞つて歩いた。そしてそれ／＼の身のもてなしの相違を描出し、且つ花に譬へて現はしたりした。そこに人物描寫の相違もあり、當時の人々の女性に對する感觸の相違も窺はれて、稍々面白い所もあるが、要するに、六條院に於ける源氏君一家の人々の秋の一日の生活を寫したに過ぎないで、それ以上に大して注意すべき所もない。

たゞ、夕霧が紫上の姿を見て恍惚とする所は、義理の親子といふ道義的觀念をはなれて、女性に魅せられる當時の人々の情趣生活にふさはしい場面で、實直生眞面目な夕霧も惱ましい氣持にならずには居られなかつた。かういふ所を一々捉へて道德的批判を加へるのは、當時

の生活觀念に徹した考へ方ではない。

(一) 此の卷には野分の事を主として書いたので卷名が出た。野分は秋吹く風をいふ。

(二) 兩開きになつてゐる戸。寢殿造の家屋の四方にあつて出入口となつてゐる。此の當時の家は四方に葎(シトミ。格子戸の事)を立廻して家内には這入れぬやうにし、たゞ四隅に妻戸を設けて、此の扉をあけて出入するやうになつてゐた。妻戸に對して敷居の上をすべらせる戸を遣戸と云ふ。

二十九 行

幸

(廿六歳の十二月より廿七歳の二月迄の事)

此の年の十二月には、帝が大原野へ行幸せられたので、その御行列を拜觀する爲めに、大勢の人々が沿道に出掛けた。玉鬘もそれらの人の中に交つて、内大臣を、あれが實の父かと懐かしく思つて、その顔をつく／＼と眺め、源氏君をば類ひなく美しい方だと感じたが、その中に右大將の色黒く髭の多いのを見て、若い玉鬘はその無骨な様を大いに輕蔑した。

その翌日、源氏君が玉鬘に「昨日帝のお顔をよく拜みましたか」と尋ねたのに對し、玉鬘はうち霧らし朝曇せし行幸にはさやかに空の光やは見し

(一面に霧のかゝつた朝曇の時だったので、行幸の際には、天顔をはつきりと拜み奉る事は出来ませんでした。)

と返歌を書いて源氏君に差し上げた。

翌年二月頃、玉鬘の装着の儀式を行ふ事になつたが、源氏君は此の機會に、内大臣に委細を

知らせようと思つて、此の儀式(五三)の腰結(五)ひの役を内大臣に頼んだが、折から、内大臣は、母の大宮が重病に悩んで居るので、承諾しなかつた。これを聞いて、源氏君は直ちに三條宮を訪れて、大宮を見舞ひ、且つ内大臣をもこゝに呼びよせて、久しぶりに、青年時代の親友が相會して、打ち解けた話をする事が出来たが、その際、源氏君は始めて、玉鬘の身の上を内大臣に打ち明けた。今評判になつてゐる源氏君の姫君が、實は自分の年來捜してゐた子供であると聞いて、内大臣は大いに喜び、腰結ひの役を引き受けた。併し、その席上で、五ひの子供達の、夕霧と雲井雁との婚姻に關して何の話もしなかつた事は、何だか二人の胸にわだかまりがあるやうに思はれた。

かくて二月十六日の夜に、玉鬘の装着の儀式が行はれて、秋好中宮以下末摘花に至るまで、何れもお祝品を贈つた。覺束ない火影にそれとなく玉鬘の顔を見た内大臣の心は、懐舊の情に堪へなかつた。滞りなく装着の式も終つたので、源氏君は、いよ／＼玉鬘を手元から放して、尙侍(五)として宮中に仕へさせる事を決心した。此の噂を耳にした近江君は、父内大臣が新しく美しい娘を見付け出し、しかもそれが尙侍になるといふので、口惜しさ妬ましさを餘り、人々に當り散らして駄々をこねた。

に當り散らして駄々をこねた。

玉鬘の事を實父内大臣に知らせる事が此の巻の中心となつてゐる。源氏君と内大臣とは若い時からの遊び友達であるが、近頃は夕霧と雲井雁との戀愛事件によつて、二人の間に多少氣拙い感情がある。雲井雁を東宮に入内させようと思つてゐた内大臣は、夕霧に汚されて、その望みも叶はなくなつたのを不愉快に思ひ、源氏君はまた、内大臣が夕霧の戀を遂げさせない事を面白く思はなかつた。そして五ひに相手の事を悪く云ひあふ。(その事は常夏や篝火の巻にも見えてゐた)。此の二人が久し振りに會つて、五ひに懐しく思ふが、しかも何處か心持にそぐはない所のある微妙な心理が、可成りよく描き出されてゐる。これを此の巻の中心として、末摘花に近江君と、二人まで滑稽な人物を景物に添へてゐる。

それよりも大切な事は、始めに玉鬘が、行幸の行列の中に、髭黒の大將を見て、見醜い人だと思つたといふ事が、一寸書き添へてある事である。玉鬘を中心としたこれら前後十巻の興味を中心は、玉鬘が何人の手に入るかといふ所にある。柏木であらうか、螢兵部卿宮であらう

か、それとも源氏君自身であらうか。此の巻では、玉鬘は尙侍として宮中に参る事になつた。然らば帝が玉鬘を得られるといふ結果になるであらうか。さういふ豫想も起る。作者はかやうに種々の想像を讀者に與へて興味をそゝつてゐる。しかもその結果は、意外にも無骨で醜い髭黒の大將が得る事になる。作者はそこまで讀者の興味を操つて行き、最後に意外な結果を與へて、讀者をあつと云はせるとともに、それによつて、讀者の喝采を博しようとしてゐるのである。——といふのは少し語弊があるが、此の前後十巻の中心興味を作者が此所に置いた事は否まれない。その髭黒大將を玉鬘が瞥見して、見醜い人だと云はせてゐる。伏線を此所に置いて、しかも結果を全く讀者に豫想させぬやうな事を云はせてゐる。尤も、その語が餘りに多くの重點を以つて書かれたなら、却つて讀者は、これに注意をひかれて、その結果も大抵豫想されるが、此所では極めて軽く無造作に此の語が挿入せられてゐるにとゞまるので、讀者は一杯喰はされてしまふ。作者も亦狡猾なりと言はざるを得ぬ。さうして此の點に於いて、同じく多くの男性が一人の女を争ふといふ趣向のものになる竹取物語も宇津保物語も、到底此の物語には及ばないのである。結果が意外な結果に終らず、懸想人の描寫にしても、平凡無味で、戀の

情熱は少しも感じられず、且つ、筋の運び方に不自然な所が多くて、内容に深味がない。要するに描寫が極めて自然であり、筋の運びの興味深い點から云つて、此の物語が最も優れてゐると云ふ事が出来る。

- (一) 十二月にはよく野行幸が行はれた。鷹狩をせられる爲めである。大原野は、京都の西南方にある。
- (二) 此の形容によつて髭黒大將と名付けた。
- (三) 卷名の出所。行幸はまた御幸とも書く。
- (四) 女子成年の儀式。大抵十二から十四くらの間に行はれる。此の時玉鬘廿三にして此の式を行つたのは、田舎に居て時期を失したからである。
- (五) 裳着の式の際には尊屬又は徳望の高い人に頼んで裳の腰紐を結ばせる。これを腰結といふ。又髪をも結ばせる。

三十 藤 袴 (卅七歳八月九月の事)

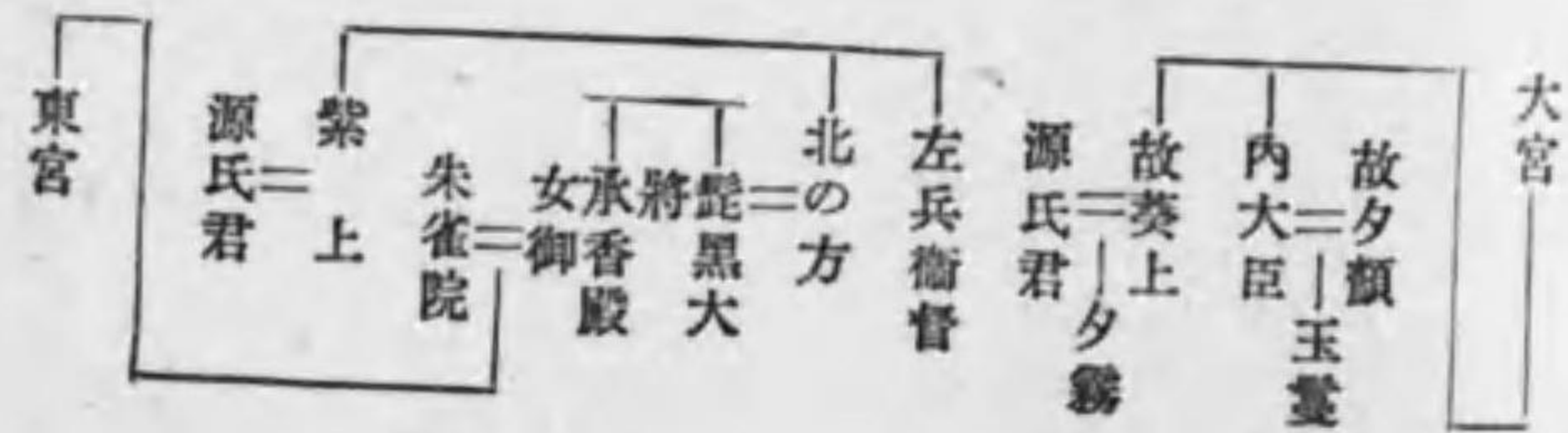
玉鬘に、尙侍となつて宮中生活をする事を、源氏君初め人々が勸めるけれど、玉鬘は何うも気が進まなかつた。もし帝の御手がつくやうな事があつたなら、姉の弘徽殿女御や、秋好中宮などに對してもすまぬし、人笑ひにもなると、そんな事が特に玉鬘の心を苦しめてゐるのであつた。三條宮なる大宮が薨じたので、孫に當る玉鬘も黒い喪服を着てゐたが、その姿は却つていつもよりも美しく見えた。そして、その忌服も此の八月で明けるので、八月十三日に鴨河の河原に出て、除服の祓を行はうと定めた。夕霧も亦喪服を着て、玉鬘の所を訪れたが、密談があるからと云つて侍女達を遠ざけて、二人だけで對談した。夕霧は、今まで兄弟だとばかり思つてゐた玉鬘が、實は内大臣の隠し子である事を既に知つてゐた。そしてその美しい姿に想を懸けて、此のよい機会に玉鬘をかき口説いた。玉鬘の袖を取つて引き動かしながら、同じ野の露にやつるる藤袴あはればかけよかごと許りも

(秋草の藤袴を喪服の藤衣に言ひかけた。そなたも私も祖母の大宮の喪に服して、同様に見すばらしい喪服を着る親しい間からでありますのに、少しでもよいから私に情をかけて下さいよ。)

と言つたが、玉鬘は病氣にかこつて、知らぬ顔で奥へ入つてしまつたので、夕霧も仕方なく父源氏君の部屋へ来て、雑談の末、源氏君が玉鬘を宮仕へに出さないのは、想を懸けてゐるからだ、内大臣が噂してゐるなど話したので、かやうな疑を人々から受けるのも嫌だと思つて、玉鬘が尙侍となつて参内するのを、大宮の喪の明けて後の十月頃に決めた。

柏木は、玉鬘が實の兄弟だといふ事を知つてからは、全く來なくなつたので、その現金なのを人々をかしく思つてゐたが、今日は内大臣の使としてやつて来て、少しは氣まりが悪いのか、玉鬘の冷遇を怨んだりした。使の用向は、玉鬘に参内の時期を尋ねる爲めであつた。

此の柏木中將の長官なる髭黒大將は年卅二三、北方は紫上の姉で、髭黒よ



りは三つ四つ年上である。此の髭黒は東宮の御母承香殿女御の兄として、その權勢は源氏君及び内大臣を除いては並ぶものもない。此の大將も内々玉鬘に心をかけてゐて、内大臣にも妻に貰ひたいといふ希望を洩らしたので、内大臣も別に悪くはないと思つてゐた。

九月になつて玉鬘参内の時期も近付いたので、想を懸けてゐる人々、髭黒大將、螢兵部卿官、紫上の兄弟なる左兵衛督等がそれ／＼心を籠めた手紙を玉鬘に贈つたが、兵部卿官だけが返事を貰つて大いに喜んだ。

○

玉鬘と實の兄弟であると知つた柏木は急に冷淡になつたが、反對に實の兄弟でないと知つた夕霧は、急に玉鬘の懸想人の一人となつた。此の邊は少し不自然であつて、何だか嫌らしい感じがする。

髭黒も亦懸想人の一人となつたが、此の無骨人が玉鬘を得るであらうといふ考へは起らずに、寧ろ兵部卿官に玉鬘が返書を贈つた事によつて、此の人に落ちるのではないかといふやうな想像を興へてゐる。作者はなか／＼狡猾である。

(一) 除服の際には河原に出て御禊の式を行ひ穢をはらつて喪服を河に流してしまふのである。

(二) 卷名の出所。

(三) 藤の織維で織つた着物。もと賤者の着る着物であつたが後には喪服にも用ひるやうになつたので、喪服の事をも藤衣といふ。

(四) 大宮は三月廿日に薨じた由藤末葉の巻に見える。祖母の喪は五ヶ月服するのであるから八月廿日頃にその喪が明ける事になる。

三十一 榎 柱 (卅七歳の十月より卅八歳の十一月迄の事)

髭黒大將は遂に玉鬘を手に入れる事が出来て、戀の手引をした玉鬘おつきの女房の辨をも、またかね／＼祈誓してゐた石山の觀音をも、ともに並べて戴きたいほどに嬉しかった。此の事を源氏君は知つて残念に思つたが、内大臣が内々承知してゐるとの事なので、致し方なく、遂に髭黒が玉鬘の部屋に出入する事を許したのであつた。十一月にもなつた。それから後の髭黒大將は、玉鬘の所に入りびたりで、傍の見る目をかしくらぬ、それに玉鬘を参内させる事が氣がかりなので、自分の邸宅を修繕して玉鬘を引き取らうと思つて、その用意を急いでゐた。此の髭黒の北方は、本性の時は物靜かな温和な人であるが、時に氣が狂つて亂暴をするのが缺點であつた。

今日しも髭黒は、北方に玉鬘の事を話して、玉鬘をこゝに引き取らうと思ふが、そなたも決して見捨てはしないなどと語つたが、北方も別に嫉妬がましい事も云はないので、晝の間はいろ／＼と北方を慰めて、夕方になると雪がひどく降つて來たが、髭黒は雪などには頓着なく、氣もそゞろに外出を急いで、着物を着代へた。北方はそれを見て、さすがにしよんぼりとして物思はしい様子であつたが、突然立ち上つて、髭黒の背後より火取の灰をさつと打ちかけたので、その邊一面の灰神樂、髭黒も身體中灰だらけとなつて、到頭その晩の外出は見合せなければならなくなつた。

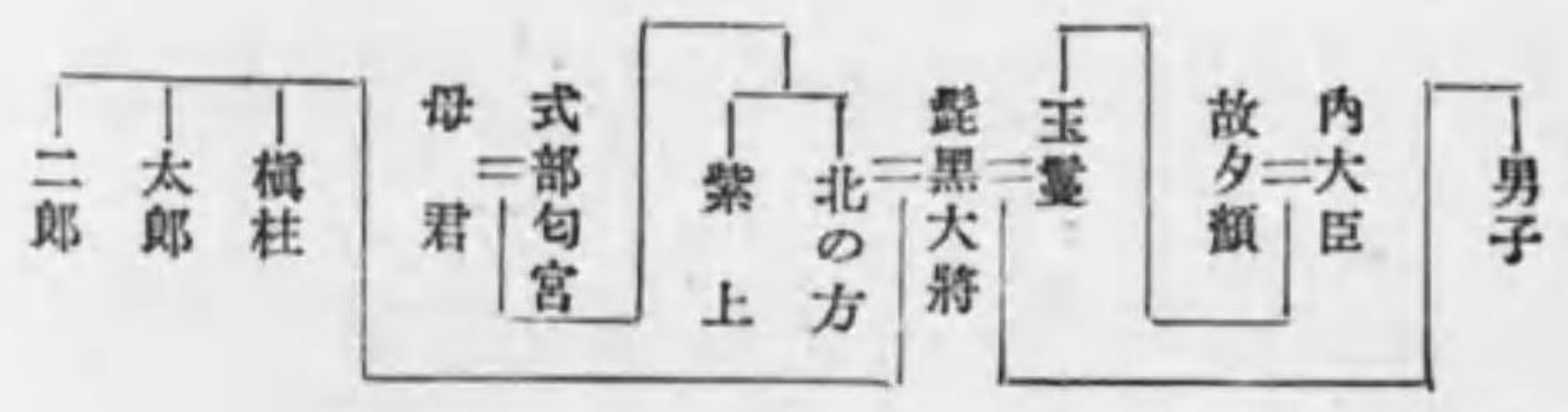
かやうに髭黒が玉鬘に溺れてゐるといふ事を聞いて、北方の父式部卿官は大いに憤り、且つ娘の身の上を心配して、子息達に北方を迎へにやつた。髭黒と北方との間には、年十二三の姫君が一人と、あまり年も違はない二人の弟君——兄君は十、弟君は八——とがあつたので、今更夫と別れる氣にもなれなかつたが、かやうな有様となつては致し方なく、北方は萬事を思ひ諦めて、姫君一人を伴ひ、お里へ歸る事に心を定めた。併し髭黒の最愛の姫君を、父に別れも告げさせずに連れて行くのが可哀さうなので、夕暮まで待つたが、髭黒はその晩も遂に歸つて來なかつた。迎への人々はしきりに歸りを促すので、姫君は、座敷の榎で造つた柱の割れ目に、
今はとて宿離れぬとも馴れ來つる榎の柱は我を忘るな

(此の家に別れを告げて立ち去つても、今まで馴染の深い此の櫛の柱だけは、せめて私を忘れないやうにして下さい。)

と書いた紙切を挿んでおいて、母君ともくお里へ歸つた。

お里では、北方の母君は泣き騒いで、これも皆源氏君の仕業、源氏君が須磨へ流寓してゐた時に、世間を憚つて自分達が音信しなかつたので、今此んな目に合はずのであらうと、罵つた。式部卿宮はさすがに、傍からそれを止めて、慰めた。此の話が世間に傳はると、玉鬘はいふまでもなく、源氏君や紫上も、此の爲めに式部卿宮の方々から怨まれるのをつらく思つた。髭黒大將は式部卿宮の仕打を怒つたが、それも自分の過ちから生じた事であれば致し方もなく、母に別れて後に残された二人の男の子の頭をさすつて、涙にくれてゐた。

翌年の正月、玉鬘の参内が遅れては帝に御申譯がないと、男階歌の行はれる頃、盛んな儀式をして宮中に参らせた。その時玉鬘が既に髭黒のものとな



つたといふ事を知つて、螢兵部卿宮も帝も御恨みの歌を玉鬘に贈られた。髭黒は自分の邸に玉鬘を引き取る事を急いで、今晚でも直ぐにと思つたが、さうも出来ないで、間もなく、玉鬘が急に風邪をひいたからと帝に申し上げて、到頭自分の邸へ連れ歸つてしまつた。

その後源氏君は、折節にふれてはしばし見舞の手紙を玉鬘に贈つてゐたが、その年の十一月には玉鬘は男の子を生んだ。

近江君も此の頃は色氣づいて、若い貴族達が内大臣の邸に遊びに来た時には、その中に出しやばりたがるので、父大臣は困つてゐた。

○

開卷第一に、意外にも玉鬘ははや髭黒のものとなつてゐる。此所で讀者をあつと云はせる積りらしい。そして上來興味の中心なる玉鬘の歸趨はこゝにきまつた。くだしい過程を略した此の突發的な解決の爲方は、先づ賢明な書き方と賞さなければなるまい。それ以下、髭黒の家庭内に起つた悲劇は、明治になつてからも繰り返し描かれた所のもの、何時の世でもかういふ悲劇は絶えない。此の當時としては、和泉式部日記に見られる、敦道親王の御家庭の事が、

同様の事件として思ひ出されるのである。しかもその間、ヒステリックな北方の狂的動作、中年の戀に燃えて、殊に今まで眞面目な無骨な男であつただけに、猶更戀の捕虜となつては矢も楯も耐らず玉鬢の色に濡れ、玉鬢を自分の邸宅に引き取らうと思つては寸時も我慢のならぬ、一徹で氣の短い髭黒大將の性格が、實によく描き出されてゐる。此所では二人の性格描寫に、鶉の毛ほどの隙間もない。北方が娘を連れて家を去る場面もよく哀憐の情が生かされてゐる。北方がお里へ歸つてから、その母君が嘆きの餘りに、愚痴をこぼして遂には源氏君をさへ恨む所も眞に迫つてゐる。此の家庭悲劇の終りに、近江君の軽いユーモアに富んだ話をつけて結末としたのも氣がきいてゐる。かくて此の一卷は又全篇中の名篇と云つてもよからう。

此所にまた一人の新しい女性、髭黒の北方を出した。神経質な、時々ヒステリーを起す女、かういふ女性は今まで一人も出なかつたが、此所に此の婦人によつて、世間によく見かける、かやうな性格の女性を代表させ、此の巻で十分にその性格、行爲を描出してゐるのは、作者の用意と觀察とを多とすべきである。しかもそれが甚だ成功してゐるのは、此の巻の價値を一層高める。楨柱も、女に迷つた父親と、神経質な母親とを持つて、平和のない家庭に悩む可憐な

少女としてよく描き出されてゐる。

なほ、此の楨柱の母の事は、既に早く若紫の巻にも一寸出てゐて、紫上の母を恨み、邪見な人のやうに書かれ、須磨の巻でも、源氏君の流寓に對し、紫上の幸福の短かつたのを嘲笑するやうな事が出てゐて、それ以下にも、紫上を愛する源氏君と、此の紫上の繼母を夫人とする式部卿宮とは、そりが合はないやうに、しばしば書かれてゐる。さうして、その繼母に子女があつた事は、前に記されてゐたが、それが此所に髭黒の北方として、一卷の主要人物となつて現はれ、これを活躍させるに至つたのは、作者の趣向のこまかい所で、それからそれへと人物の脈絡を辿つて、ずつと以前に、一寸書いた人物を、後で使つて活躍させて來るといふのは、此の作者のよく用ひる手法である。それが此の長い物語の各巻を有機的に結びつけて、複雑雄大な構想とならしめてゐる所以であり、支離滅裂にならない所が、作者手腕を思はしめるのである。江戸時代の長篇小説なる讀本でも、一流作家の作品には、やはりこれと同様に、人物驅使が自由で、人物連結の巧みさの窺はれるものがある。

さて以上の十巻は、種々の理由で一團となるべき性質をもつてゐる。第一にこれらの巻は玉

鬘が中心となつて活躍し、その生立から歸結までを書いたものである。第二に四季折々の風物や年中行事を挿んで、源氏君の六條院の一年間の生活を寫さうとした。終の二卷は少し違ふが、他の八卷は大抵一月毎に卷を改めて、正月の行事、春の御讀經、五月の騎射、冬の鷹狩等を挿入し、且つ季節の風物を描いて、卷名もそれにふさはしい初音とか胡蝶とか螢とかいふ、その季節の物の名で名づけて、卷の季を現はしてゐる。かういふ試みは他の部分に見ない所で、恐らく作者は玉鬘を中心とする事件を、また源氏君の榮華の生活、否、理想的な當代貴族生活の一年間を、かういふ形式に於いて描出して見ようと考えたのであらう。氣分も一貫して、同一の心持を以つて書かれてゐる。故に、此の部分だけは一團として、他の部分とは變つたものとして、此所にまとめておくべきである。

以前の卷では、一卷ごとに中心となる女性を變へて、その氣分の變化をはかつたのに、此所では月次を變へる事によつて、同様の方法を遂行しようとしたのであつて、人間に代へるに、これでは自然を以つてした。併しさうした人物(女性)なり自然なりの變化、推移といふ方法の中にそのづからなる統一を見出す事が出来るのは、作者の小説技法が、前でも此所でも變らず

に示されてゐる所である。

(一) 近江の石山寺。

(二) 今のやうに香水のない時代には着物によい匂をつける爲めに香爐に香を炷き、その上に籠を伏せ籠の上に着物を載せて香の匂を着物に移す。その香爐を火取と云ふ。その小さくて袖の中に入れて香を薫ずるものを袖香爐と云ふ。こゝは鬘黒が女の所へ行く爲めに着物に香を炷き籠めてゐたその火取の灰を鬘黒に打ちかけたのである。

(三) また紫上の父君であるが源氏君とは餘り仲がよくない。源氏君が須磨へ流された時は音信もしなかつたので源氏君も此の人を快く思つてゐないで、時々辛い仕向の交る時もあると浮標の卷に出てる。

(四) 卷名の出所。又此の歌によつて姫君の名をも楳柱上といふ。楳柱はまた眞木柱とも書く。なほ拾芥抄には此の卷の次に櫻人といふ續篇の卷があつた由に記されてゐるが、それも前の浦傳の卷の場合と同じく此の卷の一名と考へられぬ事もないが、その卷名の出所は此の卷中に見えず、且つ櫻人といふ續篇のある事は諸書に見えて事實でもあるから今はこれを取らぬ。

三十二 梅 枝

(卅九歳の正月より三月中旬迄の事)

紫上の手で育てられてゐる明石姫君も、今年十一歳となつたので、御装着の儀式を行ふ事となり、やがて東宮の女御として入内させようと源氏君は思つてゐた。

正月の晦日頃、源氏君は暇なので、色々な香を合せて楽しんでゐた。また榎前齋院その他方の女達にも、香を調合するやうに頼んだが、二月の十日頃榎前齋院から出来上つた香が送り届けられた。それで源氏君は、紫上、花散里等の女達からも香を出させて、螢兵部卿官を判者に頼んで香合を催したが、兵部卿官は何の香をも當り障りなく賞めたので、源氏君も呆れてゐた。香合が終つて酒宴が開かれた。その席上で、内大臣の子息、柏木頭中將の弟の辨少將は、管絃に合せて催馬樂の梅枝を歌つて興を添へた。

翌晩、六條院の西の御殿秋好中宮の方に於いて、明石姫君の装着の式が擧げられて、此の時紫上は始めて中宮に對面した。中宮も明石姫君に始めて會つた。

東宮の御元服の式は廿日過ぎに行はれて、明石姫君は直ちに入内するはずの所、源氏君の姫君が參られては、他の人々の娘達を東宮の所に差し上げても、到底御寵愛を争ふ事が出来ぬと云ふので、皆その娘を東宮に差し上げる事を思ひ止まつた。此の話を聞いた源氏君は、それは面白くない事だと思つて、明石姫君を入内させる事を差し控へたので、左大臣の三の君が東宮の所へ參られた。これを麗景殿女御と申し上げる。

四の君
内大臣
— 柏木中將
— 辨少將
— 弘徽殿女御
— 冷泉院

かくて明石姫君の入内は四月と決定した。その爲めの御調度などが、いろいろ美しく造られてゐた。能筆の人々に依頼して、書の手本とすべき冊子も調へられた。螢兵部卿官もその需に應じて書き上げた書を、源氏君の所へ持參せられたが、その上手なものにはさすがの源氏君も甚だ驚いた。その他萬葉集、古今集、唐本の類に至るまでが取り揃へられた。

明石上
— 源氏君
— 明石姫君
— 東宮
— 麗景殿女御
— 左大臣

1220

夕霧との事があつて、さういふ希望は

遂げられなくなり、いつそ此んな事なら、あの時娘を夕霧に許せばよかつたのにと後悔したが、今となつては夕霧も意地づくで、内大臣の所には寄りつきもしないので、内大臣は一層その處置に困つてゐるのであつた。

かやうに夕霧が獨身生活を續けてゐるのを、父の源氏君は諫めて、早く良縁を求めて結婚するがよい、たゞ一人で漁色に身をやつすやうな事をするな。自分の過去を顧みてもつくづくさう思はれるのである、と説き聞かせたが、夕霧はただ黙つてゐた。さうしてさういふ父の諫めにつけても、自分は雲井雁以外の女には、決して心を移すまいと思つた。併し世間の人は、夕霧の心も知らずに、その頃、夕霧が中務宮の姫君と結婚するといふ噂を立てたので、雲井雁は大いに夕霧を怨んで、一首の歌を贈つたが、夕霧は身に覚えのない事なので不審に思つてゐた。

○

前の玉鬘を中心とした十卷に、此の卷と次の卷とを附屬せしめる。玉鬘の事は前の卷で終つたが、なほその他の、前卷來行きがかりとなつてゐた事が解決せられずに、次の卷に至つて始めて團圓を結んで、此處に一段落がつけられるからである。その一は、初音の卷にも一寸出て

ゐた明石姫君の事で、その二は、少女の卷及び行幸の卷に書かれてゐた雲井雁と夕霧との關係である。次に、春の季を描いた此の卷に、梅枝といふ季節の物を以つて名付けたのも、前卷までの命名法に似た所がある。とにかく次の卷を以つて一段落とする方が便利である。

此の卷は種々の意味で、藝術的な雰囲気富んで居る。始に香合があり、後に書の批評がある。香と書とは、繪畫や音楽と並んで、最も喜ばれた當代の藝術であつた。嗅覺は今でこそ劣等感覺として、視覺や聽覺と同等には考へられてゐないが、當代の香は立派な藝術である。殊に官能的な點に於いて、平安時代の神經衰弱的な生活をしてゐる人士に喜ばれたのである。書もまた當代に最も發達して、繪畫と同様、或はそれ以上の美を持つてゐた。繪畫は繪合の卷で詳しく優劣が論ぜられ、音楽は隨所に奏せられてゐる。さうして、これらを併せて當代藝術界の形勢を察する事が出来るのである。

螢兵部卿官は藝術に理解の深い、謂はば美術批評家として取扱はれてゐるらしい、繪合も香合も此の人が判者となつてゐる。

なほ書の批評について、作者は此の卷で、源氏君に、

「萬づの事、昔に劣り様に淺くなりゆく世の末なれど、假名のみなむ今の世にはいと際なく
なりたる。古き跡は定まれるやうにあれど、廣き心豊かならず、一筋に通ひてなむありけ
る。」(すべての事が今は古へよりも劣つた様子で、淺薄になつて來る末世の世の中ではある
が、假名だけは、今の世の中が際限もなく上手になつてゐる。昔の筆蹟には筆法がきまつて
ゐるやうであるが、大きい心持でゆつたりとして書いたやうな所がない。どれもこれも皆筆
蹟が似通つてゐる。今の假名文字のやうに自由な所がない。)

と云はせてゐるのは、假名書論として注意すべきで、最も首肯に價する説であり、此の假名の
讚美論がやがて、此の假名文の物語を書かせた因縁ともなつてゐるであらう。實に假名書法は
一條天皇時代以後に、美術として一大發達を遂げてゐるのである。それで、物語作品の中に多
く見られる尙古思想の中でも、此所には珍らしく、現代を謳歌肯定する聲が聞かれるのである。

(一) 二種以上の香を割合して獨特の匂を發するやうに一種の香を造る。その割合の分量の相違又は

材料の相違によつて、種々違つた匂を薫らせる所に興味が存するのである。近頃流行する混合
酒(コクテール)の如し。

(二) 後に紅梅右大臣といふ。

(三) 「梅が枝に、來居る鶯や、春かけて、ハレ、春かけて、鳴けどもいまだ、雪は降りつゝ、アハ
レソコヨシヤ、雪は降りつゝ」卷名の出所。

(四) 今まで現はれない新人物。此の卷だけに名が見える。

(五) 此所に噂話として一寸と現はれるだけで、物語中には他に所見なき人物。

(六) 當代の香について歴史的に研究したものはないが、「群書類從」「續群書類從」及び「古事類苑」
遊戯部收載の薰物、香に関する書籍、事項を参照。

(七) 當代の假名の書については尾上八郎博士の「歌と草假名」「平安朝時代草假名の研究」がましま
つた研究である。

(八) 當代の繪畫については「稿本日本美術略史」笹川臨風氏の「日本繪畫史」黒田鵬心氏の「大日
本美術史」その他の日本美術史書に説明してある。

(九) 當代の音樂については小中村清矩博士の「歌舞音樂略史」田邊尙雄氏の「日本音樂講話」同氏
「雅樂通解」「古事類苑」樂舞部その他の音樂書を見るべし。

夕霧は、明石姫君入内の準備の爲めに奔走しながらも、雲井雁を忘れる事が出来なかつた。雲井雁も亦夕霧を想つて心中惱んでゐた。

その頃、三月廿日は内大臣の母大官の命日なので、極樂寺に一家の者が参詣した。夕霧も亦寺詣りに來たので、内大臣は夕霧の袖を引き止めて、その後、何か御腹立になつて、私の所へお見えにならないやうだが、たまにはお遊びにお出で下さいと、夕霧の心が打ち解けるやうに優しく云つた。越えて四月の七日には、内大臣邸で藤の花見の宴會が催されて、夕霧の所にもわざわざ案内があつたので、夕霧は喜びに満たされてその邸に参つた。酒宴酣となつて主客皆酔うた時、内大臣は「藤の末葉の」と古歌を誦して、自分の娘を夕霧に許さうと思つてゐる心中をそれとなく夕霧に通じた。その晩夕霧は柏木に導かれて、雲井雁の部屋に泊り、漸く多年の戀は酬はれて、初めての契を交したのであつた。かくて内大臣は娘の婿なる夕霧を大切にすれ

ば、その話を聞いた源氏君も大いに喜んで、年來の隔執も解けたやうであつた。

廿日過ぎの葵祭の時には、源氏君一家の人々が祭見物に出かけて、その時、夕霧が嘗つて歌を贈つた事のある惟光の娘と、また歌を取り交したやうな事もあつた。

いよ／＼明石姫君入内の日となつて、その晩は姫君の養ひ親紫上が付き添うて宮中に参つたが、三日ほどして紫上は歸り、代りに姫君の實母明石上がお傍に参つて、こゝに久しい間別れてゐた母子が、始めて一所に生活する事が出来るやうになつた。久しぶりに成長した娘の顔を見て、明石上はただ泣くばかりであつた。東宮は此の新しく入内した女御を甚だ寵愛せられて、いつもその傍に居られるので、雛のやうな御有様だと母は思つたりした。

かくて源氏君は、子供達の身も片づいたので、肩の重荷が下りて、今はいつ出家の本懐を遂げても差支へはないと思つてゐた。來年源氏君は四十となるので、賀の祝の準備に今から忙しかつた。その秋には、帝は源氏君に太上天皇に准ふる位を賜うたが、なほ帝は源氏君に御位を譲らない事を遺憾に思つて居られた。源氏君の代りに内大臣が太政大臣となり、夕霧の宰相中將は中納言に昇進した。そして今までは雲井雁と舅の邸に同居してゐたが、新しく祖母大官の

舊邸三條殿を貰つて、此所に移り住む事になつた。太政大臣も時々此所に遊びに來て、想ひ合つた夫婦は楽しい家庭を作つてゐた。

十月廿日過ぎには、帝、朱雀院御共々に源氏邸なる六條院へ行幸になり、盛大な御宴が開かれて、世人の耳目を驚かした。

○

こゝに至つて明石姫君は入内し、夕霧は雲井雁と楽しい新家庭を作り、源氏君は太上天皇に准へられる事となつて、萬事は圓滿な終局を告げ、今は源氏君が入道しても差支へない境涯となつた。殊に此の巻では、帝と朱雀院の行幸によつて、源氏君の光榮は頂上に達し、歡樂の讃歌を以つて一巻が終つてゐる。眞に源氏君は幸福な方だと讀者は深く感じる。そこには、次巻以下に如何なる悲劇が演出せられるか、圓滿幸福な境涯にあると思はれた源氏君の身に、如何なる不幸の絆が纏ひつくか、そんな豫感を全く與へて居らぬ。即ちこゝで源氏君の榮華時代、中年期が全く終つて、次巻以下は新たに、暮れ行く春の如き底寂しい華やかさと、陰鬱さを以つて色づけられ、今までとは全く違つた色調を帯びて書かれるのである。歡喜の聲は此所で

突然に打ち切られて、靜かな淋しさが次巻から漂ふ。即ち此所に段落を設けるのである。

巻中の描寫はあらく且つ概念的で、たゞあわたゞしい喜びを書き、事件の終末へと急いだかのやうに感じられる。餘り面白い巻ではない。さうして、此の巻と前の巻とは、女性としては明石姫君、雲井雁が主となつて居り、前々巻で玉鬘の身が片付くとともに、それに附して此の二巻は、此の二女性の身の落ち着き先を示したものと云ふ事が出来る。

(一) 山城國紀伊郡深草村にあつた。藤原基經の創建にかゝる。攝關家の菩提寺。

(二) 「春日さす藤の裏葉のうら解けて君し思はば我も頼まむ」(後撰集卷三、讀人不知)上二句は「うら」と云ひ出す爲めの序詞。うらは心の意味。此の句によつて此の巻名が出た。

(三) 藤とうのなほのすけ典のなほのすけ侍のなほのすけと言はれてゐる。内侍の典侍(スケ)の職掌をしてゐたからであらう。藤原の略。此の人に夕霧が歌を贈つた事は少女の巻に出てゐた。

(四) 後に明石中宮と稱す。

(五) 功成り名遂げて出家得道し後世を祈りつゝ安樂な餘生を送る。これが當時の人の理想であつた。

三十四 若菜上

(卅九歳の十二月より四十一歳の三月迄の事)

一名 果鳥 諸堂

朱雀院は、源氏邸へ行幸の後、持病が重られたので、出家しようと思ひになつたが、その最愛の女三宮だけは、御四人の皇女の中でも、十三四になられる今日まで、未だ御身が片づかれずに、父君のお手許で育てられて居られた。母君は既になくなられて、誰も此の方のお世話を頼む者も居ないので、父朱雀院はその處置に迷つて居られた。

或る日、朱雀院の御病氣見舞の爲めに、源氏君は夕霧を院へお伺ひさせ。院は夕霧の立派な姿を御覧になるにつけても、此の人が雲井雁と結婚をせずに、未だ獨身であるなら、女三宮の身を托するのには最も理想的な



人物だがと残念に思はれたりなされた。此の人の父源氏君も愛情の深い人であつて、決して女を見捨てずに、いつまでも世話をして行く性質であるから、女三宮の事を頼んでも悪くはないと思ひになつた。かやうに朱雀院が、女三宮の夫となるべき人を捜して居られるといふ事を知つて、内大臣の子息柏木衛門督、また玉鬘を得ようと望んで失敗した螢兵部卿宮、その他にも女三宮に想を懸けてゐる人が多かつたが、何れもその人物に缺點があるやうに思はれて、御心を決しかねて居られた。

此の噂をお聞きになつた東宮は、朱雀院に、やはり源氏君を女三宮の親のやうにして世話を頼みになつた方がよいでせうとお勧めになつたので、朱雀院も遂に御決心あそばされて、院の御乳母の兄左中辨は源氏君の所にも親しく出入してゐる者なので、此の男を使として、院の御希望を源氏君に傳へさせになつたが、源氏君は笑つて取り合はなかつた。

その年の暮には、女三宮の御装着の式が盛大に行はれて、三日過ぎに朱雀院は遂に髪を剃つて入道あそばされた。此の事を承つて、世間の人々は大いに驚き悲しんだが、源氏君も亦御見舞に参上した。朱雀院は源氏君に會はれて雑談の末に、女三宮の話させられ、その世話をお頼

みになつた。源氏君もそれを無下に御断りするわけには行かなかつたので、よんどころなく院の御頼みを御承諾申し上げた。朱雀院はそれで漸く御心が落ち付かれたが、源氏君は何だか重荷を負はされたやうで心苦しかつた。殊に此の事を源氏君の口から聞いた紫上は、或る不安な氣持に襲はれて、胸騒ぎがするのを止める事が出来なかつた。

年が明けて、源氏四十の賀の祝が、正月廿三日(五)の日に、西の放出(六)で行はれた。玉鬘はその式場で、若菜を源氏君に差し上げたので、源氏君は

小松原末の齡に引かれてや野邊の若菜も年をつむべき

(あなたが子供達を引き連れて来て私を祝つて下さつたから、その子供達の生ひ先き長い命に引かれて、私もいつまでも生きて年を重ねる事が出来ませう。小松原は玉鬘の子供達に譬へ、野邊の若菜を源氏君に譬へ、若菜を摘むに年を積むをかねた。)と歌つた。

二月の十日過ぎには、いよ／＼女三宮が六條院の西の放出へ移つて來られた。その際の儀式も盛大に行はれた。源氏君は朱雀院に對しても、此の方を疎略にお取り扱ひする事は出来ない

ので、此の人の部屋で泊る事が多かつた。永い間獨り寝をした事のない紫上には、それが寂しく且つ嫉ましかつたが、表面では強ひてその氣持を押し隠して、平氣な顔をしてゐた。

「女宮はいとらうたげに幼き様にて、御しつらひなどの事々しく、よだけく麗しきに、自らは何心もなく、物はかなき御程にて、いと御衣がちに身もなくあえかなり。事に恥ぢなどもし給はず。たゞ兒の面(七)嫌(八)せぬ心地して、心易く美しき様し給へり。」(女三宮は大變可愛らしく子供らしい様子の方で、室内の裝飾などは大仰に嚴めしく且つ立派であるが、當人は無邪氣な頑是ない年頃であつて、大變着物を多く着込んで、身體は小さく弱々しい様子である。別に源氏君に對しても耻かしがる様子もなく、幼い子供が人みしりをしないのと同じやうに思はれて、氣易い美しい様子をして居られる。)

かやうに無邪氣一方で思慮分別のないのが、源氏君には心劣りがするやうに思はれて、やはり紫上は立派な女であると思つた。

その月のうちに朱雀院は寺へ移られた。それにつけても女三宮の事が御心に懸つて、紫上にも、何うぞ憎まずに世話をしてやつて下さいとお頼みになつた。かくて朱雀院の寵愛せられて

ゐた女達も、それ／＼暇を貰つて歸つたが、かの朧月夜の内侍は、姉弘徳殿
大后の住んで居た二條宮に移り住む事となつた。その話を聞いて、源氏君
は、懐舊の情に堪へず、ひそかに朧月夜を訪れて、十餘年前の舊交を温め、
若々しい感情が再び湧いて來るのを感じた。



明石姫君は東宮から甚だ御寵愛を受けてゐたが、夏頃懐妊したので、お里
へ歸つて、女三宮の居られる西の放出の東側の座敷に住まふ事となつた。それで紫上は、久々
でその部屋を訪れて、自分の養ひ育てた明石姫君に會ひ、そのついでに、女三宮にも對面した
が、紫上は少しも嫉妬がましい心持を抱かずに、いろ／＼親切に話をしたので、無邪氣な女三
宮はすぐ此の人にも打ち解ける事が出來た。

十月廿三日には紫上が源氏君の爲めに、二條院で四十賀の祝を盛大に舉行した。十二月の廿
日過ぎには、明石中宮がお里へ歸つて、同じく源氏君の四十賀の祝を行ひ、帝も祝意を表され
て、夕霧中納言を右大將に昇進おさせになつた。明石姫君の産月も近づいたので、年があけて
正月朝日から盛んなる安産の御祈禱をはじめ、二月頃から姫君は病に悩んでゐたが、三月十日

餘りに、安々と男の御子を初産する事が出來た。源氏君や明石上を始め、祖母の尼君、またか
の播磨なる明石入道も此の報知を得て甚だ喜んだが、そのついでに、明石入道は手紙を明石上
の所へやつて、今は自分も思ひ残す所もないので、此の機會に山奥深く入つて、浮世の交はり
を全く絶つてしまふと書遣して遂に行き方知れずなつてしまつた事は、喜びの中の悲しみであ
つた。明石上は云ふまでもなく、源氏君も流謫時代の事を思ひ出して、しんみりと追憶の話を
してゐた。

柏木衛門督は、女三宮が源氏君の所に參られたので甚だ失望したが、なほ懐かしさに堪へか
ねて、小侍従と云ふ女三宮おつきの女房は柏木の乳母の姪で、以前からよく知つてゐたので、
此の小侍従に女三宮の事をよく／＼頼み込んでおいた。

三月頃の空うら／＼かな日に、柏木や螢兵部卿官などが源氏邸へ遊びに來たので、蹴鞠の遊戯
を庭先で催した。柏木はあれが女三宮の居られる所かと、ちつとその部屋を見つめてゐる折も
折、小さい唐猫を追ひかけて、大きい飼猫がその部屋の中から飛び出して來た。その拍子に、
猫に結はへてあつた紐が張つて、御簾が高く引き上げられたので、部屋の中があらはに見え

た。縁側近く立つて外の方を見てゐた美しい女、それは云ふまでもなく女三宮である。此の女三宮の美しい姿を見て後、柏木は胸のときめきを抑へて、さり気ないふうで女三宮の事を夕霧と話をしてゐる時、夕霧は、柏木が餘りに女三宮の事を氣にかけて、源氏君が女三宮を寵愛してゐるかどうかを、しきりに尋ねるので、怪しく思ひ、次のやうな歌を柏木に云つた。

深山木にねぐら定むる果鳥（三）もいかでか花の色に飽くべき

（果鳥はまた箱鳥とも書いて深山に棲む鳥といふ。一説に果鳥はカホ鳥ともよめるので、

貌鳥の一名と云ふ。深山木は紫上に譬へ、果鳥は源氏君に譬へ、花を女三宮に譬へた。源氏君は、長年連れ添うて來られた深い仲の紫上に、お心は定まつて居るものの、また盛り色の女三宮の事を、どうしてお忘れになりませうか。源氏君は女三宮の事も深く思つて居られます。）

かくてその日は何事もなく、皆々歸つて行つた。

此の事があつて以來柏木の物思ひは一層まさつて、小侍従を通じて、胸中の煩悶を書き連ねた手紙を女三宮に贈つた。

○

此の巻と次の巻とは此の物語中の最も長い巻であつて、他の巻の二倍以上三倍近くもの分量がある。又若菜上、同下といふやうな名の付け方も他の巻とは違つてゐる。恐らく此の二巻はもと一體となるべきで、それを、餘りに長篇なので、二巻に分ち綴ぢたものであらう。然らば若菜の巻といふ名を以つて上下を總稱しても差し支へはない。宇津保物語も、長い巻は上下二巻又は上中下三巻に分綴せられてゐるが、しかも巻の名は、「藏開の上」とか「藏開の下」とか呼ぶよりも、上中下を通じて、單に「藏開の巻」と呼ぶ事が多いやうである。此の若菜の巻も、事情は宇津保物語の場合と同じであるが、此の巻は、寧ろ上下を付して呼ぶ事が普通のやうである。なほ本巻は二巻に分つよりも、上中下三巻に分つた方が、分量に於いて、他の巻との平均が取れるやうに思はれる。下の巻の書き初めは直ちに上の巻の文章に連続してゐるので、此の間が必ずしも切目にはならない。要するに、此の上下の分け方は、必然的な内容上の段落によつて分つたものではなくて、綴貼する上の都合によつて便宜上かやうに分けたものである。さて此の巻に至つて突如女三宮なる新しい女性が出て、源氏君の家庭の平和を亂し、ひいて

は柏木といふ人物を通じて、一場の悲劇さへ演出せられるに至つた。女三宮は全く無邪氣な思慮分別のない女、それが爲めに後に大きい過失を犯すやうになるが、併しさうかと云つて、必ずしも臙月夜の内侍のやうに放縱な女と云ふのではない。たゞ人なつつかい子供らしい一方の女である。故に女三宮は柏木と密通して後甚だこれを悔いて遂に尼となるが、臙月夜は源氏君と密通しても別に良心の苦しみもなく、寧ろ男を引き入れては罪の歡樂に酔うてゐた。此所に兩者の性格の相違がある。女三宮は亦從來點出せられたどの女性にも類似を見ない一性格を備へた人物である。なほ、その臙月夜の事も、此所に久しぶりに出て来て、源氏君との舊交が温められ、始の方で源氏君と關係のあつた多くの女性の中、此の女性だけは飛び離れて、此の巻と次の下の巻とで結末がついてゐるのは、朱雀院の出家せられる内容との關係上、さういふ事になつたのであらう。

此の巻には儀式の描寫が詳しい。源氏君の四十の賀や、明石姫君出産の祝等。これは「紫式部日記」に於いて諸種の儀式を詳細に書いた、有職故實の道に興味を持つて居るらしい作者の筆致を思はしめるものがある。巻の終の方、猫が走り出て柏木が女三宮の姿を見る所は甚だ有

名で、後世にも歌に誦はれ、文章に引かれた事が少くない。眞に興味の多い劇的な場面である。一場の活人畫として見ても美しい。惣じて本巻は長いだけに描寫も詳しく、對話が長く詳細に描出せられてゐる。

(一) 此の當時の人は病氣になれば醫者に見せるよりも先づ僧侶修驗者を呼んで祈禱修法をして貰ふ。いよ／＼病氣が重くなれば出家受戒して佛に罪の許しを受け、それによつて病氣が平癒するやうに信じられてゐた。

(二) 女三宮の母君は先帝の源氏宮(先帝の姫宮で臣下に下り源氏姓を賜はつた方)で、朱雀院が未だ東宮の時に入内し藤壺女御と申した方であるといふから、紫上とは従姉妹に當る。即ち前掲(二二二頁)の系圖の如くである。

(三) 前巻では頭中將として出てゐた。此の巻で右衛門督に轉じてゐる。

(四) 女三宮は十三四、源氏君は卅九。餘りに年が違ふので親のやうにと云つたが、やはり結婚するのである。

(五) 正月初子の日に野原に遊びに出て小松を根引にして自宅に持ち歸り庭に植ゑつける。これは長

壽を祝つたのであらう。かくて後には野外で遊び戯れる事にもなつた。又此の日には若菜を調へて人にも贈り羹としてこれを食する風習があつた。後世の七草粥の始めである。

(六) 母屋から別に突出して造られたる家屋。母屋に附屬の建物。離れ。一説に母屋の周囲の廂の間の事で、その周囲を開き放つて廣くした時の稱と云ふ。廂の一部の稱と見る方がよいと思ふが、今は舊説に従つた(關根正直博士の宮殿調度圖解参照)。

(七) 此の句によつて卷名が出た。また若菜上下を通じて一名を諸臺の卷と稱する。此の異名の出所は若菜下の卷にあり、分つては若菜下の卷だけを一名諸臺といふ。

(八) 實際の天皇六十一代の朱雀天皇は御出家後仁和寺に移られた。古註は此の天皇をモデルにし奉つた所があるとして此の寺をも仁和寺と定めてゐるが、それは誤で、別に實際の皇室の御事とは關係がないのであつて、此の寺の事も、物語の上では單に西山の寺となつてゐるので、特に仁和寺と解さなくてもよい。

(九) 妊娠の時には身體が弱るので、その弱味につけ込んで種々の物怪(モノ、ケ)が馮いて障害をすると信じられ、それを除く爲めに大いに誦經祈禱をしたものである(葵卷参照)。

(一〇) 此の御子は後に東宮になられるので單に東宮と申し上げてゐる。

(一一) 蹴鞠の遊戯は此の當時盛んに行はれた。直徑七八寸くらの革製の鞠を互ひに蹴り上げて地に落さないやうにする遊戯。

(一二) 唐種の猫。上等の猫とされた。一般に犬や猫を飼ふのは當時の習慣であつた。枕草子にも命婦の御もともと云ふ猫と翁丸と云ふ犬の話が出てゐる。

(一三) 卷の一名の出所。これは宇治十帖の宿木の卷の一名を貌鳥といふのに對照して、後に付けた名であらう。古くは見えない一名である。

三十五 若菜下 (四十一歳の三月より四十七歳の十二月迄の事)
 一名 諸 堂

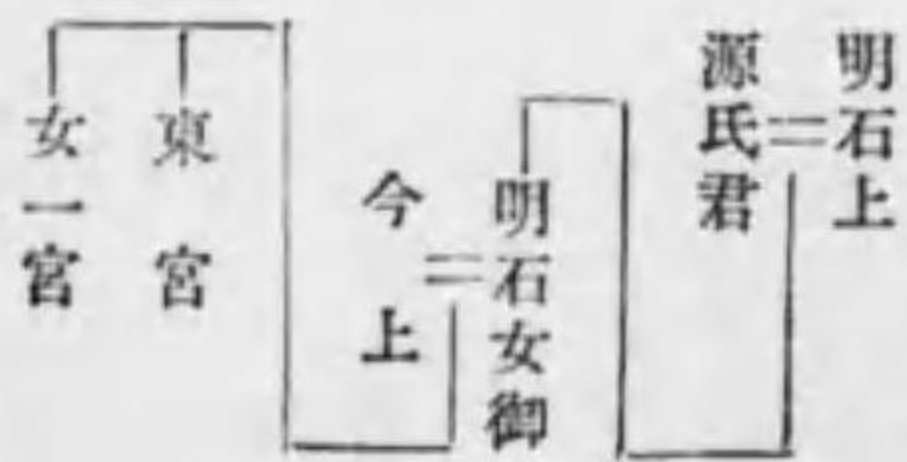
柏木は、女三宮から手紙の返事を貰ふ事が出来ず、わづかに小侍従のお座なりのお返事を読んだだけでは、満足が出来なかつた。

三月晦日に、六條院で、弓の競技會が開かれ、青年の公卿達は集まつて、楽しい一日を過ぎたが、柏木だけは、心が慰まずに、とかく物思ひにふけりがちであつた。東宮は女三宮の御兄弟なので、似て居られる所もあるであらうから、其のお顔でも拜見して、せめてもの慰めにしようと思ひ、東宮の御所へ遊びに参つて、かの六條院で見た猫の話をする、東宮は柏木を猫好きだと思はれて、源氏君の所から猫を取り寄せて柏木にお興へになつたので、柏木は大いに喜んで、せめてこれをかの人の手馴の物と思つて、慈しんでゐた。

かの髭黒大將の前の北方とともに、祖父式部卿宮の所へ引き取られた横柱の姫君は、立派な

婿を取らうと祖父達が心掛けてゐたので、世間には希望する人々も多かつたが、柏木だけは、猫よりも横柱の方を思ひ^たてゐるのであらうか、此の姫君の事などは一向見向きもしなかつた。かくて横柱は、結局、かの玉鬘をも女三宮をも得られなかつた螢兵部卿宮と結婚した。併し横柱は、兵部卿宮が思つてゐた程の立派な女でもなかつたので、その仲が餘りよくはなかつた。此の事を聞いて横柱の祖母は、例の意地悪く邪推を廻す人なので、立腹していろ／＼悪口を云ふので、兵部卿宮は一層嫌氣がさして、獨り住ばかりしてゐたが、それでも夫婦仲は絶えずに、二年ほど續いて、遂にうまく治まつたやうである。

年月はたつて、帝御即位後十八年の月日が過ぎた。今は長閑な生活をした^いとお思ひになつて東宮に御位を譲られ、御自分は冷泉院へお移りになつた。東宮は帝になられるにつけても、御母承香殿女御が此の榮位を見ずして、亡くなつたのを残念にお思ひになつた。太政大臣も官をやめた。承香殿女御の兄髭黒左大將は、即ち帝の御伯父に當られるので、右大臣になつて政を取る事になり、夕霧も右大將から大納言兼左大將に昇進した。さうして東宮には、明石女御がお生み申し上げ



た皇子がお立ちになつた。

源氏君は、かやうに自分の孫に當られる方が東宮になられたのも、これ皆かね／＼祈願をかけてゐた住吉明神の冥助によるのであらうと有難く思つて、十月廿日頃に、紫上、明石上、明石上の母の尼君、明石女御をも伴つて住吉へ参詣した。大勢の御供を連れて、途中も甚だ賑やかに、神前の儀もいかめしい事であつた。世間の人々は、かの明石上の母の尼君をば、幸ひ人として話し傳へ、近江君などは、雙六の賽を振る時の言葉にも、「明石の尼君／＼」と云つて、よい目が出るやうに祈つたりした。

女三宮は二品(六)に昇進したが、それにつけても、紫上は、自分ばかり年を取つて、女三宮は華やかに勢ひがつくので、やがては源氏君に捨てられる事になりはしないかと、今更心配をした。さうして、明石女御の御腹なる東宮の御妹女一宮を引き取つて、自分の手元で育てて、源氏君が女三宮の方に泊つた夜の淋しさを紛らしてゐた。花散里も、夕霧と惟光の娘との間に生れた姫君を引き取つて育てる事になつた。

明年は朱雀院は五十になられるので、源氏君は御賀の祝をして、若菜などを差し上げようと

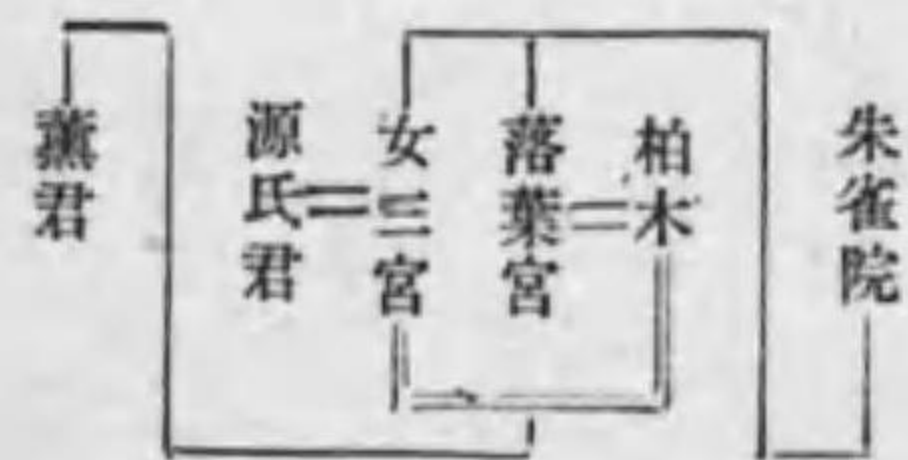
思ひ、その準備に舞や音楽の稽古を今からさせてゐた。その頃明石女御は、既に二人の御子が居られるのに、また懐胎して五月となつたので、神事に事寄せてお里に歸つたが、十一月が過ぎると、早く宮中に歸るやうにお召しになつたけれども、此の頃毎夜のやうに行はれる音楽の練習の面白さに、宮中へ参る氣もしなかつた。

年が明けて、二月十日過ぎに朱雀院の御賀の祝を行ふ事にきめて、その正月廿日頃に源氏邸で音楽の練習が行はれた。紫上は和琴、明石上は琵琶、明石女御は箏の琴、女三宮は琴の琴、その他の方々も集まつて、音楽の合奏をして、春の一夜を楽しく過した。女三宮は年廿一二になつたが、未だ極めて無邪氣で、琴も餘り上達してはゐなかつた。

紫上は今年卅七、女の大厄の年なので、源氏君はよく祈禱をして厄を逃れるやうにしたがよいと注意すると、紫上は、何だか長く生きて居られないやうな氣持がしますと、心細い事を云つてゐた。此の合奏のあつた翌々日の曉方から、紫上はひどく胸の痛みを訴へた。熱も高い。いろいろ介抱したが回復せずして、二月も過ぎた。源氏君は心配して、試みに所を變へて見ようと思つて、二條院に病床を移した。人々も皆二條院へ集まつて、六條院は火の消えたやうに

淋しくなつた。

かの柏木衛門督は昇進して中納言となり、女三宮を得られなかつたせめてもの慰めに、その姉君に當られる女二宮と結婚した。女二宮も美しい方であつたが、柏木はなほ女三宮の事が忘れられなかつた。其の頃六條院には人が少いのを察して、小侍従を賣めては何うか一目よい機会があつたら女三宮にお逢はせしてくれと、深く頼み込んでゐた。折よく四月十日餘り、明日賀茂齋院の御禊があるといふので、人々はその見物の用意に忙しくて、女三宮の傍には人が居ないので見て、小侍従はよい折とばかりに、柏木を女三宮の部屋に導いた。初めはたゞ顔を見て、心中の思ひを話したなら、それで満足して歸らうと思つたが、遂には情煙を制する事が出来ず、罪の契をこゝに結んだのであつた。翌朝自宅へ歸つた柏木は、何といふ過ちを犯したのであらうかと、悔恨の情に堪へず、苦しみ悶えてゐた。葵祭の日にも、人々は祭見物に出て行くのに、柏木のみは鬱々と閉ぢ籠つてゐて、悔しくぞつみ犯しける葵草神の許せる挿頭ならぬに



(葵祭の日なので葵に寄せて詠んだ。葵草は女三宮を譬へ、且つ逢ふの意を含めて、前日ひそかに出會した事を意味してゐる。つみは葵草を摘むと罪とをかけて云つた。神の許せるは、表面は賀茂明神を現して、實は源氏君を譬へた。源氏君が許しもしないのに、ひそかに女三宮と逢つて罪を犯したのは後悔に堪へぬ。)

と思ひ、また、

諸二五も落葉を何にかに拾ひひけんなほ睦まじき挿頭なれども

(諸葉は、葉の二つある事を女二宮女三宮の姉妹に、落葉は女二宮を譬へた。女三宮をば妻に得ずして、此の二人姉妹の中の賣れ残りである女二宮と何故結婚する事になつたのであらうか。あの自分の慕つてゐる女三宮の姉ではあるが、何うも氣に入らない。)とも残念に思つた。

紫上のある二條院は、大勢人が立ち込んで、皆涙に打ちしめつてゐた。紫上に憑いてゐる手強い死靈があるが、それはかの昔葵上に憑いてとり殺してしまつた六條御息所の死靈だつたので、源氏君はその執念の深いのにただ驚き呆れるばかりであつた。世間には紫上が死んだとい

ふ噂が立ち、事實命も助からない様子なので、せめては少しでも命が延びるやうにと、源氏君は紫上の髪を形ばかり剪つて、五戒を受けさせた。かくて五月が過ぎ、六月になると、大分紫上の容體がよくなつた様子で、時々は頭を擡げるやうにもなつた。所が、今度は女三宮が五月以來、氣分が勝れずに瘦せ衰へて、病床に臥す事となつたので、源氏君は、甚だ心配して、紫上が少しよくなつたのを幸ひに、女三宮の所へ見舞ひに來た。そして、女房の話を聞くと、妊娠をして、つはりであるらしいとの事なので、源氏君は、子供が出来るならばもつと早く出来るはずなのに、不思議な事だと思つた。

かくて、こゝに、二三日逗留した後、或る朝、早朝の涼しい間に、二條院へ歸らうと思ひ、扇の置き場所を忘れたので、その邊をかき探してゐる時、ふと女三宮の蒲團の下からのぞいてゐる手紙を見つけて、これを引き出して讀んで見ると、紛れもなくそれは柏木からよこした艶書であつた。源氏君はさりげなくその手紙を隠し持つて歸つて行つた。あとで此の事を知つた女三宮と小侍従は、驚き恐れて泣いたが、致し方がなかつた。

源氏君は、女三宮の胤を宿した相手がわかるとともに、お互ひの名譽の爲めに、此の處置を

世間に祕密で何う始末したらよからうかと迷ひ、かういふ事を仕出かす、二人の心持が、源氏君には堪らなく不愉快だつた。また自分の若い時藤壺と「物のまぎれ」のあつた事を思ひ合はせると、思はず冷汗の流れるのを止める事が出来なかつた。それ以來源氏君は、紫上の病床に付き添うてゐても、深い物思ひに沈んで、たゞ表面では、さり氣ないふうを装うて、女三宮の爲めに安産の祈禱を行つたりしたが、時には女三宮をかたく誠めて、それとなくその不始末を責めるやうな事もあつた。

かくて數ヶ月が過ぎた。かの臘月夜の内侍は落飾して尼となつた。此の報知を得て、源氏君は今更の如く此の女を失つた事を残念に思ひ、尼僧の道具をいろ／＼と調へて贈つた。

紫上の病氣で延期になつた朱雀院の御賀の祝は、九月は弘徽殿大后の御忌月なので、十月に行はうと思つたが、更にそれも女三宮の妊娠の爲めにまた延びて、遂に十二月に行ふ事となり、その十日過ぎに、御賀の祝の試樂が六條院で催された。その頃、明石女御も懐胎してお里へ下つてゐたが、男の御子を安産した。また、紫上も、それまで二條院にとゞまつてゐたが、試樂を見る爲めに、もとの六條院へ歸り、試樂の當日には、玉鬘も參會して、賑やかな事であ

つたが、かういふ折には、必ず顔を出す柏木の顔の見えないのが、人々には物足りなく思はれた。柏木女三首、二人の關係を知つて以來、源氏君は柏木と全く交際を絶つて、柏木も源氏君の邸へ出入しなくなつたので、夕霧を始め人々は不思議に思つてゐたが、此の日にも柏木だけは、重い病氣を患つてゐると云つて出て來なかつたのを、人々の勸めで漸く出席した。源氏君はさり氣ない様子をして、隔てのないふうで柏木と話をしたが、それが寧ろ柏木には底氣味悪く恐ろしかつた。そして少し酔が廻ると、源氏君は酔うた振をして、柏木に皮肉な冗談をあびせかけた。

「過ぐる齡に添へては、まひなき酔泣こそ留め難き業なりけり。衛門督心留めてほほ微笑まるる、いと心恥かしや。さりとして今暫しばしくならむ。逆様さかさまに行かぬ年月よ。老はえのび遅れぬわざなり。」(年を取るにつけても、酒に酔うて愚痴をこぼす事がやまなくなりませす。柏木衛門督も、私に目をつけて嘲笑つて居られるのは大變恥かしい。だけでもう暫くですよ。年月は逆様には流れないものですから、今にあなた方も年寄になるのを通れる事は出来ませんよ。)

此の言葉を聞いた柏木は胸がどきりとした。そして宴も未だ終らないうちに早々歸つてしま

つたが、その晩以來更に重い病床につくやうになつたので、父大臣母四の君などは甚だ心を痛めてゐた。帝や朱雀院からも御見舞があり、邸中大騒ぎをしてゐるが、病氣は益々重るばかりであつた。廿五日には、種々の障害の爲めに延びて來た朱雀院の五十の賀の御祝が盛大に行はれた。

○

此の卷は上卷と一體となり、上下合して他の卷の五六倍になる尨大な卷である。上卷に於いて女三宮なる女性を點出し、こゝに源氏君の平和なる家庭にひびが入る事となつた。先の帝なる朱雀院の御依頼とあれば、源氏君もこれを拒むわけには行かず、またおろそかな取り扱ひも出來ない。紫上に取つても、此の關入者は容易ならぬ敵である。然も當の女三宮は、さういふ事には未だ氣が付かない、無邪氣な女性となつてゐる。殊に高い地位にある人の家庭であるから、心の中はとにかく、表面上は無事平和を装つて圓滿に過さなければならぬ。かくて此の三者の葛藤は、火花を散らして戦ふ戀愛合戦でもなければ、戀の三角關係でもない。そこに普通の戀愛事件とは違つて、一層の深刻さと、底氣味悪さがあるのである。果然此の卷に至つて

紫上は倒れた。重い病床に臥すやうになつた。一人苦しさとしんじさとに堪へてゐた紫上は、當然かくなるべきである。紫上の病臥は源氏君を更に暗く不幸にした。惨澹たる運命が源氏君を待つてゐるやうに思はれる。

到頭最後の鐵槌が下つた。女三宮は、柏木との一夜の契から、その胤を宿すやうになつたのである。此の祕密を如何に處置すべきかと第一に源氏君は苦心焦慮した。更に嘗つて女に裏切られた事のない源氏君に取つて、此の事はその誇を根柢から覆へしてしまつた。これは精神上に致命的な痛手を受けた事になる。かくて源氏の煩悶は甚だしかつた。女三宮はその罪を悔いるといふよりも、源氏君の怒を恐れる心持の方が強く、そこにその性格の無邪氣な所が見えるのであるが、柏木は自責の念に堪へかねて、また病臥するやうになつた。事件は最早、三角關係ではなくて、四角關係となり、四人四様の心持を抱いて、各怒り悲しみ苦しんで居るのである。殊に紫上は病勢進み、女三宮も妊娠し、柏木も病狀が重い。源氏君一身の非命のみではない。此所に物語の内容は著しく精神的煩悶を増して、一層深刻となり、悲惨となり、宿命的悲劇とまでなつてゐる。

かの六條院の豪華な生活を描いた作者の筆は、時に冗漫となり、空虚な華やかさへ走せてゐたが、こゝに於いて更に物語の本道に立ち返つて、若き日の源氏君の藤壺に對する罪は、此所に柏木によつて報はれる事となり、その源氏君の煩悶は、過去の罪を償ふに足るだけの刑罰を受けたと同じである。作者は此の意圖をもつて此の物語を書き續けて來たのである。それは更に柏木の卷に至つて一層明かとなる。そしてそれは、後世の所謂勸善懲惡主義とは全く違つたもので、寧ろ作者の宿命觀がこゝに宿されてゐるものと考へられる。勸懲主義のやうな淺膚浮薄なものではなくて、もつと深刻な感じがその中にある。それは佛教信仰の因果觀から、根本は出てゐるのであるが、同時にそれは、作者の人生觀世界觀を支配する、大きい哲學的な冥想の世界から此の主要なテーマが生れてゐるのである。單なる表面的な觀念的説明でなく、人生の深い苦惱に觸れてゐるが故に、此の運命の見えざる復讐が嚴肅な恐ろしさを以つて、力強く人に迫り、その心を腹の底から動かすのである。

此の卷は尨大なだけに、對話、描寫ともに詳しく、それが餘り冗長には流れずして、寧ろ全體の落ち付いたしつとりとした淋しさを現はすのに、効果があるやうに思はれる。

かくて作者は、藤の末葉の卷に至つて一段落をおき、若菜の卷よりは全く違つた氣持を以つて、源氏君の寧ろ淋しく不幸なる晩年を描き出さうとしてゐるのである。

なほ二三付け加へておきたい事がある。此の卷には音楽の事が詳しく出てゐる。他の卷にも音楽はしばしば奏せられるが、此の卷では就中詳しく描かれて、源氏君の口を通して、音楽の効果までを作者は論じてゐるのである。此の意味に於いて、前の繪合や、螢や、梅枝の諸卷に相應する所があると云ふ事が出来よう。殿中の女樂の際に、源氏君は多くの樂器の中で、琴が最も勝れてゐると論じた。これも作者の好みが此の古風な樂器にあつたからであらう。琴のとなしい神さびた、しかも端正な樂は、紫式部の質實な趣味と共通するものがあるのを覺えるのである。

此の卷に紫上は年卅七と出てゐる。冷泉院御即位より十八年と記されたその翌年は、紫上は卅九か、又は四十になるべき筈である。遷標の卷で冷泉院は即位あそばされた、時に御年十一であると記されてゐる。冷泉院は、若紫の卷で紫上を年十ばかりと記したその翌年にお生れになつたのである。以上の三つの材料から計算しても、若紫で紫上を丁度十とすれば此の卷で三

十九、更に、玉鬘の卷に紫上を廿七八と記してゐるのによれば、此の卷で四十になると解釋されるのである。何れにしてもこれは作者の思ひ違ひで、卅七の厄年だといふ事は出来ないのである。かやうな尨大な物語であるから、時に年齢等に誤算があるのも致し方があるまい。否寧ろ、その他に此の種の誤りの殆どない事に驚くのである。

此の卷の最後は、「摩訶毘盧遮那の」と云ふ句で終つてゐる。石川雅望は「源注餘滴」で、これ以下の紙が千切れてなくなつた爲めに、此の中途半端の句で終つてゐるのだと解釋した。これも一解であるが、やはり私は古來の解釋通りに、作者獨特の省筆法で一巻の結末としたものと解したい。併し此の事は古寫本をよく調査した上で斷言せられるべきであらう。柏木の卷の終なども、一本には「秋つ方になれば、この君は這ひぬざりなど」で切れたものもあるが、又他には此の後に數行あつて、文章の完結したものもあるので、中斷してゐるのは、省筆法でなく、寫本の終の方が逸失したのだと思はれるから、さういふ點は、一概には獨斷が出来ない事なのである。

住吉詣の事が再び出て來るのは、遷標の卷からの因縁によるのであるが、これは、前の時と

稍々趣が變つてゐるとしても、内容的には重複の感があるをまぬかれない。

最後に、明石女御は、前年の十月頃に妊娠五月であつたのだから、翌年の三月頃に御子がお生れになつたはずである。然るに早くもその年の十二月には更に匂宮といふ御子が生れてをられる。此の間何うしても月があはないので、一人は月足らずの御子が出来て居られる事となる。此所にも作者の計算違ひがあるやうである。

- (一) 宮中の賭弓(ノリュミ)の儀式が延期せられたので私に催したのである。賭弓は射禮の翌朝行はれ、毎年正月十八日に宮中で此の儀があつた。左右の衛府の官人が射技の勝負を争ふ。畢つて敗けた方の近衛大將が自邸で射手を饗應する。これをカヘリアルジといふ。
- (二) 横柱の巻に此の人を意地の悪い邪推深い人として描いてゐる。
- (三) 此の間源氏君四十二歳より四十五歳に至る記事なくして飛んでゐる。帝御即位以後十八年目は源氏君四十六の年である。承香殿女御の薨去も此の間であらう。
- (四) かくて此の帝を今上と申上げてゐる。此の物語で今上と申せば特に此の御方を指すのである。冷泉院といふ邸へ移り住まれたので此の御方を冷泉院と申し上げる。冷泉院は嵯峨天皇の創設にかかり代々帝御退位後の御住居に用ひられた。

- (六) 皇族の階級は一品より四品までである。臣下の一位二位等に當る。
- (七) 何時の間にか前から歌を贈答してゐた二人の間に女の子が出来てゐる。明石女御に女一の宮が生れられた事や此の女の子の生れたのも記事のない四年の間の出来事であらう。
- (八) 巻名の出所。但し必ずしも此の語によらず前巻の歌によつて上下兩巻の總名が出たと解してもよい。
- (九) 十一月は一年中で最も宮中の神事の多い月である。妊娠の女はその神事の穢となると考へられてゐた。
- (一〇) コトは絃の樂器の總稱。箏は琴柱がある十三絃の樂器。琴は琴柱がなく微(キ)のある所を押へて高低を取る七絃の樂器。和琴は絃の數の少い所は琴に似てゐるが琴柱があるので箏と同種の樂器である。

- (一一) 此の一段は「殿中の女樂(ヲシナガク)」と稱せられて有名の所。
- (一二) 實は卅九か四十になるべきはず。
- (一三) 落葉宮と呼ぶ。女三の宮の腹違ひの御姉。
- (一四) 此の齋院の人物は不明。毎年一回賀茂齋院は葵祭の前に鴨川へ出て身を清める式をする事葵の巻の註に記した如くである。
- (一五) 諸臺は葵祭の時に飾として用ひる葵臺の事。一莖より二つの葉柄が出てゐるのでかく名付け

る。二葉葵とも云ふ。此の歌によつて此の巻及び若菜の巻全體の一名が出た。若菜上下を諸巻といふ事は、源氏秘義抄にも出てゐて、室町時代以前より行はれた説である。

(一六)此の語によつて女二宮の事を落葉宮と云ふ。實名ではない。

(一七)形式的に尼の姿となるしに髪を一寸切るだけで眞の尼の姿ではない。

(一八)不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不飲酒の五つの戒を云ふ。此の五戒は在家の人の持する所でこれを受けた男を優婆塞うぱさくと云ひ女を優婆夷うぱいと云ふ。在俗の善男善女となる事。有髮の僧で姿は變らない。これも病氣平癒を祈る爲めである。三十六戒を保つのが眞の出家である。

(一九)二條宮に居たので此所では二條の侍の君と稱してゐる。

(二〇)源氏君の前半生で敵役を演じた此の女性もいつか此の世を去つてゐる。九月になくなつたのでその忌月には大后の御子なる朱雀院に遠慮申し上げて御賀を行はないのである。此の人の死も空白となつてゐる四年の間の出来事であらう。

(二一)三番目の皇子、三宮。後に匂宮と申す。

(二二)梵語。大日如來と譯す。女二宮の安産の爲めに朱雀院の居られる寺に於いて摩訶毘盧遮那の佛法を行ふといふ意味である。それを簡單にかやうに云つた。

(二三)花宴、竹河等の巻の結末は何れもやうな省筆法によつて終つてゐる。

三十六 柏木

(四十八歳の正月より秋迄の事)
(薫君誕生)

柏木衛門督の病氣は快復せず年も明けて、翌年となつた。犯した罪に對する自責の念に悶えつゝも、なほ人目のない隙を見ては手紙を書いて、女三宮の所へやつた。小侍従は「これは柏木の君の最後の御手紙ですから、今生の思ひ出に、是非返事を書いて差し上げて下さい」と無理に勧めたので、女三宮も溢々筆を取つて返事を認めた。それを持つて、小侍従は柏木の所へ急いだ。久しぶりに會つて、柏木の瘦せ衰へたのに小侍従は驚いたが、その頼み少げな様子を且つは慰め、女三宮の事をもしんみりと語りあつた。女三宮の返事を讀んでは、柏木は一層涙にかき昏れつゝ、苦しい中にもやう／＼また手紙を書き認めて、小侍従に持たせて歸した。その夕方から女三宮は産氣づいて苦しんだが、翌朝男の子が生れた。合憎に、その子は柏木の顔に生き寫しなので、源氏君はこれを見て、自分の過去の罪の報いを悲しく思つた。
産養うぶやしなひの儀式は型の通りに行つたが、夜などは全く女三宮の所へ寄り付きもせず、晝頃一寸の

ぞいて見るだけであつた。女三宮は産後の肥立悪く、病臥してゐたが、此の事を聞かれた御父君朱雀院は、女三宮の容體も心配であり、御孫の顔も見たくて、急に源氏邸に行幸せられた。祕密を隠して御父にお會ひした女三宮は、たゞ泣くばかりで、「私は此の先き生き永らへるやうな氣持も致しませんから、何うぞ尼にさせて下さい」と願つた。朱雀院も、御娘の弱々しく頼み少い姿を御覽になつては、尼になるより他は爲方もあるまいと思はれて御同意あそばされたので、女三宮は遂に髪を剃り戒を受けて、尼となつた。翌日の晩、六條御息所の靈が現はれて、「紫上を取り返されて残念だつたので、今まで女三宮に馮かかいてゐたが、今は此所を立ち去らう」と云つて物凄く笑つたので、源氏君は御息所の祟りを淺ましく思つた。

かくて女三宮は容體が少しよくなつたやうであるが、此の人が尼になつたといふ事を聞いた柏木は、望を失つて、一層病が重くなつたので、父大臣や母君の心配は云ふまでもなく、朝廷からは特旨を以つて權大納言に昇された。大勢の見舞客の中で、たゞ一人面會を許された夕霧中納言に、柏木はそれとなく自分と女三宮との間の祕密を漏らして、その爲めに自分は煩悶懊惱して遂に病身となつたのだが、源氏君はその自分の罪を許されない御様子なので、一層世の

12.21
中が味氣なく、生きがひのないものやうに思はれて、自分は此のまゝ死んで行くのだ、自分の死後は貴方の取りなしで、源氏君に我が罪を許して下さいと、くれぐれも頼んだ。夕霧は、その遺言にも似た言葉を聞いて、心中思ひあたる所もあつたけれども、さり氣なく柏木を慰めて歸つて行つた。その日遂に柏木は水の泡の消えるやうに息を引き取つて此の世を去つた。北方の落葉宮は、柏木の病氣が重つたからといつても、急に柏木邸に移り住んでその看病をする事は、宮の御身分としてはあまりに輕々しくて出来難い事なので、遂に柏木の最後にもお會ひになる事が出来なかつたが、柏木は最後まで落葉宮の事をよく人々に頼んでおき、殊に夕霧には、「自分の死後は何うか落葉宮を慰めて上げて下さい」と云ひ遺しておいた。兩親は、自分こそ柏木に代つて先き立ちたいと嘆き、女三宮も、生れた罪の子の事を思へば、その父親なる柏木の死も悲しく、子供も可哀さうなので、思はず泣かれたのであつた。

三月に此の若君の五十日の祝が行はれた。源氏君も今年に既に四十八歳、年を取つたものと心細く思つた。

四月になると、夕霧は柏木の遺言によつて、一條なる落葉宮の所を訪れて、なき柏木の思ひ出話を語り、いろ／＼と慰めてゐた。落葉宮に代つて母御息所が應對した。御息所も柏木が死んで、その姫君の將來の事を思へば心細いので、泣いて愚痴をこぼしてゐた。夕霧は柏木よりも五つ六つ年下で、若々しくは見えるが、男らしく丈夫さうな立派な人である。青葉の頃になるとまた落葉宮を訪れて、母御息所に、「何うか一度落葉宮に會はして下さい。柏木の遺言もありますのに。」と云ふと、御息所は

柏木に葉守の神はまさずとも人馴らすべき宿の梢か

（柏木は落葉宮を譬へ、葉守の神は柏木大納言を譬へた。落葉宮には夫と頼む人が今は居なくなつたが、それでも私の所では、落葉宮を他の男に親しくさせる事は出来ません。）と答へたので、夕霧も御尤もだと思つて微笑した。

秋になると、女三宮の生んだ若君も遣ふやうになつた。源氏君はさすがに柏木の事が哀れに思ひ出されて、人知れず此の子を柏木の形見と思つて育ててゐた。

○

柏木は良心の苛責の餘りに遂に病死した。女三宮も亦尼となつて、此の罪の二人の運命は決した。此の二人を中心としての葛藤はこゝで終つたのである。尨大な若菜の卷に描かれた事件はこゝで結末を告げたと云つてよい。しかもそこにはなほ柏木の北方落葉宮が残され、更に罪の子薫君が残されて、作者が後に筆を振ふべき餘地を十分に與へてゐる。これらの人々の運命の發展を讀者に示唆してゐる。かくて、物語の重要な事件は終つて餘韻はなほ次卷に續く。

女三宮や柏木が病氣となるほどに自責の念にかられた心持はよく描かれてゐる。併し源氏君の苦痛は殆ど描かれてゐない。源氏君の此の事件に對する名譽上の苦惱と、更に若い時の自分が犯した同様の、否、それよりも、より一層大きい罪に對する煩悶と、それが十分に描かれてゐるのでなければ、此の事件の深刻味は出ないのである。それが此の卷には缺けてゐるので、かなり深味のないものになつてゐる。まして例の六條御息所の死靈を、若菜下の卷にも出しなから、又、此の卷にも使つてゐるが如きは、甚だ飽き足らぬ。要するに、此の卷は少しく低調である。若菜の卷のあれほどの葛藤を収めるには、もつと力強い線と、ゑぐるやうな心理描寫がなければならぬ。

此の卷に作者は、柏木を

若やかに艶めき、愛だれて物し給ひ。(若々しく艶つぼくて甘えた所のある方。)

と敘し、夕霧を
いと直よかに重々しく雄々しき氣配して、顔のみぞいと若う清らなる事人に勝れ給へる。(實に一本氣で落着きがあり、男らしい様子で、顔だけは實に若く綺麗な事人にすぐれてゐる方。)

と記してゐるのは、兩者の風貌性格の相違を見るに足る。さうしてその行爲や心理の描寫は、以上の敘述に合致するものがあつて、作者の筆は誤らないのである。

此の卷で大切なのは、女三宮に若君が生れて、その子の顔が柏木によく似てゐるのを源氏君が見た時に、

さても怪しや。我が世と共に怖ろしと思ひし事の報いなめり。此の世にて、かく思ひがけぬ事に向はりぬれば、後の世の罪も少し輕みなむやと。(さても不思議な事だ。自分が常に恐ろしいと思つてゐた事の報いであらう。此の世で、かやうに思ひもかけない事件が起

つて來たので、あの世での罪も少しは輕くなるであらうかと。)

源氏君が思つた事である。作者は此の罪の子の出生を、源氏君と藤壺との間の宿命の報いとしてゐる。さうして、それによつて、その過去の罪も少しは輕くなり、來世の業果を免れる事も出來ようと思つた。此所に一種の運命觀が寓せられてゐる。此の運命觀のもとに此の事件を描いて、はるかに前卷の藤壺と源氏君との關係に相應對照せしめた。作の中心事件は此所にある此の運命を廻つて、人生五十年の吉凶禍福、幸福より不幸へ、不幸より榮華へ、榮華より非運へと云ふ變轉常なき人生の諸相を描いたもの、即ち此の物語であるとも云へよう。作者の意圖は此所にある。此の意味で此の卷は物語の主流をなす重要な卷であるが、たゞ作者の筆の突つこみ方が淺くて、調子の低い所が、重要な卷であるだけに大いに遺憾である。

(一) 後に薰君と云ふ。宇治十帖の主人公である。

(二) 出産後、三日目、五日目、七日目に親類縁者から種々の祝品を贈つて祝の儀式を催す。これを産養と稱す。

(三) 若葉上の巻の終にある蹴鞠の時の事を意味してゐるのであらう。

(四) 此の當時は夫婦別居して夫が妻の家に泊りに行く者が多かつた。今柏木の病氣が悪くなり落葉宮の所へ行く事が出来なくなつたので、その最後に會はせる爲めに落葉宮を柏木邸へお連れしようとしても、それは皇女に對して畏れ多い事と考へたのである。

(五) 子供が生れて五十日目に行ふ祝の儀式。産養は親類縁者が祝つてやるので、五十日目に父親自ら子供の爲めに祝の式をしてやる。此の日餅をついて膳に載せ子供の口に含ませたりする儀式を行つてその長壽を祝つた。此の餅を五十日の餅と云ふ。

(六) 此の歌によつて巻の名が出で且つ此の巻の中心人物となつてゐるので權大納言の事も柏木と稱するやうになつた。實名ではない。

(七) 柏の木には守護神が馮いてゐると當時信じられてゐたらしい(増補雅言集覽參照)。但し此の信仰は萬葉集卷二なる「玉葛實ならぬ樹にはちはやふる神ぞ馮くと云ふ成らぬ樹ごと」とある如き信仰に發してゐると思はれる。右歌の玉葛、ちはやふるはそれ、枕詞であつて意味はない。歌では葉守の神を女を領有する夫の譬によく用ひる。

(八) 今云ふ「甘える」に同じ。甘えた行爲をする。

三十七 横 笛

(四十九歳の二月より秋迄の事)
(薫君 二歳)

柏木の一週忌が早くも廻つて來た。源氏君も夕霧も懇篤にその追善供養を行ひ、源氏君は黄金百兩を香奩として、致仕大臣に贈つたので、大臣は懇ろにお禮を云つた。朱雀院は、尼になつた女三宮に、佛道修行の事をお勧めになり、山に出來た野菜などを贈つては慰めて居られた。源氏君も時々女三宮の部屋へやつて來て、赤兒と遊び戯れるやうな事もあつた。

夕霧は、柏木の臨終の際の言葉を、父の源氏君に傳へたいと思つたが、その機會もなくて月日が過ぎて、秋になつた。

ある夕方、夕霧は一條の邸に落葉宮を訪れて、未だ親しく落葉宮の御顔を見る事は出来なかつたが、御簾を隔てて、宮は箏、夕霧は琵琶で、想夫戀を合奏して、僅に心を慰めた。夕霧が歸りかけると、母御息所は柏木大納言の形見の横笛を差し上げたので、夕霧は、

横笛の調はことに變らぬを空しくなりし音こそ盡きせぬ

〔「こと」は筆に殊をかねた。柏木の愛玩した此の横笛の調子は、昔柏木が落葉宮の筆と常に合奏した時と別に變りはないが、それにひきかへて、今は亡き人の數の中に入った柏木の事を思ひ出すと、盡きせず悲しむ。〕
と追憶の情に堪へなかつた。

三條邸へ歸ると、その晩の夢に柏木の姿を見たが、赤兒の泣く聲に眼が覺めた。雲井雁は、それとなく夫が落葉宮の所へ行く怨み言を云つた。翌日夕霧は六條院に參つて、源氏君に昨夜落葉宮を訪れた事を話し、また柏木の靈を夢で見た事を語つて、そのついでに、柏木が今はの際に、源氏君に罪を許して貰ひたいと願つた言葉を傳へた。源氏君は、心中には「やはりさうだつたか」と思つたが、表面は素知らぬ顔で、不審さうな様子を裝つてゐた。

○
柏木の死後、落葉宮と夕霧は、即かず離れずの状態で、しかも段々交情の深くなつて行く様子を敍した。

夕霧が落葉宮を訪れたと源氏君に語ると、源氏君は「清い交際をして、見苦しい關係を結ばない方がよい」と夕霧を諷めた。夕霧は「人ばかりそんなに心強く諷めても、御自分の行ひは何うか」と思つた。源氏君は既に五十に近く、十分人生の甘酸苦澁を味ひ盡くしたので、此の言葉が出たのであらうが、眞面目で物堅い夕霧は父の言葉に服しない。此の言葉が源氏君の口から出るのも自然であり、夕霧の服しないのも自然な氣持である。此の父子の矛盾したそぐはない心持は一寸面白い。更に源氏君の老境に入つた事も窺はれて、作者の用意のこまかい事を見る。なほ、此の源氏君の教訓は、前に出た梅枝の卷に同じく夕霧に對する源氏君の教訓と合はせ見れば、年老いた此の人生の経験者の戀愛に對する心持がはつきりとわかる。

夕霧が、妻の雲井雁や幼兒に取り卷かれての家庭生活の描寫には、愛すべきものがある。平和で陸まじいその家庭がよく描き出されてゐる。幼い薰君の描寫もこまかくてうまい。總じて此の作者は、若紫の卷の紫上や、少女の卷の夕霧と雲井雁等、少年少女や幼兒の描寫に甚だ勝れてゐるのは、さすがに女であるからであらう。觀察のこまかい所を取る。

- (一) 辭職した前太政大臣の意。此の人が辭職した事は若菜下の卷に出てゐた。
- (二) 正しくは相府連と書くべきである。南齊の宰相に王侯といふ者がありその池によい蓮があつてこれを歌に詠んで樂をつけたものであると云ふ。但し歌は絶えて樂のみ残つた。
- (三) 卷名の出所。

三十八 鈴

虫

(五十歳の夏より八月迄の事)
(薫君三歳)

夏に女三宮の持佛の供養が行はれた。源氏君や紫上もその式を助け、朱雀院からも御使が参つて、甚だ盛大であつた。女三宮には三條なる朱雀院に移り住むやうに、父君朱雀院がお勧めになつて居られたが、源氏君が手放さずに、未だ六條院に住まはせて、大勢の上品な尼達を集め、女三宮の傍に侍はせておいた。

秋の頃、源氏君が女三宮の部屋へ遊びに來た。鈴虫が庭先に鳴くのを聞いて、女三宮は、大方の秋をば憂しと知りにしを振り捨て難き鈴虫の聲

(秋は何事もつらいものだとは知つて居りましたが、秋の野にすだく此の鈴虫の聲だけは、好もしくて見捨て難いのです。)

と歌つた。源氏君は琴を弾き、女三宮はそれに聞き入つてゐたが、やがて螢兵部卿宮や夕霧なども來て、今晚は鈴虫の宴だと云つて、酒宴が催された。宮中でも月見の宴が開かれるはずの

所、都合によつて中止になつたので、人々も物足りなく思ひ、冷泉院から源氏君へ、同じ事ならば私の所へ遊びにお出でなさいと、お手紙が参つたので、一同引き連れて冷泉院へ参り、詩歌に興じて一夜を明かした。そのついでに源氏君は秋好中宮の部屋へ行き、中宮が出家したい希望を語つたりして、しんみりと話をしてゐるうち、話は自然と、中宮の母六條御息所の事に落ちて、その執念が今もなほ崇りをするのを淺ましく思つた。それで二人で相談をして、六條御息所の靈を慰める爲めに法華八講を行つて供養をした。

○

柏木の死によつて暗雲は去り、女三宮の平靜な尼僧生活と、鈴虫の宴や詩歌に興じる靜かな秋の日の源氏君の生活が描かれてゐる。六條御息所の冥福も祈られる。秋好中宮も出家したい希望を持つてゐる。すべてに秋の暮のやうな落ち着きと淋しみが漂つてゐる。内容は單調、何等の變化もない。作者は、實は柏木の未亡人落葉宮の事を描きたいのだが、それを次の巻で書く以前に、一寸わき道に外れて、女三宮を中心としての、柏木死後の落ち着いた生活を挿入したのである。作者の描かうとしてゐる事件は前巻に續いて次の巻にある。此所にその間に小

い巻を入れて、氣分の轉換を計つたのは、作者の一の筆法であつて、榊の巻から須磨へ移る間の花散里の巻の如くである。

- (一) 常に自分の居室におき又は身に添へ持つ佛を云ふ。
- (二) 佛、法、僧に財産物品善行等を供へて佛道成就を祈る事。つまり佛を祀る事である。
- (三) 邸の名。朱雀院は初め此所に居られたので院號をかやうに申上げるのであるが、今西山の寺に移られたのでその後があいてゐる、そこへ女三宮が移るやうにお勧めになつたのである。
- (四) 卷名の出所。
- (五) これによつて此の日は八月十五夜中秋の夜なる事がわかる。

三十九 夕霧

(五十歳の八月より冬迄の事)
(薫君 三 歳)

眞實人と人から云はれてゐた夕霧も、落葉宮を忘れる事が出来ずして、いつか戀の捕虜となつてゐた。

その頃、母御息所が病身となつたので、落葉宮もともに小野の邊の山莊に移つた。夕霧は何くれとなく世話をして、八月廿日頃、松が崎あたりの秋色を賞しつゝ小野なる御息所を見舞に行き、落葉宮に會つては、あたりの霧の深いのを見て、

山里の哀れを添ふる夕霧に立ち出でむ空も無き心地して

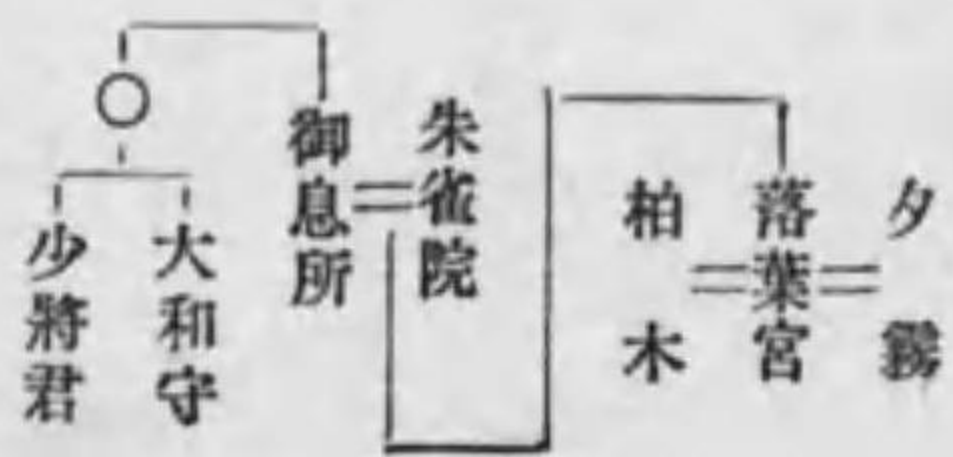
(山里の風情を添へる夕霧の深さに、立ち歸る道筋もわからぬやうな氣持がします。)

と、落葉宮に別れて歸り行く心地もしない胸中を告げた。夕暮の霧に閉ぢられて家の内は暗かつた。女房達は皆御息所の病床に侍して、あたりには人も少い。よい機會と思つて、夕霧は落葉宮の近くに忍び寄つて、心のたけを掻き口説いた。落葉宮は心強く反抗する事も出来ず、夕

霧の傍に引き寄せられて、夜明け方まで語り合つてゐた。翌朝早く夕霧は歸つて行つたが、御息所の病氣の加持をしてゐる律師が、その姿を見付けて、此の二人の戀は將來不幸をもたらすからと云つて、御息所に注意する所があつた。御息所は女房達に聞き合はせて、前の晩に、夕霧が落葉宮の部屋へ泊つたと云ふ事を知り、一時は怒り悲しんだが、やがて爲方がないと諦めて、自ら筆を取り、夕霧に落葉宮を許す意味の手紙を書き送つた。

夕霧が火影で此の手紙を讀んでゐる時、雲井雁は後から近寄つて、突然取り上げてしまつた。そして「私のやうな年寄はお嫌ひでせうね」などと皮肉を云つて、夫婦喧嘩が始まつたので、乳母などは見苦しい事と思つてゐるうち、雲井雁は到頭何處かに手紙を取り隠してしまつた。翌朝早く雲井雁の寢てゐる間に、その邊を探したが、遂に手紙を見付け出す事は出来なかつた。そのやうな事があつて後、夕霧は落葉宮を戀ひしく思ひつゝも、妻の手前を憚かつて、訪れもしなかつた。

小野では、あの時以後夕霧がやつて來ないので、男の心は當にならぬものと、御息所も怨め



しく思ひ、落葉宮もただ泣いてゐたが、到頭その二日後の晩に、御息所の容體が急に悪くなつて、此の世を去つた。落葉宮はその冷い死骸に取りすがつて泣くばかりで、前後不覺の有様であつた。朱雀院からは弔ひの御手紙が参り、夕霧も早速訪れて來た。御息所の甥の大和守が葬儀萬端の指圖をして、夕霧の領地からも家來達を大勢召し寄せて、葬式も終つた。

いつか月日が過ぎて九月になつた。夕霧は毎日のやうに落葉宮を訪れて慰めた。そして、落葉宮おつきの女房の少將の君は大和守の妹なので、夕霧は特別に眼をかけて親しく話をしてゐた。落葉宮は夫に死に別れ、母も此の世を去つて、一層憂き世の無常を感じたので、夕霧の熱い心にも動かされる事なく、夕霧は、落葉宮に逢はずして、空しく歸つて行く日が多かつた。手紙の返事も貰へずして、ただ少將の君の計らひで、落葉宮の手習の歌を得ては、それをせめてもの慰めにしてゐるばかりであつた。

かやうに夕霧が落葉宮に溺れてゐる事を知つて、父の源氏君は、夕霧が六條院へ來た際に、一條御息所の死去の事を話し出して、そのついでに夕霧を諫めようと思つたが、夕霧の眞面目な態度を見ては、かういふ生眞面目な人が一圖に思ひそめた事を諫めてもかひはあるまいと思

つて、誠め諭すやうな言葉は口に出さなかつた。朱雀院も此の噂を聞いて心を痛めて居られた。

夕霧は、落葉宮を小野から一條の邸へ迎へる爲めに、その邸宅の修繕をして、歸館の日を何日と定めた。落葉宮は都へ歸る事を嫌つて、此の小野の山奥で尼になりたいと願つたが、其の願ひもかなはずして、心ならずも一條の邸へ歸つて來た。夕霧は直ちにその邸へ参つて、少將の君に會ひ、落葉宮へ逢はしてくれと頼んだが、落葉宮は塗籠ぬかごの中に寝て、中から鏡をかけてしまつたので、如何ともする事が出来なかつた。失望してしをく／＼とその邸を出て、養母に當る花散里の所へ行くと、花散里は、そなたは落葉宮の所へ通つて行かれるとの事だが、雲井雁が獨り残されてお可哀さうだと、誠めるので、夕霧は、あの鬼々しい意地悪の雲井雁を、可憐な女のやうに仰しやる事だと云つて笑つた。やがて三條の邸へ歸つて來たが、雲井雁は夕霧に顔も會はさず、不貞寢をして、「あなたは私を鬼と仰しやいますね。一層私は早く死んで、鬼になつてしまひたいのですよ」と云ひ放つので、夕霧も慰めの詞に困つてゐた。併しそれでも夕霧は落葉宮を忘れる事が出来ないので、また一條を訪れて、無理に塗籠の中に忍び込んだが、女はただ泣くばかりで、無理な仕業も出来ず、夕霧は一晚を嘆き明かして、その翌日も此の邸

に留まつた。それにつけても、落葉宮は心中嫌氣が増すばかりであるが、夕霧はすっかり一條邸の方に住みついた様子なので、これを見た雲井雁は、眞面目な人が女に溺れるとすっかり心が變つてしまふとの事だが、全くだと思つて、將來の見込もないので、方違かたがひにかこつけて、お里の致仕大臣邸へ歸ると、丁度姉の弘徽殿女御も歸つてゐる時分なので、今までのすさんだ氣持も少しは慰むやうに思はれて、そのまゝ三條邸へは歸らなかつた。此の話を聞いた夕霧は、驚いて雲井雁の所へ行き、或ひは子供も大勢ある中で軽々しい仕業だと怨み、或ひは子供達を皆連れて一條へ行つてしまふぞと嚇して、連れて歸らうとしたが、雲井雁は一向動かうともしないので、致仕大臣が仲裁に入つて、とにかく當分雲井雁をその心のまゝに放つておく事にした。そして大臣は怨みの手紙を落葉宮へやつたので、宮は甚だ迷惑に感じるとともに、一層夕霧を不愉快に思つた。また惟光の娘藤典とよのなほのすけ侍も夕霧とは子までなした仲なので、雲井雁の心中に深く同情して、慰めの手紙を贈つたりした。夕霧と雲井雁との間には八人の子供、藤典侍との間には四人の子供が出來てゐて、それ／＼美しく立派に育つてゐた。

○

此の巻では、更に落葉宮の爲めに、夕霧の平和な家庭が亂される悲劇を書いた。女三宮の爲めに源氏君の家庭の平和は破れた。併しそれは單なる戀愛に出發したものではなくて、もつと複雑な葛藤があつた。さうしてそれは柏木の死によつて終つた。しかもその餘波は、更に柏木の未亡人に對する夕霧の戀となつて、戀愛關係から出發して幸福なる結婚をした楽しい家庭を散散にかき亂した。此の三角關係は單なる戀愛に出發してゐる。夕霧が落葉宮を戀するに至つた所以は、もと友人夕霧の遺言を重んじて、その未亡人の淋しさを慰めようとした、同情の念に發してゐる。これは、例へば「和泉式部日記」に見える、敦道親王と和泉式部の御仲の結ばれる經路とも似た所があり、當時としては普通の、戀愛の成立する過程なのであつたらう。さうして、夕霧は今まで眞面目な人であつただけに、一度戀の奴隸となると、すっかり夢中になつてしまつた。此の經路は極めて自然で、しかもそれが夕霧の性格から、何うしても落ちて行かなければならなかつた必然の運命であるだけに、讀者の心を打つものがある。

此の夕霧を中心としての二人の女性の性格は如何。此の巻には極めてはつきりと二人の性格なり心理なりが描出されてゐる。落葉宮は極めておとなしい實直な性質の人、初めは夕霧の慰

めに來てくれる事を有難く嬉しく思つてゐたが、やがてそれがうるさくなり、母の死後は全く夕霧を嫌ひ出した。これも極めて自然な心理の推移である。落葉宮は妹の女三宮とは全く反對の性格の人で、どちらかと云へば、花散里などに似た性格を持つてゐるが、またそれとも違つて、何處か冷い感じのする愛嬌の少ない人であるらしい。そこが柏木の氣に入らず、若やかで艶めかしい柏木は、寧ろ無邪氣で華やかな女三宮の方を好いたのであらう。併し夕霧のやうに實直な性質の人は、温厚な落葉宮にすつかりまゐつてしまつた。その北方の雲井雁は寧ろ夫と正反對の性格らしく、我儘で強情な、夫を踏みつけて女房天下をふるまふ女らしい。そこが夕霧には飽き足らないので、たま／＼自分の妻とは反對の性質である落葉宮を、反動的にひどく戀するやうにもなつたのであらうが、しかも此の性格を異にする夕霧夫婦が結ばれて、今まで仲よく和合して家庭生活を續けて來た事も亦自然である。かくて此の三角戀愛は甚だ平凡單純な事件であるが、しかもそれはそれ／＼の性格に根ざした自然の運命であつて、作者の描出の態度には一點の間隙もない。又此物語中の傑れた巻と云ふ事が出來よう。

柏木の巻を受けて戀愛葛藤を描いた此の巻は、源氏君在世中の戀愛事件の最後に来るものと

して、全情史中で重要な地位を占める巻である。巻の長さも甚だ長くて、はるかに他の巻を超える。かくて若菜、柏木の巻の葛藤は女三宮によつて巻き起され、それを受けた横笛より此の巻に至る戀愛事件は落葉宮が主因となつてゐる。此の意味に於いて、此の兩戀愛事件を描いた兩部分の女主人公は、此の二人の姉妹によつて代表されると云つても差し支へないであらう。前二巻に落ちついた靜かな情緒を描き、殊に夕霧の平和な家庭を横笛の巻で寫し、此の巻に至つて突如その家庭に波瀾を起させ、しかも前巻にさういふ波瀾を豫想させない巻を置いたのは、作者の巧妙なる例の手段である。さて此の巻の最後は、「此の御仲合なまごの事、云ひ遣る方なくとぞ」(此の人々の關係が何ういふ結末になるかはわからぬ)と云ふ主觀的な言葉で終つてゐるのは、作者のよく用ひる結末の句であるが、かくて作者は此の三角關係の解決をつけずに、此の事件は此所で終らないが如くにしてしかも終結をつけ、次巻以下には此の事は全く出ずに、匂宮の巻に至り、突然萬事が解決してゐる。かやうな省略法も、作者は時として用ひてゐるが、眞に次巻以下の哀調をたゞへた淋しい情景には、此のやうな事件を挿入しない方が、單一の氣分を表現する事が出來て至極よろしいのである。

- (一) 京の一條の通りに邸があつたので一條御息所と呼ぶ。
- (二) 比叡山の麓八瀬の手前にある。
- (三) 京都府愛宕郡にある村。小野に至る道中。
- (四) 卷名の出所。また此の大納言を夕霧と稱するのも此の歌をよみ此の卷に主人公となつて活動してゐるのによる。實名ではない。
- (五) 僧正、僧都、律師は僧官の名でこれを僧綱また三綱と云ふ。全国の僧尼を統治して寺務を司る上位の僧。律師は最下位、僧正が最上位である。
- (六) 此の時夕霧廿九歳雲井雁は卅一歳である。

四十御法

(五十一歳の三月より秋迄の事)
(兼君四歳)

紫上は前年重い病氣を患つて後、健康が恢復せず、次第に弱つて行く様子なので、源氏君は甚だ心配して、二條院に於いて法華經千部の供養を行った。三月の十日なので、折からの花の盛りに、舞の手も、琴笛の音も、興を添へて面白かつた。花散里も明石上も此の式に参列して、互ひに歌を取り交した。紫上は花散里に、

絶えぬべき御法ながらぞ頼まるる世々にと結ぶ中の契を

(佛法もまさに絶えようとする末世になつたけれども、お互ひに本日の式に参列して、來世までも得道成佛の因縁を結ぶ事が出来たので、大變頼もしく思はれます。)

と歌を贈つた。夏になつては暑さの爲めに、一層弱つてしまつた。

その頃、明石中宮も宮中から暫く二條院へ戻つて、久しぶりに母明石上や、養母紫上に對面した。明石中宮には大勢の御子が生れて居られたが、その中にも三宮を紫上は可愛がつて、い

つも自分の傍に引き寄せては心を慰めてゐた。そして、成長なすつたら、此の邸に住んで、對^{たい}屋の前にある紅梅と櫻とを可愛がつておやりなさいと教へたりした。秋になつて次第に涼しくなると、紫上も少しは心地が爽やぐやうであつたが、明石中官が紫上と手を取り交して泣く泣く別れを告げて宮中へ歸らうとした時、急に病が重つて、その夜一夜悩み明かして、遂に曉方に、紫上は空しく此の世を去つてしまつた。人々の悲しみは云ふまでもないが、源氏君は心強く葬式の用意などを指圖してゐた。八月十四日に死んで、葬儀は翌十五日の曉に行はれた。致仕大臣は、夕霧大將の母なる故葵上のなくなつたのも此の頃だつたと、悲しく思ひ出された。源氏君は、葬式がすむと心がゆるんで、涙の干る時もなく鬱々と明し暮して、たゞ阿彌陀佛を念じてゐた。致仕大臣からも、秋好中官からも、慰めの手紙を源氏君に贈つた。

○

紫上は遂に死んだ。享年四十三。源氏君の晩年はいよ／＼寂しい。此の巻は物語の女主人公、紫上の死を敘する事が中心となつてゐる。これは作者の何うしても描かざるを得なかつた所であらう。物語もいよ／＼最後に近づいた。前巻の葛藤を突如排して此の死の場面を描いた

のは、作者が煩雜な事件を描くに堪へ切れなくなつたのか、それとも大省筆をこゝに試みて場面を轉じた作者の才氣から出たのか。恐らくは後者であらう。

なほ、紫上を葬る所は、最初の桐壺の巻の、桐壺更衣を葬る時の文章と甚だ似たものがある。彼より簡潔で餘情なく、源氏君の悲しみを寫す筆の、到底更衣の母の悲しみを寫す文に及ばざるは、終結へ急ぐ、此の巻の文の調子が、何處かあわたゞしいのによるべく、葬儀の場面を二度出して、同一の描寫となつたのは（夕顔を葬るが如きは、それと全く趣が異なつて、かやうな事がなら興味が深くなるが、此所はそれと違ひ、全く同様の場合の同様の描寫である）、作者の癖が知らず／＼の間に現はれたものであらう。此の巻は、これらの點で、遺憾な所も少くない。紫上の大往生といふ主要事件を描くには、筆力の足りないものがあるのを覺える。昔から此の巻が、さういふ内容的には重要な性質を有してゐるものであるのかゝはらず、重んじられてゐないのは、かういふ所に原因があるのであつて、作者の筆力が衰へたとはいへないまでも、書き進めるのに、稍々倦怠を覺えた所があるやうに思はれる。

- (一) 多くの人に頼んで書かせた千部の法華經を供養する儀式。これは病氣恢復の祈禱にするのである。
- (二) 當時の供養の儀式には必ず舞や音楽を催して興を添へた。
- (三) 卷名の出所。
- (四) 釋迦の教に正法像法末法とて三の時期があり、次第に佛法が棄たれ行はれなくなつて末法の時に至つては教のみあつて行と證とがなくなると云ふ。かくて佛法の全く亡ぶと見えた時に再び如來佛出現して世を照らすと教へた。此の末法を又末世と云ふ。
- (五) 匂宮と云ふ。宇治十帖に薰君と並んで副主人公になる方。

四十一 幻

(五十二歳の正月より十二月迄の事)
(薰君 五 歳)

春になつて、人々は年賀に参るけれども、源氏君の心は涙にかき昏れて、悲しさは變らなかつた。女達の所にも行かずに、たゞ紫上の菩提をとむらひつゝ、心中には思ひ出す事のみが多かつた。時には紫上おつきの女房達を召し集めて、思ひ出話しに憂さを遣る事もあつた。併し他の人々には顔も合はさず、夕霧にさへ快くは會はなかつた。その中にも、たゞ孫に當る明石中宮の三宮だけを手許に置いて、朝夕の慰めにしてゐた。

二月になつて、花盛りの時分になると、源氏君も勿論の事であるが、殊に三宮は、二條院の對屋の前の櫻と紅梅とを紫上の形見として大切にし、眺め暮らして居られた。源氏君が六條院に立ち戻つて、明石上の所へ話をしに行つても、源氏君の心は少しも慰む事が出來ずして、ただ紫上の事だけが思ひ出された。

葵祭の頃、五月雨の頃も過ぎ、七月の七夕の晩も變つた事はなく、八月になつて一週年の忌

日には、かね／＼夕霧と相談しておいた通りに、紫上が信仰してゐた曼陀羅の供養を行つた。
九月九日の節會も過ぎて、十一月時雨の夜、源氏君は夕暮の空を眺めつゝ、
大空を通ふまぼろし夢にだに見え來ぬ魂の行方尋ねよ

〔まぼろし〕は魔法使の事。此の歌は、白樂天の長恨歌に詠まれた、道士が、唐の玄宗皇帝の旨を受けて、蓬萊の島に揚貴妃〔楊太眞〕の魂の在所を尋ね當てた故事を思つて詠んだ歌。空中飛行自在の道士の魂よ、我が戀ひ慕ふ亡き紫上の、夢にもその姿を見せぬ魂の行方を尋ね出して呉れ。〕
と口ずさんだ。

十一月の五節の節會も過ぎて、年の暮になつた。源氏君もいよ／＼出家遁世の志を固めたらしく、殘しておいた紫上の手紙、その他の女の手紙も、皆破り捨ててしまつた。御佛名に列するの今年ばかりかと思ふと、さすがに名残りが惜しかつた。新年の用意も今度が最後だと思つて、特に心をこめていろ／＼の準備をさせた。

紫上死後の淋しい源氏君の一ケ年の生活が記されてゐる。いよ／＼源氏君も晩年となつて、過去の榮華名譽も今はなく、たゞ出家遁世だけを願つてゐる。御法とか幻とかいふ卷名も、寂しくはかない心持を現はしてゐる。かくて作者は、無常を感じ、佛法に親しむ主人公の心持に、同感共鳴してゐるとも考へられる。有爲轉變、極まる所はたゞ寂しい人生のみ、とも作者は觀じた事であらう。かくて源氏君の一生は終る。作者は源氏君について書くべき事を書き盡した。

此の卷は特に他の卷と異つた體裁を保ち、日記體に記されてゐる。毎月の行事を出して、一年間の生活を記し來つたのは、紫式部日記などと等しい内容を持ち、特に他の卷よりも和歌を豊富に入れてゐる事も日記的である。思ひ出に親しむ源氏君の生活を描くには、これが最もよい體裁を持つてゐると思はれる。若菜下の卷の如き長篇でも挿入の和歌は漸く十九首、此の卷は甚だ短いのに廿六首を含む。此のやうな體裁は此の卷だけである。

さうして、此の部分は、はるかに前の、六條院の豪華な四季折々の行事生活を描いた初音の卷以下の諸卷に對してゐる。同じ年中行事的な敘述を中心とするとしても、彼の華美と此の暗

澹、彼の歡喜と此の悲嘆とは、作者の描かうとしてゐる人生變轉の相である。これだけでも、作者は此の物語を描く意圖を十分に盡してゐると云つてよい。但し、長恨歌のまぼろしの歌が、最初の桐壺の巻で、桐壺帝がなき桐壺更衣を慕はれる所にも出てゐたのに、又此所でも出てゐるのは、前卷の葬儀の場面と同様の、同じ事がらに關する同じ材料の重出の感がなくもない。

- (一) 梵語 Bodhi。覺とも智とも道とも譯す。死後の成佛を得る事。
- (二) 五節句の一で乞巧奠と云つて牽牛織女の星祭りが行はれた。
- (三) 梵語 Mandar。輪圓具定とも聚集とも譯す。種々の種類があるが、此所は極樂淨土の諸相諸佛を圖示した繪である。
- (四) 重陽の節と云ふ。當日宮中で酒宴が行はれ菊酒を賜はつた。
- (五) 卷名の出所。
- (六) 道教を修して仙術を自在に使ふ人。方士、術士とも云ふ。
- (七) 諸佛の佛名を唱へて罪障を懺悔する法會。毎年宮中で十二月十五日から十七日まで三ヶ夜行はれる。

- (八) 此の當時の女流の日記は、和歌を豊富に入れて年月を明瞭に分たずに、ただ諸種の行事儀式等を追憶的に記したものが多し。
- (九) 須磨の巻の如きは四十六首歌が出てゐるがこれらは例外である。但し須磨の巻は流謫の生活が追憶的な日記體に書かれたものとも見られる。實際源氏君自身須磨で繪日記を書いてゐるのである。かういふ單調陰鬱な生活は日記隨筆體で書くのが最もよい。

〇 雲

隱

(薰君六歳より十三歳迄を含む)

此の卷は卷名のみ傳はつて物語の本文はない。併しよく考へると、此の卷の名も、もと作者が名付けて存してゐたものか何うか疑はしい。第一に安居院聖覺(藤原通憲の孫、澄憲の子、嘉禎元年(一八九五年)歿)が鎌倉時代の初め頃に書いたと思はれる「源氏物語表白」は、此の物語中の卷名を全部読み込んだものであるが、それには雲隱といふ名だけが缺けてゐる。第二に、源氏物語の註釋書の最も古きもの一つである、藤原定家の「源氏物語奥入」にも、此の卷の名がない。但し、これには井の順序が出てゐて、それによると「雲隱廿六」を飛ばして、「幻廿五」から「匂兵部卿宮廿七」に移つてゐるから、この井の順序の數字を認めるなら、必ずしも、當時雲隱がないといふ證據にはならない。反對に雲隱の存在を肯定する材料となる。第三に、定家卿の作と言はれてゐる、源氏物語の各卷を読み込んだ五十四首の歌が傳はつて居り、文安六年(一一〇九年)には祐倫がその註釋書「山頂湖面抄」(又水原抄ともいふ)なる

ものを作つてゐるが、これにも雲隱の名を読み込んだ歌は出てゐない。

かやうに鎌倉時代の初頃のものには全く雲隱の名は見かけないのであるが、鎌倉時代中期以後出來た諸種の註釋書、釋素寂の「紫明抄」や、行阿の「原中最秘抄」以下には何れも此の名が見える。正應四年(一九五一年)になつた「源氏物語詩」は、一卷毎にその旨趣を七言律詩に賦したものであるが、これにも雲隱の名だけは出てゐる(詩はない)。前記聖覺の表白文を撰して漢文に作つた「源氏物語願文」にも雲隱の名が入つてゐるが、これは室町時代の作なる事明かである。此のやうに論じて來ると、雲隱の卷なる名はもと存せずして、鎌倉時代中期頃に作り出されたものであるかとも考へられる。

然るに、かういふ意見を否定すべき有力なる材料が橋本進吉博士によつて見出された。それは白造紙(雁中抄の原本と思はれる。後鳥羽天皇の正治元年または二年頃に書かれたるものなる事卷中に證あり。原本高野山正智院藏。寫本東京帝大國語研究室藏)の源氏目錄の中に、「廿六クモカクレ」として此の名前が出てゐる事である。これによつて平安時代末にかくの如き名の存してゐた事が知られるので、作者が此の卷だけをもと作らなかつたといふ説も少し怪しく

なる。殊に此の目録には、他に續篇の名もあげてゐるので、かういふ續篇とともに、此の巻の本文も何かの事故で失せてしまつたと考へられぬ事もない。前の奥入の并の順序の事も此所では考慮に入れる必要がある。また源氏表白等にその名が見えないのも、單に本文がないから讀み込まなかつたのだと言へば、それでも議論が成り立つ。要するに此の問題は未だ未解決の状態にあるのである。

さて源氏五十四巻といふ事は、更級日記に、「源氏の五十餘巻」と出てゐて、必ずしも五十四巻に限らぬやうであるが、併し五十四巻と言ふ事も古くから言ひ慣はされてゐて、定家卿の「明月記」嘉祿元年（一八八五年）二月十六日の條にも「令書源氏物語五十四帖」と見え、定家時代から五十四帖と言はれてゐた事は確かである。もと巻とか帖とか云ふのは、巻物又は冊子の數によつて數ふべきであるから、五十四巻（帖・冊）と云へば、必ず五十四の數だけなければならぬはずであるので、若菜の巻は餘りに分量が多いから、必ず二巻に分綴しなければならず、然らば、此の雲隱の巻が當時あつたとすれば、全部で五十五巻（冊）になるから、五十四巻と云ふ巻數に合はぬ。故に少くとも定家時代には雲隱の巻はなくて、これを除いて全五十四巻

あつたものと考へられる。

此所に、雲隱の巻の名のみ作者が名づけて初から本文が存しなかつたのか、本文ももと作者が書いたが後間もなく失せてしまつたのか問題になる。作者が巻名のみ付けて、本文を書かなかつたといふ説は、雲隱以後の巻は完成してゐるのであるから、これのみ書かないといふ理由がない。次に本文ももつたが後間もなく此の一帖だけが紛失したものとすれば、後世に傳はる諸本が、平安時代末にも少くとも七八種はあつたらしいが、何れも雲隱の巻を存してゐなかつた事は奇妙な現象であつて、それらが皆、雲隱の巻を缺く同一本から出た同一系統の本のみであつたとは考へられないから、始めから雲隱の巻の本文を作者は書かなかつたものと解釋しなければならぬ。

一體雲隱とは人が「死歿」するといふ意味なので、恐らくは後の人が、幻の巻と次の匂宮の巻との間に、源氏君薨去の意味を含めて、此の間に源氏君が「雲隱」したと源氏の目録に書き加へた書入であつたのが、いつか本文の巻の名のやうに誤られたのではあるまいか。但し、これも一の推測なので、別にそれを主張するのではないが、私にはさう考へた方が、種々の事情

から合理的であるやうに考へられる。但し、平安時代末には、既に雲隱といふ名が存在してゐた事は確かであると考へる。

室町時代には「源氏雲隱」と云ふ續篇の小説が著はされて、源氏六十卷ともその總數を大凡に云ひ慣はされてゐたのによつて、六卷が継ぎ足された。但し此の六卷は雲隱の名も含まれてゐるが、全體としては宇治十帖の後、即ち源氏物語全部の續篇となるので、幻の巻と匂宮の巻との間に入るべき内容のものではない。又、雲隱六帖といふものがある事は、古く鎌倉時代より云はれてゐた所で、既に早く、かやうな續篇小説が著はされてゐた事と思はれる。

さて此の巻の本文が存しないと云ふので、古來種々の付會説が行はれたが、何れも信すべき説はない。作者は、淋しい源氏君の晩年を幻の巻に於いて描いて、それで十分であると感じたのである。そして直ちに次の巻に「光隠れ給ひし後」と書き出して、源氏君薨去の事を含めた。讀者も亦これで十分満足を感じる。紫上が御法の巻で死し、更に源氏君薨去の狀を詳しく記すほどの要求を感じない。むしろそれでは、重複の感を與へる事になるであらう。作者が此所で、此の事を省略して、直ちに次の巻に移つたのは、甚だ賢明な書き方と思はれる。一體ある

人の一生を描いた小説には、大抵その人の誕生と最後とを描く事を普通とする。此の作品は寧ろその後者を省略した所に作者の非凡な才能を窺ふ事も出来る。夕霧と落葉宮の事件も全く省略に付されてゐるのである。

但し此の省略せられた部分は八年の歳月を含み、その間の源氏君の生涯は、宿木の巻の、宇治の中君に語る薫君の詞の中に、

「故院失せて後、二三年ばかり末に世を背き給ひし嵯峨院にも、六條院にも差し覗く人の心治めむ方なくなむ侍りける」(故源氏君が死なれて後は、源氏君が晩年の二三年間を出家して隠遁された嵯峨の御堂にも、またその邸宅なる六條院にも参る人々の心は、源氏君在世中の事が思ひ出されて悲しみに堪へなかつた。)

とあるのによつて、源氏君は出家隠遁して嵯峨の御堂に住し、二三年して薨去した事が明かである。又その間に朱雀院が崩じられ、螢兵部卿宮、致仕太政大臣、髭黒太政大臣等も薨じた。

以上で源氏君を主とした一代の物語は終つた。しかもなほその關係者遺族の人々が残つてゐる。それらの人々の事も書いて、結末をつけなければならぬ。さやうに思つて、作者は次の三

卷を書き続けた。しかも作者の胸中には、その時既に、他の新しい物語を描かうといふ希望を持つてゐた。そこで此の三巻が終つた時に、作者の感興は一轉して、更に新しき構想と筆致を以つて、此の物語の續篇でありながら、しかも全く違つた内容を持つ一の物語を書き出した。源氏君は既に死し、源氏時代は終つた。それ以後は、表面源氏君の子であり、實は柏木の子にして、數奇の運命に弄ばれる薫君が主人公の位置に立つ。さうして、又實に、源氏君の實子の、既に人生の生活を過半味ひ盡した年齢なる夕霧(薫君十四歳の時夕霧は年四十)ではなくして、此の薫君の少年時代から青年時代が以下の物語の時期となつてゐる。かくて源氏時代は此所に終り、薫君時代が次巻以下に展開されるのである。

(一) 此の説は藤岡作太郎博士の「國文學全史」に初めて出た。

(二) 北村季吟の「源氏物語湖月抄」に付いてゐる。黒川春村の「古物語類字抄」にも諸本を校合して收む。又大和田建樹氏の「謡曲評釋」源氏供養の註にも全文を載す。八洲文藻にも入る。

(三) これは野村八良博士の説。「國語と國文學源氏物語號」にあり。

(四) 群書類從物語部に收む。

(五) これは山岸徳平氏の説。「國語と國文學源氏物語號」に出づ。

(六) 寫本内閣文庫、宮内省圖書寮藏。歌だけは前記源氏物語號に出づ。

(七) 近頃「未刊國文古註釋大系」に收めて續刻せらる。

(八) 群書類從物語部所收。

(九) 寫本内閣文庫藏。群書類從文筆部にも出づ。但し内閣文庫本には宿木の一名良鳥とあるべきを良馬と書いたやうなひどい間違ひがある。

(一〇) 群書類從物語部所收。

(一一) 五十四卷の宛字ではない。御物本の定家筆更級日記にも漢字でかやうに記されてゐる。

(一二) 萬葉集には人が死ぬる事を「雲隠れにき」などと歌つた歌もあるが、此の作者は「雲隠れにき夜半の月かな」とか或ひは須磨の巻の源氏君の歌にも「眺むる月も雲隠れぬる」の如く月が雲中に隠れる意味に多く使つてゐるやうである。

(一三) 前の、明石の巻の一名浦傳の巻と言ふ意味で拾芥抄に書き入れたのを後人が一の巻の名と見誤つた如きも同じ例であらう。

(一四) これによつて此の物語は天臺六十巻に擬すなどと云ふ付會の説が現はれた。(神の巻には「六十

「卷といふ文詠み給ひ」と天臺六十巻の事が見えてゐる。平安時代末の著なる今鏡には源氏六十帖まで成れるよしを云ひ、鎌倉時代の中頃に成つた「無名草子」にも源氏物語の總數を六十巻と言つて、古來大約の數をかく稱した。室町時代に至つては、永正七年の慈元抄上巻（群書類從所收）に「源氏物語の巻の數は天臺六十巻を表せりと云ふ一説あり」とあるのを初め細流抄の大意にもこれについて論じ、お伽草子の「紫式部の巻」（有朋堂文庫所收）等に天臺六十巻を型取つたと云ふ説が數多見える。

（一五）室町時代の「源氏小鏡」文安の「山頂湖面抄」等に出てる雲隱の六帖といふのは、その古いものであらうが、現在傳はる雲隱六帖は室町時代に出來た新しい作品と思はれる。

（一六）天臺の教義によつて解釋したり毛詩の例を引く（湖月抄參照）などは何れも無用の事である。毛詩の如きは篇名あつて本文なき傍證とはなるが今はそれと事情が違ふらしい。その他榮華生活の權化なる源氏君の薨去の事を作者は記すに忍びなかつたのであらうとか種々の説がある。

續篇 薰君時代

前紀 少年期——薰君と匂宮の話

源氏時代より薰君時代へ

四十二 匂宮

宮

(薰君十四歳の春より二十歳の正月迄の事)

一名 匂兵部卿

一名 薰中將

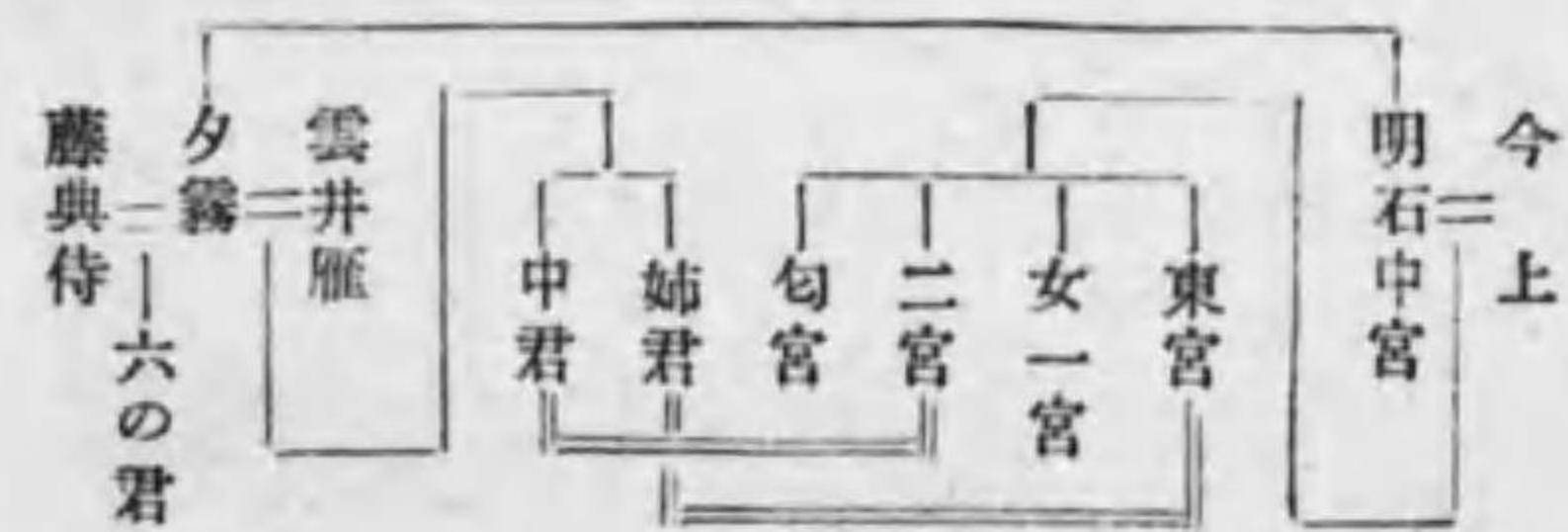
源氏君薨去の後、その後を受け継ぐだけの器量を持つてゐるものは子孫の中にもなかつた。たゞ源氏君の孫にあたられる今上の三宮と、此の三宮と一所に六條院で成長した女三宮の若君と、此の二人が優れた青年であると評判せられてゐたが、それも飛び抜けた美しさではなくて、普通の人に較べてやゝまさつてゐるといふだけの事である。三宮は紫上に育てられたので、その遺言に任せ、今も二條院に好んで住んで居られる。元服して兵部卿の宮と申し上げる。その姉君の女一宮は六條院内の紫上の住んでゐた舊宅に住まひ、御兄の二宮は夕霧右大臣

の二番目の姫君と結婚せられた。此の方は次代の皇太子と考へられて居られる方である。

夕霧右大臣には子供が多く、長女は東宮に参り、匂宮にも一人貰つて頂きたいとの話があるが、匂宮は一向相手にしなかつた。その六番目の姫君は今若い貴族の間に評判となつてゐる女である。

源氏君薨去後、花散里は二條院の東院を遺産に貰つて、そこに移り住み、女三宮は三條宮へ移り、明石中宮は宮中にばかりゐて、六條院は淋しかつたので、夕霧は落葉宮を花散里の住んでゐた跡へ引き取つて移り住ませ、此の落葉宮と三條邸にゐる雲井雁との所に、一月の半分づゝを交代に通つて、三人の間が圓滿に治まつてゐた。明石上も、明石中宮がお生みになつた宮達のお世話をして平和に暮らしてゐる。併し人々は、折にふれて源氏君や紫上の事を思ひ出して、追憶にふける事が多かつた。

女三宮の若君は、源氏君の頼みによつて、冷泉院先帝と秋好中宮が、皇子もお生れにならず



淋しく思つて居られた時なので、喜んで手元に引き取り育てて居られたのである。元服も冷泉院で行はれた。十四歳の二月には侍従となり、秋には右近中將となつた。中將は子供の時、自分分は源氏君の實子ではないといふ事をほのかに聞いて、幼心地にもいぶかしく、又淋しく思つて、それが中將の心をいつも悩ましてゐるのであつた。母女三宮が何の爲めに若くして出家したか、それも疑問の一つであつた。此の中將は容貌の美しいばかりでなく、高い芳香を身體から發して、遠く放れてゐても直ぐにそれと知れるほどである。兵部卿宮もまた常に此の中將と相並んで、いつも一所に遊び戯れ、何事にも競争をしてゐたので、負けずに種々の香を身につけて、劣らずよい匂ひを追風に匂はせて居られた。たゞ中將に比すると、あまりに柔弱な、また不真面目な所があつて、特に色好みであるといふ噂が高かつた。世間の人々は、此の二人を匂兵部卿宮、薰中將と並べ稱して、評判の青年である。

冷泉院には皇子は居られなかつたが、ただ一人、柏木の妹なる弘徽殿女御の御腹にお出来になつた女一宮を、掌中の玉として育てておいでになつた。此の女一宮に薰中將は想を懸けてゐたが、真面目なその性質は同じ邸内に住んでゐても、ひそかに人の許さぬ戀を遂げるやうな事

はしなかつた。十九の年には三位の宰相と中將とを兼ねた。その頃、落葉宮は子供がなくて淋しいので、夕霧の六の君を引き取つて世話をした。薫中將二十歳の正月には、六條院で賭弓の還饗が設けられ、薫君匂宮はじめその他の貴公子が皆集まつて、歌舞酒宴に興じた。

○

開卷「光隠れ給ひにし後」と書き出して、光源氏君は既に此の世を去つてゐた。夕霧と落葉宮、雲井雁との三角關係も圓滿に終結してゐて、夕霧は月の十四五日づゝを兩方で暮らすといふ圓滿ぶりである。

幻の巻で薫君は五歳、此の巻には十四歳と出てゐて、その間八年の歳月が空白となつてゐる。更に此の巻では、十四歳から十九歳に飛んで、五年を経過してゐる。これは丁度、源氏君の生立を述べた桐壺の巻に年月の飛躍があり、更に桐壺の巻から帶木の巻に移る間に四年の空白を存してゐると似てゐる。此の巻は、源氏君の生立を敘した桐壺の巻の如く、薫中將の生立を述べるのが主となつてゐて、本文に入る序幕を開いたもの、味も實もないのは當然である。

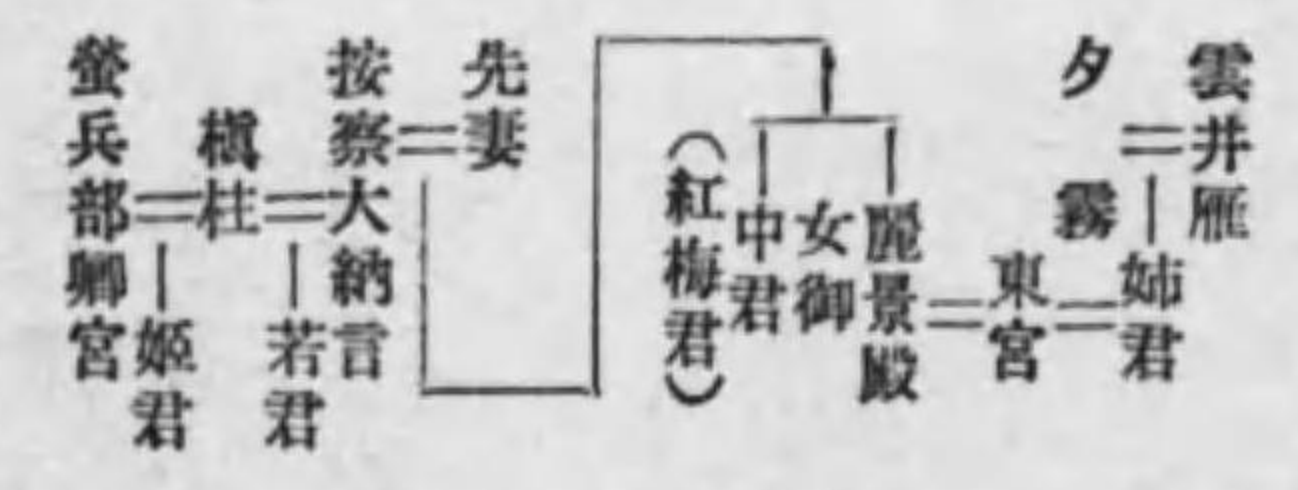
それとともに、源氏君薨去後の人々の跡始末をそれ／＼つけて、その残務を處理したやうなもの。いはば源氏君を中心とした前の部分から、薫君を中心とする後の部分に移る橋渡しの役をしてゐるのである。一方では前篇の收拾に忙がしく、一方では後篇開幕の準備をととのへてゐる。面白い巻ではない。

匂宮は此の後篇の副主人公、丁度前篇において、青年時代の源氏君に頭中將が附いてゐたやうなもので、シテに對するワキ役である。但し匂宮は、源氏君に對する頭中將以上の重要な役目を勤める色悪である。此の人及び薫中將の性格は、此の巻に可成り詳しく述べられてゐて、後に悲劇を發展させるであらう暗示が與へてある。さうして、二人の性格は前篇の終の方に出了た夕霧と柏木とのそれに似た所がある。薫君は夕霧と同じく眞面目な性質、匂宮は柏木の色つばい所に似てゐる。更に溯つては、薫君に源氏君の面影があり、匂宮に頭中將の姿がある。併し此の對立した兩性格は、血統の遺傳と少しも關係のない所に、作者の近代自然主義的科學的觀察を缺除した王朝作家らしい着想がある。

- (一) 匂宮といふ。
- (二) 薫君といふ。
- (三) 夕霧に子供の多い事は夕霧の巻の終にも出てゐた。
- (四) 六の君といふ。惟光の娘藤典侍との間に出来た姫君。
- (五) 御父朱雀院の故宅。
- (六) 卷名、又名の出所。
- (七) 源氏君は一たん女を愛するといつまでもその女の世話をしてこれを見捨てなかつた。暖い同情に富む心、温和な心は薫君の宇治の姫君に對する心持と似てゐる。
- (八) 頭中將にはふざけた戯れ心があり色めかしく嫉妬心の強い片意地な所が匂宮と似てゐる。

四十三 紅 梅 (薫君二十四歳の春より冬迄の事)

その頃、按察大納言といふ方は、柏木の弟であつて、上品な且つ華やかな人であつた。以前の北方は死去して、今の北方は即ち髭黒大臣先妻の女横柱上である。横柱上は夫の螢兵部卿薨去の後に、此の人の後妻となつた。大納言には、先妻の腹に女の子が二人、横柱上との間には男君が一人生れてゐる。かやうな場合には、繼子苛めなどといふ事もよくあるのであるが、横柱上は分け隔てなく可愛がつて育ててゐた。長女は今年十七八歳、東宮には夕霧の姫君が既に女御となつてゐるが、また此の姉君をも東宮に參らせて麗景殿女御と言つた。横柱上もそれに付き添うて宮中へ參つたので、後に残つた二番目の女、中君も、また此の家に引き取られてゐる横柱上と螢兵部卿宮との間に出来た姫君も、寂しく思つてゐた。大納言は此の妻の先夫の姫君をも疎々しくせず、



親切にしてやつて、かやうに繼子繼親が寄り合ひながら圓滿な美しい家庭を作つてゐた。

大納言は中君を匂兵部卿官に娶せたいと思つてゐるので、機會あるごとにその事をほのめかした。匂宮は横柱上の腹の若君を遊び相手にして、宮中でも若君を見付けると、よくからかつたりする。今日しも軒端の紅梅（三）が美しく咲いたので、大納言はその花を折り取つて、

心ありて風の匂はす園の梅（三）に先づ鶯の訪はずやあるべき

（先づに待つを寄せた。鶯を匂宮に、園の梅を中君に譬へる。私は中君をあなたに差し上げたと思つて、その事をいつもあなたにほのめかして、あなたのお出でを待つてゐるのですから、是非一度中君を訪れてやつて下さい。）

と書いた文とともに、疊紙（たたりがみ）に挿んで、若君に持たせて宮中へ遣はした。匂宮は、いつもの通り、若君を捉へて遊んでゐると、その時若君は父からの手紙を匂宮に渡したが、匂宮は躰のよい逃げ口上を書いて、返書とした。

横柱上は麗景殿女御を宮中に残して、歸つて來た。そして宮廷内の話をいろ／＼してゐた。

螢兵部卿官の姫君は、未だ年に行かぬが慎み深い物靜かな人である。匂宮は此の人に人知れ

ず心をかけてゐたのだが、思ふその人とは違つて、大納言は自分の實子の中君の婚にと望んだので、匂宮は色好い返事をしなかつたのである。その頃好色家の匂宮には關係した女が多く、宇治（二）の八宮の姫君の所にも熱心に通つてゐた。

○
此の巻は横柱と紅梅大納言の事が主として描かれてゐる。横柱は即ち髭黒の姫君であつて、横柱の巻に續いて、若菜下の巻で螢兵部卿官の北方となつた。螢兵部卿官は温和な趣味深い人であつた。横柱も亦おとなしい何ちらかと言へば優しい女性、横柱の巻では、母とともに、色に迷つた父親を見捨てて、母親と寂しく里方に引き取られて行く可憐な少女として描かれてゐた。此のおとなしい女性と螢兵部卿官との結婚は、適當な組合せで、女縁に薄かつた螢兵部卿官は、實は此の横柱と結婚させる爲めに、作者が他の女を興へなかつたのである。かくて横柱はよき夫を得て幸福になつたかと思はれたが、その螢兵部卿官にも死に別れて、またいつか紅梅大納言の北方となつてゐる。そして幸福な生活を送つてゐる。紅梅大納言も亦優しいよい夫であるらしい。神經質で浮氣っぽい兄の柏木とは大分違ふ。併しかやうに夫に死に別れ、連子

をして他の男に身を任せなければならなかつた横柱は、結局運命に恵まれぬ女である。此の物語においては餘り重要でなく、一寸しか出ない此の横柱は、讀者に、妙に寂しくわびしい、併しはつきりとした印象を與へる。夕顔と何處か似た感じを與へる女性である。

此の卷において、横柱や紅梅大納言及びその子供達の事を主として描いたのは、前篇に残された人物の終結をそれ／＼つけるが爲めで、重要人物柏木について、その弟の事も書き添へて、結末を示す必要がある。又匂宮の好色の事、就中卷の終の方に、宇治の八宮の姫君の所に通つてゐる事を書き加へたのは、後の重要な物語の筋に關係をもたせたので、本筋に入る緒口を一寸此所に示してゐる。此の意味で此の卷は、匂宮の卷と同様に、前篇の團圓をつけ、後篇緒口を開く兩部の橋渡しとなつてゐる。

(一) 此の卷に主として出るので紅梅右大臣といふ。此の人は始めて櫛の卷に出た。

(二) 紅梅君、又紅梅の御方といふ。これも實名ではない。

(三) 卷名の出所。

(四) 此の事は詳しく總角の卷に出てゐる。

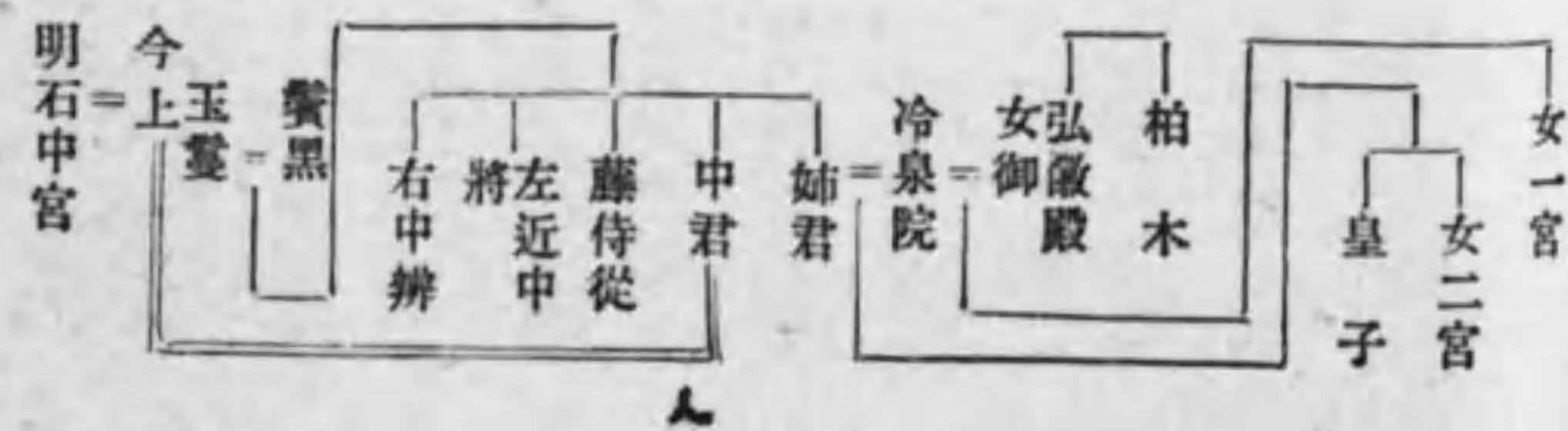
四十四 竹 河

(薰君十四五歳より二十三歳の秋迄の事)

次の話は、髭黒大臣死去の後に、髭黒に仕へてゐた老女房の話したところである。

故髭黒と玉鬘なまじのかけ侍との間には、男子三人女子二人が出来てゐた。そして髭黒は情に乏しい愛憎常なき人であつたので、親しい人もなくて、その薨じた後は誰も訪れるものもなく、玉鬘は子供達と寂しく暮らしてゐた。たゞ夕霧右大臣のみが相變らず親切を盡した。

髭黒在世中、姫君は今上へ入内させようと思つて、帝にも内々その事が奏してあつたので、最近にも、早く入内させよといふ仰せがあり、冷泉院も以前玉鬘を得る事が出来なかつた代りに、此の姉君を宮仕へさせるやうにと懇望されたので玉鬘も迷つてゐた。此の姉君は美人の評判が高いので、心をか



けてゐる人が多く、夕霧の五男、藏人の少將は奪ひ取つてしまひたいほどに思ひ込み、冷泉院の可愛がつておいでになる四位の侍従、即ち當時十四五歳の薫君も懸想人の一人であつた。

翌年の正月元日に、紅梅大納言や夕霧右大臣、及びその子息達、其の他澤山の人々が玉鬘邸に年賀に来て、また三條宮に女三宮をも訪れた。その夕方には、薫君が玉鬘邸にやつて来た。越えて廿日過ぎ、梅の花盛りに、薫君はまた玉鬘の息藤侍従の所に遊びに来た。折から、これも此の邊によくうろついてゐる藏人の少將もやつて来たので、一所に玉鬘の前で、竹河(三)を歌つたりして、酒宴に時を過した。翌朝薫君は藤侍従に手紙を贈つた。それには次のやうな歌が書いてあつた。

竹河(三)のはし打ち出でし一節(ひとし)に深き心の底は知りきや

〔「竹河の橋」は催馬樂の一句。此の催馬樂は、男が若い女と同棲したい希望を歌つたもの。はしは橋に端をかけた。此の竹河の歌を昨日私が歌つて、心中の一端をお知らせした事によつても、姉姫君に深く心をかけてゐる事を察して下さい。〕

姫君は此の時十八九歳、美しい盛りである。兄君は藤侍従の他に、左近中將と右中辨があつて、年頃廿七八の程で、何れも父鬘黒の遺志を違へずに、此の姫君を立派な人に嫁がせたいものだと思つてゐる。

例の薫君と藏人の少將はその後足繁く訪れて、はかない戀を慰め、藏人の少將は母雲井雁を責めて、玉鬘の姉姫君を妻に貰つてくれと願つたが、玉鬘はその話を聞いて、姉君は冷泉院へ差し上げて、代りに中君を少將にと思ひ定めた。そして四月九日に姉君は冷泉院へ参つた。その際の儀式も夕霧右大臣が盛んにしてやつた。姉君は、冷泉院へ参るに際し、別れの手紙を少將に贈つたので、それを見た少將は涙が止まらなかつた。その後玉鬘は、中君を藏人の少將へ嫁がせようとして相談したが、少將は耳にも入れなかつた。今上も、姉君が冷泉院へ参つたと聞いて、立腹されて、左近中將に官仕へのおろそかな事をお責めになつたので、中將は母玉鬘に、中君を姉君の代りに入内させる事を勧めた。七月には姉君が懐胎した。

翌年正月男踏歌があつて、薫君や藏人の少將もその一人として、冷泉院に参り、姉姫君の事を憶つて感慨が深かつた。四月には姉君に女官がお生れになつた。その頃玉鬘は決心して、今上の妃明石中宮に氣兼ねしつゝも、ついに中君を自分の代りに、尙侍(なうじのかみ)として宮中に出した。今

上は、美人の評判高き姉君を失つた事を物足りなく思はれたが、此の中君も上品な人なので、寵愛しておいでになつた。何年か過ぎて、玉鬘の姉姫君には又冷泉院の皇子がお出来になつた。弘徽殿女御は今まで耐へてゐたが、自分には女の御子が一人しかなく、姉姫君の方には皇子がお生れになつたのを見て、嫉妬のあまり、事に觸れて姉姫君を苛めるやうになつたので、姉姫君は居たゞまれずに、お里に歸つて居る日が多かつた。

藏人の少將は三位の中將となつて、左大臣の姫君と結婚したが、なほ玉鬘の姉姫君の事が忘れられずに、惱んでゐた。薫君も宰相の中將に出世して、匂ふや薫るやと、人々にその容貌をほめられ、世間からは尊敬せられるやうになつた。玉鬘はそれを見て、姫君を貴い方にさし上げずに、かへつてかういふ人々と結婚させたなら、今のやうな心配もなかつたであらうのと、今更残念に思つてゐた。

薫君は此の頃は、宇治の姫君に心をかけてゐる時分である。

やがて竹河左大臣は死んで、夕霧が代りに左大臣となり、薫中將も中納言に、三位の中將はその頃二十七八歳で、宰相となつた。紅梅大納言も右大臣に昇進して大饗が催され、來客の一

人薫君の立派な様子を見て、此の人に自分の娘をやりたいと思つた。玉鬘の息左近中將は右兵衛督に、右中辨は右大辨に、藤侍従は頭中將となつた。

○

此の卷は、玉鬘とその子供の事が主として描かれてゐる。これも前篇では主要人物の一、その後年の生活を描いて、此所に此の人物の終結をつげた。世間の事が意の如くならずして、夫に死に別れた玉鬘は、あまり幸福ではないらしい。此の卷中には、出家したいと思つてゐる事も記されてゐる。恐らく此の後間もなく出家をした事であらう。作者はそこまで書かずして、しかも玉鬘といふ女性の團圓を此所に告げてゐる。此の點に於いてなほ前篇の拾遺である。

一方では、前の紅梅の卷に匂宮が主として出てゐたのに對し、此の卷では薫君を主として出して、その青年時代の生活と戀と、そして、その實直眞面目な性格を寫す事にとめて、前の卷の、匂宮の色つばい浮薄な様に對照させた。またその最後に、宇治の姫君に心をかけてゐると記したのも、紅梅の卷と等しい。かくて紅梅竹河の二卷は、全く同一の性質を持つて相對照してゐる卷である。要するに、匂宮の卷で兩主要人物の生立を、紅梅の卷では匂宮を、こゝで

は薫君の人物を描いて、その性格に對する印象を強め、宇治十帖に入る準備としてゐるのだとも言ふ事が出来る、此の三卷は全く一體となつて、前後兩部の橋渡しをしてゐる。作者はこゝで低徊しつゝ前篇を收め、後篇を開き、おもむろに筆と思想を練つて、やがて傑作宇治十帖に筆をつける事となる。此の三卷があわたゞしい事件の経過を描いて、中味のない面白くない卷である事は已むを得ない。作者は此所に筆硯を新にして、宇治十帖に取りかゝるのである。

藏人の少將といふ人物も、此の卷では薫中將とともに戀争ひをして、中々活躍してゐるが、これは此の卷のあやとして出されてゐるので、物語全體では大した人物でもない。作者は時々かういふ人物を或る卷だけに一寸出す。恰も刺身のつまの如く、見た目を面白くする爲めに。これは、卷の内容を一寸興味深くさせる爲めのトリックである。近江君の如き滑稽的人物が、各卷に時々顔を出す如きはその甚だしい一例。一種の作劇術である。本來ならば匂宮がその役を勤めるはずであるが、匂宮ばかり顔を出しては飽きるので、此所では、いさゝか變化を加へて、新人物を出したのである。

なほ紅梅竹河兩卷の先後については問題がある。流布本は皆今の通りの順序になつてゐる

が、年代の上から言へば、薫君廿三歳までの竹河は前で、薫君廿四歳の紅梅は後に來るはずである。いや古い本にはかやうな順序になつたものもあるらしく、「白造紙」の源氏目錄や、「源氏木芙蓉」及び「源氏小鑑」の如きも、梗概を竹河紅梅といふ順序で記してゐる。本居宣長も亦、此の順序であるべき事を「玉の小櫛」の中で論じてゐる。年代の上からは此の方が合理的であるが、併し、竹河の卷では紅梅大納言は右大臣となつたのに、紅梅の卷ではすべてこれを大納言と記してゐるのは、此の物語の普通の例に反した書き方で、紅梅が竹河よりも後ならば右大臣と書くべきはずである。また、もし紅梅の卷が竹河の卷の後なら、「其の頃按察大納言と開ゆるは」などとは書き出さないであらう。前卷で紅梅大納言が右大臣になつた大饗の記事に直ちに續くからである。「源氏物語奥入」や、「原中秘抄」の如き鎌倉時代の書も、やはり今本と同じく、紅梅竹河といふ順になつて居り、室町時代の註釋書、梗概書等また大抵は此の順序となつてゐるのである。要するに、匂宮の卷で兩人の生立を記した後、匂宮の方が薫中將より身分が上なので、紅梅の卷で先にその方を出し、薫君を主とした竹河を後にした。さうして卷を彩る女性として、紅梅の卷には十八歳になる紅梅右大臣の大君と、竹河の卷には同じく十

八九歳の玉鬘の姉姫君とを出し、その懸想人として、匂宮と薫中將が出て来るのであるが、その際、紅梅の卷の方では、薫中將二十四歳の時の事とし、更に立ち返つて竹河の卷では薫中將十五歳の時から筆を起したのであらう。さうしなければ諸種の人物の年齢の關係が合はなくなるからである。故に現在の順序の方がよいと思ふ。若しこれを年齢の點からのみで順序を論じるなら、次の橋姫の卷の如きも紅梅の卷よりは前にあるべきはずである。そのやうな大膽な事は誰も敢へて言はないであらう。また宗祇の「種玉編次鈔」には、薫中將の卷（匂宮の卷）から、椎本の卷に至る五卷は現存本に錯亂ある由を言つてゐるが、これは年立を基として建てた説である。即ち薫君の年齢によると、匂宮、竹河、橋姫、椎本、紅梅の順序になるべきはずなので、かういふ説も出たのであらうが、今は多く注意するほどの事もない。なほ此の五卷の年立や順序については、諸註に種々の議論があつて一定しないが、今は一々あげぬ。又同じ書には、早蕨、宿木の兩卷の年次も宿木が早蕨の前より始まつてゐる事を論じてゐる。

(一) かういふ主観的な書き方で書き出すのは前にも云つた如く當時の小説に多い例である。香木の卷の冒頭の句も同様の書起しである。

(二) 催馬樂の歌。「竹河の橋の詰なるや、橋の詰なるや、花園に、ハレ、花園に、我をば放てや、我をば放てや、少女(めざし)伴(たぐ)へて」

(三) 卷名の出所。

(四) 此の卷だけに出てゐる。系圖不明。竹河左大臣と稱す。極めて端役である。

(五) 此の事は詳しく椎本の卷に出てゐる。

(六) 大臣大變の事。大臣が新任した時には人々を招いて祝の酒宴を開く例である。

中紀 青年期 宇治姫君の話

宇治十帖の一

四十五橋 姫

(薫君二十歳より二十二歳の十月迄の事)

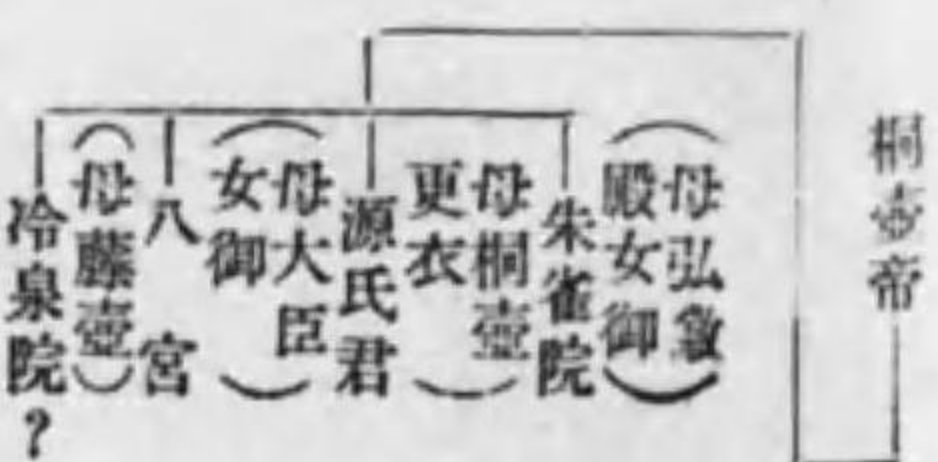
一名 優婆塞

その頃、世間から離れて一人淋しい生活を送つて居られる老齡の宮様があつた。北方は早く、幼い二人の姫君を残して死なれたので、宮は男手一つに姫君を育てて、その成長するのを樂しみにして居られた。此の宮は即ち故桐壺帝の御子、源氏君の異母弟に當る方で、八宮と申し上げる。かの弘徽殿大后は朱雀院御在位當時、藤壺の御子なる時の東宮冷泉院を退け、此の八宮を東宮にお立て申し上げようと陰謀を廻らして、失敗した結果、源氏君の勢力を得た時代となつては、八宮の立場は妙なものとなつて、社會にも出でず、源氏君の方の人々とは交際もせず

に閉ぢ籠つて居られたのである。その中、八宮の邸宅が火災の爲めに焼失したので、宇治の別荘に引退して、浮世を餘所に暮して居られるのであつた。

此の宇治山に、徳の高い阿闍梨(三)が庵室を結んでゐたので、世をはかなんで佛道に心を寄せてゐた八宮は、此の阿闍梨について佛教の教義を聞き、經文を學び、俗體のまゝで心は出家の戒を保つて居られるのであつた。阿闍梨はまた冷泉院の御所にも出入りをしてゐたので、或る日、京へ出たついでに、冷泉院へも參つて、八宮の話を申し上げた。桐壺帝の第十の皇子に當られる冷泉院は、御兄八宮の聖りらしい深い生活を懐かしく聞かれたのであつた。折節お傍にゐて此の話を聞いてゐた薫中將の君も、八宮の人格が慕はしく思はれて、宇治へ歸る阿闍梨に、八宮に宜しくお傳へ申してくれと傳言した。その後は薫君と八宮は直ちに手紙の取りやりもし、また薫君が親しく宇治へ參つて、佛教の話聞くやうな事もあつた。八宮は優婆塞(四)が行ふ山の深き如く、深き佛教の眞理や、經文の話などを薫君に話してお聞かせになつた。

かくて三年の月日が過ぎた。



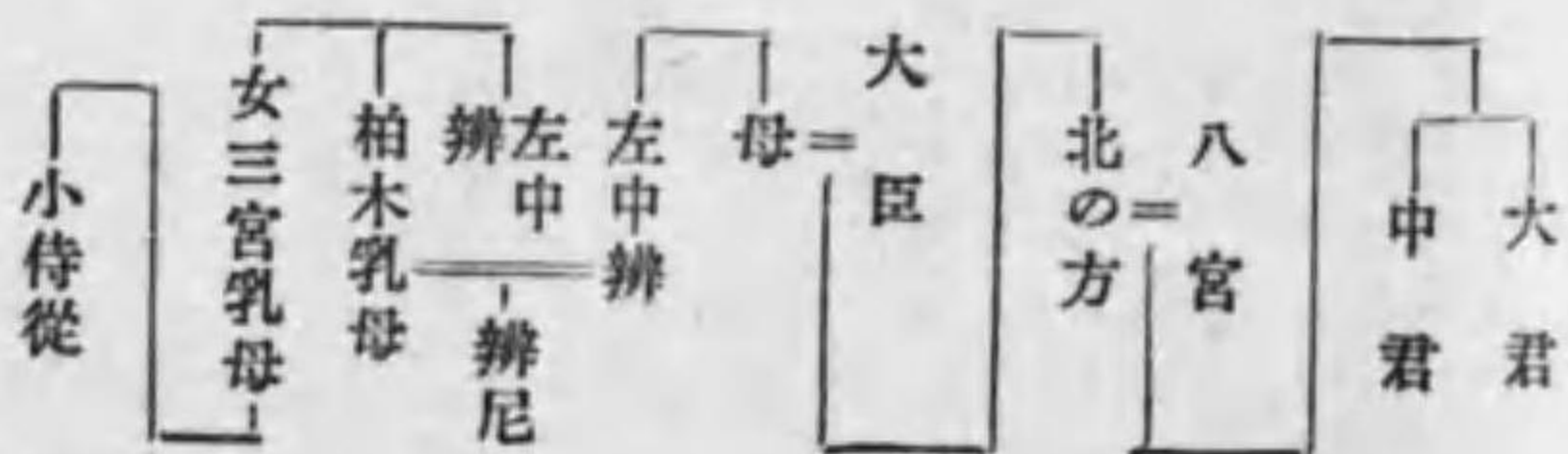
秋の末の事、八宮は彼の阿闍梨の住む寺に移つて、七日のお籠りをしてゐたので、その邸には二人の姫君が寂しく留守を守つてゐる頃、薫君は久しぶりで宇治の邸を訪れた。折から、姫君の掻き鳴らす琴の音が物懐かしく家の中から聞えて来る。透垣の戸を少し明けて、薫君が中をのぞきこむと、折からの月影に、琵琶や箏を弾いてゐる二人の姫君の美しい姿が、御簾を高く巻き上げた部屋の中に見えた。やがて薫君の訪れを知つて御簾が下されたので、薫君は何食はぬ顔で、姫君達の前に出て、大君と語りあつたが、その時薫君は、自分の意中をほのめかして、大君をかき口説いたので、返答に困つた大君は奥へ入つてしまつて、代りに一人の老女が薫君のお相手をした。薫君は此の老女と話をしていると、それは意外にも嘗つて柏木大納言に仕へてゐた者で、柏木の乳母の子辨尼といふ女である。辨尼は話のついでに、柏木と女三宮との關係についてほのめかしたが、さすがに、薫君が柏木の子だとは明かさなかつた。一夜を此所に語り明かして、翌朝歸りがけに、薫君は一首の歌を詠じて大君に差し上げた。

橋姫の心を汲みて高瀬さす棹の雫に袖ぞ濡れぬる

(橋姫は宇治橋の守護神、姫大明神といふ。それを姫君に譬へた。高瀬は宇治川を上り下る

高瀬舟の事。私は姫君の淋しいお心を察して、同情の餘り、高瀬舟をさす船人のやうに、河波の雫ならぬ涙の雫で袖が濡れます。それから二三日しての夕方、薫君は、浮氣な匂宮の心を亂してやらうと思つて、宇治の姫君の美しさを話して聞かせた。案の定匂宮は、眞面目な薫君が心から想を懸けてゐるのは、並大抵の女ではあるまいと思つて、此の上もなくゆかしく思つてゐる様子なので、薫君は、「いやつまらぬ事です。そんな世俗の事に心を留めは致しませんよ。女の爲めに遁世の志が鈍つては大變です」と言ふと、匂宮は、「例の仰山な聖り詞をおつしやる」と言つて笑つた。

十月になつて五六日頃、薫君は、かの老女の言つた夢のやうな話が氣になるので、再び宇治を訪れた。一夜を語り明かして、八宮が薫君に、出家遁世したいが、姫君の事が氣にかゝつてそれも出来ぬ。齡の末になつてこれのみが心配だと話されると、薫君は、私の生きてゐる限りは、あなたのお言葉を違へず、きつと姫君のお世話を致しますと、頼もしく返答をしたので、八宮は大變嬉しく思はれた。夜明け方、



かの辨の尼君を薫君の傍近く召し寄せた。年は六十に少し足らぬくらゐ、柏木の臨終の話をして泣きながら、薫君が源氏君の實子ではなくて、實は柏木の子なる事を初めて打ち明けたのである。此の秘密は、私と小侍^せ従とより他には、誰も知りませぬと言つて、自らの身の上話もしたりしてゐる中に、夜が明けた。やがて辨尼は微臭い袋を一つ取り出して、それを薫君に與へた。これこそ、柏木と女三宮との取りかはした手紙が集めて入れてある袋で、柏木の臨終の形見として、此の尼君に贈られたもの、一切の秘密は此の中に藏されてゐる、これを薫君が一覽の上は、直ちに破り捨てて下さいと辨尼は言つた。多年の疑問が解決するとともに、一層陰鬱な氣持になつて歸つて來た薫君は、その手紙を一枚々々見ては、今まで知らなかつた亡き父の筆蹟が懐かしく思はれた。併し此の事は、自分一人の胸に秘めて、誰にも語らず、母女三の尼宮の前へ出て、さあらぬ躰で、此の事については少しも話さなかつた。

○

宇治十帖の發端である。作者は全く筆を改めて、「其の頃世に數まへられ給はぬ古宮おはしけり」と書き出した。作者の構想はまた今までとは全く違つて、一個の主人公の傳記を書かう

とするのでもなければ、種々の女性の性格描寫を試みようとするのでもない。宇治十帖だけで完全にまとまつた一つの長篇小説、前篇とは何の關連もない、此の十帖だけの主人公と女主人公と、場所と事件とを以つて、作者は一個の人間葛藤の悲劇と、愛慾の悩みとを描き出さうとしてゐるのである。男性に、質實眞面目なる薫君と浮華放縱の匂宮と、性格の相反した二個の人物あり、女性に、前に眞實堅固なる八宮の長女大君、後に優しく淋しく男の言ひなりになる全十帖の女主人公浮舟がある。場所は都を離れた山水明媚の土地宇治のほとり、戀愛争鬭の悲劇がこゝに演じられる。描寫は精細適確、筆致は幽艶凄愴、眞に當代の傑作である。描寫の詳しく筆致の凄凉なるは前篇の須磨明石の卷に比すべく、大君の人物はかの權に似、浮舟はまた夕顔に似る。薫君に夕霧の面影ありと言はば、匂宮は寧ろ^{二二}青年時代の源氏君に似た所がある。併しすべての點で、前篇よりは格段に優れてゐる。筆が枯れて老巧の妙に入り、徒らに絢爛ではなくて滋味がある。就中事件の筋が統一されて一絲亂れず、發展あり終末あり、此の長篇の小説に些の狂ひもない。前篇のやうな餘計な道草や、時に詳し過ぎ、時に疎く走りすぎる弊もなす。

此の巻において薫君が一身の秘密を知るのは、前篇で冷泉院が源氏君の御子なる事を知られた薄雲の巻に似た趣がある。前篇と同一作者の筆に成つた事は疑ひないと思ふが、老成の作者の筆は、寧ろ此の宇治十帖において完成されたかの感がある。

なほ、薫君の陰鬱な性格は實父柏木の罪惡に根ざしてゐる。こゝに運命的な性格悲劇がはらまれてゐる。

八宮が冷泉院を退けて、東宮に擁立されようとする事件は、前には全く見えないのに、此所に突然さういふ事を書き出したのも、前篇を書く時には、作者は未だ此の宇治十帖を書かうといふ企圖はなかつたので、後になつて新たに宇治十帖の構想を得たから、かやうに前篇とそぐはない所も出来て来たのであらう。併し、強いて前篇と關係を持たせる爲めに、かういふ前に見えない事件を新たに設置するの必要もないやうに思はれる。

併し、前篇を書き終へた時には、既に、此の宇治十帖の構想を得てゐたので、紅梅の巻や竹河の巻では宇治の姫君の事が、ちらちらと匂はせてある。しかも、その實體は明かさず、容易に主題に入らず、前の兩三巻で低徊しつつ、大きい事件へ展開するらしいといふ讀者の期待

の中に、作者はさあらぬ外で、橋渡しの數巻を書き續けて来たが、此の巻に至つて始めて、その宇治の物語に筆を著け、前にほのめかした人物や事件の實質に觸れて来るので、讀者も此の本筋の軌道に乗つた話の内容に、一層の興味がひかれる事となる。始めから直ちに宇治の物語に及ばないで、前の三巻がある爲めに、結構の壯大さを加へて来るのであつて、その意味では、此の橋渡しの數巻は効果的である。

(一) 八番目の宮様といふ意。また優婆塞の宮とも申し上げる。また聖りの宮とも云ふ。

(二) 此事前篇に見えず。禰須磨明石の諸巻の時代頃の話であらう。

(三) 天臺、眞言、律宗のみで用ひる僧位の名。高き地位の僧である。

(四) 原文「優婆塞ながら行ふ山の深き心、法文などわざとさかしげにはあらで、いと善く宜ひ知らず」優婆塞は俗體のまゝで戒を保ち佛道を修行する男。それに對して尼姿にならぬ女の道心者を優婆夷といふ。その俗體のまゝで佛道修行する山の深き心と言ひかけた文章である。

此の文章は當時行はれた神樂歌の一種なる「優婆塞が行ふ山の椎が本あなそばくし床にしあらねば」(うつつ物語菊宴の巻に出づ)の歌によつて書いた。これが巻の一名の出所。

(五) 向うの見えすくやうに作られた垣。竹垣四ツ目垣の類。

(六) 姉君を大君といふ。二番目の妹を中君といふ。それ以下は三の君四の君と呼ぶのが當時の習慣。

(七) 此の辨尼の母の事は若菜の巻に出てゐる。柏木の家來左中辨の妹が柏木の乳母、その子が辨尼、柏木の乳母の妹が中納言の乳母と言つて女三宮の乳母、その子が小侍從で、柏木と女三宮との媒介をした女房。辨尼の父は宇治の姫君達の母北方の母方の叔父左中辨であると権本巻に記してある。

(八) 卷名の出所。源氏奥入では優婆塞を本名、橋姫を一名としてゐる。

(九) 高瀬即ち淺瀬を通るやうに底を平たく淺く作つた船。

(一〇) 聖僧ぶつたお言葉の意味。面白い言葉と思ふ。

(一一) 後年の源氏君の心持は寧ろ夕霧や薫君に似る。青年時代の生活は匂宮に似た所がある。

四十六 権 本 (薫君二十三歳の二月より二十四歳の夏迄の事)

二月廿日、匂宮は初瀬に参詣した。これは匂宮のかねての希望であつたが、殊に薫君から宇治の姫君の話を聞いて、歸りがけに宇治に宿泊する事を楽しみにしてゐたのである。併し、大勢の人が宇治へ匂宮の出迎へに來た爲め、八宮の邸を訪問する希望を遂げる事が出来ないで、ただ僅かに中君と和歌の贈答をしたのみで、空しく歸京した。それ以後、匂宮は宇治の姫君に時折り手紙を書いてやると、向うからも返歌を書いてよこす事があつた。それは何時も中君の筆である。此の頃、大君の年齢は廿五歳、中君は廿三歳、八宮は厄年に當るので、いつもよりも佛事に勤めて居られた。その秋、薫君は宰相中將から中納言に昇進した。

七月になつて薫君は宇治を訪れた。世の中のはかない、心細い話をして、八宮が薫君に、自分の死んだ後は姫君の事を宜しく世話をしてくれるやうにとお頼みになると、薫君は、志を盡してきつと姫君のお世話をしますと力強く答へた。その後、秋が闌けるとともに、八宮は、何

だか氣分が勝れずに心細くなつたので、例の阿闍梨の寺にお籠をした。やがて下山の日となつても、八宮の病氣は嵩じて、邸に歸る事が出来なかつた。そして八月廿日の夜半頃にお寺で亡くなられた。後に残された姫君の悲しみは言ふまでもなく、薫君も此の事を聞いて、大いに驚き且つ悲しんで、姫君に手紙を贈つて慰め、また法事讀經等の用意をも萬端調へてやつた。後始末はすべて阿闍梨がした。

九月になつた。匂宮からも手紙が来て、稀には大君が中君に代つて、返事を書いてやつた事もあつた。併し匂宮へは一片の儀禮ばかりで、さすがに薫君への手紙には眞實がこもつてゐた。

八宮の忌日の果てた日、薫君は直ちに宇治を訪れた。大君と話をしては、いつもの通り意中をほのめかし、また辨尼とも思ひ出話をしたりした。都で、薫君と匂宮と會つて話す時には、常に宇治の姫君の事が話題となつた。

年の暮となつて、雪霰に埋れる日が多くなつた。寺の阿闍梨は、炭などを姫君の所に持たしてよこしたりした。薫君も、年が明けると宇治を訪れる暇もあるまいと思つたので、雪の降り

積つた日、はる／＼都から宇治にやつて來た。薫君が姫君に話す事としては、八宮が姫君の世話を頼むといふあの遺言通りに、自分の思ひをかなへて貰ひたいといふ事より他はなかつた。併し姫君はさり氣なくそれをそらして、酒肴の用意をとゝのへて御馳走をした。お酌をする人々も、八宮が在世中、薫君の來るのを樂しみにして待つてゐて、共に酒を飲みつゝ語り明かされた事を憶つては、涙に咽んだ。薫君も八宮の日常居られたその部屋には、今は淋しく佛壇が残つてゐるのみで、八宮の座つて居られた床も取り拂はれて、なくなつてゐた、其の有様を見て、立ち寄らむ蔭と頼みし椎が本空しき床になりけるかな

(椎が本は八宮を椎の木蔭に譬へた。自分の出家後は此の八宮の所を頼みにしようと思つてゐたその人も、今はなくなつて、床も取り拂はれ、あとは主なき室が空しく残つてゐるだけだ。)

と言つて追憶の情に堪へなかつた。阿闍梨の寺からはまた芹や蕨を姫君の所へ持つて來た。

かくて年が明けた。春になると、匂宮は、昨年今頃宇治に宿つた事を思ひ出して懐かしさに堪へず、薫君に、宇治の姫君に逢はしてくれと頼んだりするので、薫君は滑稽に思つてゐ

た。その中、女三の尼宮の住んで居られる三條宮が焼けたので、薫君は六條院に母女三宮ともに移つた爲め宇治へ行く暇もなかつたが、夏になると、その年は例年よりも特に暑かつたので、河邊で涼まうと急に思ひ立つて、宇治へ遊びに行つた。そして襖の隙間から部屋の中を覗いて見ると、几帳も取拂はれてゐたので、十分に姫君達の容貌を見る事が出来て、薫君は嬉しく思つた。若やかにしてのんびりと鷹揚なのが中君で、それよりも少し上品な艶めかしい人が大君である。

○

發端より進んで、宇治の姫君と薫君、匂宮との交渉は漸く密にならうとしてゐる。薫君との交渉はすでに前巻に始まつて發端を切り、此の巻では匂宮との交渉を始めて起してゐる。特に八宮の薨去は事件の進行に著しい關係を持つてゐる。併し未だクライマックスには達しない。即かず離れずの状態で、次第に佳境へ入らうとする。

八宮の薨去を厄年の事と關連あらしめた事などは、他にも見られる當時の俗信の現れである。

(一) 大和長谷寺。

(二) 七々四十九日が過ぎた日。五十日目。

(三) 正月には種々の公事が行はれるので官人は特に忙しいのである。

(四) 貴人の座する臺。當時は今日の如く全面に畳を敷きつめる事なく、板敷の上に臥寝する所だけ畳の床を置いた。これは室内を便宜に應じて移動させた。特に取置にする寢臺の如きは漬床はまこと稱した。漬床は皇后以外には用ひないと云ふ。一種上等の製作物であらう。高さ一尺、九尺四方くらゐの臺である。(關根正直博士の宮殿調度圖解参照)

(五) 卷名の出所。

(六) 前註優婆塞の解の引歌によつて優婆塞といふ意味で、八宮の事を推が本とお呼びしたのである。

四十七 總角 (薰君二十四歳の八月より十二月迄の事)

はや一年がすぎた。此の秋には八宮の一周忌を行ふ事になつて、宇治ではその準備に忙しかつた。薰君が宇治を訪れて見ると、姫君達は忙がはしく(二)名香の絲(一)を作つてゐる。その様を見

て、薰君は

三
總角に長き契りを結びこめ同じ所に寄りも逢はなむ
(總角とは名香の絲の結び方の名。また子供の髪の名稱からして少年の事をも總角といふ。名香の絲の總角から催馬樂の總角を思ひ出してそれに言ひかけた。あの催馬樂の總角の歌のやうに、私達も早く永遠の契りを結んで、同じ所で共にやすむやうにしたいものです。長き、結び籠め、同じ所に寄り「纏り」、何れも總角の絲の縁語。)

と書いて大君に見せた。併し大君は、人の妻となつて、世の女らしい生活をしたとは少しも思はぬと辭退して、寧ろ妹の中君を、此のやうな田舎に住まはせず、何うかして立派な人にし

たいものですと、薰君に希望を述べた。また辨尼も、大君の心では、自分の代りに中君を薰君のお傍へ差し上げたい積りでゐると語つた。併し薰君は一圖に大君を慕つて、中君に心移すやうな様子もなく、その晩大君の傍近く近づいて、火影に大君の美しい姿を見守り、心ゆくばかりかき口説いたのであつたが、大君は薰君の意に従はず、つれない態度を示した。薰君も亦眞面目な性質なので、他の男のやうに、力づくで強いて無理を通すやうな事も出来ず、はかない假寝の添臥で一夜が明けた。翌朝起き別れて、薰君は大君の部屋から我が室へと歸つても、戀しさのみやまして、京へ歸る氣もしなかつた。大君も物思ふ事が多く、これほどの志を、若し薰君が中君に對して持つてゐたのであつたなら、心ゆく限り妹の世話をして、互ひに嬉しいと思ふ事が出来るであらうのにと口惜しく思ひ、とにかく自分がかねての希望通り、男に逢はずに、一生深い身體で過さうと決心した。

數日して薰君は再び宇治を訪れた。大君は中君に、それとなく薰君と逢ふ事を勧め、辨尼にも、自分の代りに中君を薰君に逢はせようと相談したが、辨尼は寧ろ大君が薰君の意に従ふ事を勧めた。その晩また薰君は辨尼の導きで、大君の寢所へ忍び寄つたが、大君はそれと察し

て、す早く隠れてしまつた。薫君は、中君の一人寝てゐるのを大君と思つて喜んだが、意外にもそれは中君だつたので、大いに失望した。併しまた、此の美しい人を見ると、これを他人のものにするのも惜しくて、一夜ををかしく語り明かした。かくて薫君は、思ひも叶はずに重い心持で都へ歸るのであつた。

都では、三條宮の焼失後、薫君は母尼宮とともに六條院に移り住んでゐたので、同じ院の内なる匂宮の所へいつも遊びに行つた。此の日も、匂宮とともに、宇治の姫君の話をして、その中君を、匂宮の希望通りに逢はして上げようと約束した。

廿六日は彼岸(ひん)の果(は)の日で吉日なので、その日二人は宇治へ連れ立つて行つた。その晩、固く閉(し)じた障子越しの對面で、薫君は大君と話をして、成らぬ戀に悶えてゐる間に、匂宮は、薫君の様子を装つて、中君の寢所に忍びこんだ。かくて悲喜交々の一夜を明かして、未だ夜が明け切らぬうちに、二人はともく都へ歸つた。翌日匂宮から後朝の文とともに、立派な贈物が中君へ届けられたので、それを見て大君は、始めて昨夜中君が匂宮と逢つた事を知つて、自分の代りに、薫君を中君に逢はせようといふ計畫の裏をかゝれた事を口惜しく思つたが、それも前

世の因縁づくると諦めて、此の上はただ二人の仲が行末變らず、妹がいつまでも幸福である事を希ふより他はなかつた。

併し匂宮は、その後はるく宇治へ行く事も心には任せなかつた。母明石中宮は、匂宮の輕しく浮名を流すのを諫めて、外出も自由にならないので、時には薫君に代つて貰つて、家に居るふうを装ひ、獨りこつそりと宇治へ脱け出す事もあつたが、同じ六條院に住んでゐる夕霧左大臣は、六の君を匂宮へと志したのに、匂宮は一向それを承知しないので、夕霧の機嫌が悪く、匂宮の浮氣な様(さま)を諷つて、悪口を言ふので、匂宮はそれに憚(おそ)られて、中君を思ふ通りに自分の正妻にする事も出来なかつた。

●九月十日頃にも薫君と匂宮は宇治へ行つた。十月の一日には、殿上人を大勢引き連れて宇治へ紅葉見に行つたが、人目を憚(おそ)かつて、匂宮は中君の所に寄りつかなくなつたので、大君は、男の心は頼みにならぬものと、味氣なく思つた。

その頃には、匂宮と中君との關係が人々に知れ渡つて、今上帝も、明石中宮も、夕霧も、匂宮を深く戒められ、その不行跡をお責めになつたので、今は邸の中に閉ぢ籠つて、外出も出来

なかつた。それで時々匂宮は、姉君の女一宮の所へ出かけて、在五の物語を見たり、女一宮を中君によそへ、猥らな冗談を言つて、姉君の顔を赤くさせたりして、せめてもの慰めとしてゐた。かやうにして、匂宮は宇治へふつとりと音信を絶つてしまつたので、大君は妹の事を思ふと悲しくなつて、時折訪れて来る薫君に愚痴をこぼしては泣いてゐた。その心配が嵩じては、重い病の床に臥して、夢に故父宮の姿を見、覺めて中君の哀れな姿を見ては、ただ泣き暮すのみであつた。

十月が過ぎ、十一月となると五節の準備に忙しくて、薫君も匂宮も宇治へ行く暇はない。その頃、明石中宮も匂宮に、夕霧の六の君との結婚を勧めたが、匂宮は少しも聞き入れなかつた。

或る日、薫君がふと思ひ立つて宇治へ行つて見ると、大君の病氣は非常に重くなつてゐて、食物も喉を通らぬほどなので、驚いて病氣平癒の祈禱を始め、大君の傍につき切りで手厚い看護に努めた。都では豊明の節會が行はれるその當日になつても、薫君は都へ歸らずに、雪のあわたゞしく降る寒い日を、此の宇治に留まつた。併し、その厚い看護の効もなく、大君は物の

枯れ朽ちるやうに、息が絶えてしまつたので、中君は自分もともに死なうと悲しみ、薫君も夢かと思つて、その寢入つたやうに安らかな美しい死顔を見守つた。後の始末、七日々の法事も、薫君の指圖で盛んに行はれた。はかない月日が過ぎて行く。十二月にもなつた。薫君は都へも歸らずに、此所で鬱々と暮してゐた。中君も、悲しみの餘り物も食はずに、物思ひに沈んで、瘦せ衰へてゐた。

或る雪の降り荒んだ日に、雪にまみれて、匂宮が久しぶりに訪れて來た。併し中君は匂宮を怨む事が深く、匂宮に素氣ない様子をするのも、思へば尤もな事である。

その年の暮には、薫君も長い間宇治に滞在してゐたが、いつまでも留守を明けてゐるわけには行かないので、都へ歸る事になつた。かやうに眞面目な薫君が深く宇治の姫君に心を寄せ、匂宮もひたすら中君を愛してゐる事を知つて、明石中宮もつひに匂宮の希望をかなへ、中君を宇治から都へ引き取つて、二條院の西の對へ住まはせる事を許したので、匂宮の喜びは言ふまでもなく、薫君も、こんな事なら、大君の代りに中君を我が物とすべきはずであつたのにと、今更ながら本意なく思つたが、なほいつまでも匂宮とともども姫君の世話をして行かようと心

を定めた。

○
事件は此所で一のクライマックスに達する。巻の長さも前二巻を合したよりも長くて、描寫が詳しい。中君と匂宮との夫婦關係が始めて此所に生じ、戀の歡樂は障害に會つて悲哀に轉じ、大君の死となり、薰君の限りなき失望となつて幕が下りる。

大君の氣高い且つ理性に富んだ性質はかの權齋院に似てゐるが、その性格は大君の方がはつきりと描き出されて、躍如としてゐる。中君は、美しさは大君に劣るが、「^セらう／＼じく才能ある方の匂は勝り給へる」——才藝の點では寧ろ大君にまさつてゐると作者が言つてゐる。併し中君は副人物で、大君ほどよく描き出されてゐない。

・大君は自分の代りに妹を世に出さうと思ひ、薰君はその計畫の裏をかくて、中君を匂宮に逢はして、大君を何うしても手に入れようとする。しかもその大君は病氣で死んでしまふ。互ひの希望は裏から裏へと外れて行く。そして事件は悲劇的に展開する。しかもそれは、作り構へたといふ感じを讀者に與へずに、極めて自然に進んでゆく。大君は心勞が積り積つて病氣とな

り、始は風邪の氣味と思つてゐたのがいつか重つて、遂に病死するに至るまで、心理的にも外面的にも、事件の進展に些も無理はない。就中大君の臨終の場面は、十分の用意をもつて描かれてゐて、悲劇的な味が濃い。かの紫上の死は、淋しい中にも一脈の華やかさが添ふ。それは春の暮のやうな感じだ。大君の死は、所も淋しい宇治の山莊、時は雪降りすさむ冬の夜、荒涼たる感じに包まれてゐる。彼よりも此の方に、同じ死の場面でも、讀者の心を打つものがあつた。傑作と言つてよからう。

なほ大君と中君との性格に關しては、橋姫の巻の始の方に、二人の幼年時代の性質の差を八宮が見る言葉にも注意せられなければならない。二箇所程出てゐる。大君は性質が靜かで氣高い人、中君は可憐にして上品な所のある人。また大君は大人らしい思慮の深い重々しい人、中君は應揚で且つ可憐だとある。此の靜かで氣高い大君は薰君と性質がよく似てゐたので、薰君は此の人に愛着の念がひかれた。可憐な中君は寧ろ匂宮に適した人である。さうして思慮分別の深さの姉君に劣つてゐる中君は、薰君を装ふ匂宮に欺かれて關係が生じたが、大君は遂に薰君の要求を拒み通した。性格の差が事件の發展に深い關係を持つてゐる事が、此所に

感られる。作者の偉大なる所以である。

なほ、薫君が大君の寢所に忍んだ所、大君は脱け出して、その代りに中君の傍に近寄る箇所は、空蟬の巻で、源氏君が空蟬の所へ忍んで来た時に、空蟬が脱け出して、繼娘の軒端萩が人違ひせられた所と甚だよく似てゐる。此の邊にも同一作者の同じ手法が現れてゐる。此の類似の構想の再出については、既に早く、建部涼俗がその著「俳諧源氏」の此の巻の所で、「此年月のこといと長けれど、空蟬のもぬけのさまにもかよひ、あるは朝霧のきぬくは夕霧の小野にかよひしあけぼのにも似たり」と記してゐる通りである。

(一) 様々の名香を紙に包み五色の糸に結びつけて佛に奉るもの。

(二) 催馬樂の總角「あげまきヤトウく、尋(ひろ)ばかりヤトウく、離(さか)りて寝たれどもまろび逢ひにけりトウく、か寄り逢ひにけりトウく」薫君の歌の下句は此の歌の詞を取つた。卷名の出所。また此の歌によつて大君の事を總角の君とも稱す。

(三) 春分又は秋分の日より三日目を初日として、それ以後の一週間を彼岸と稱す。此所は秋の彼岸である。此の彼岸の間は佛事を行ひ佛を供養す。彼岸の名稱も彼岸に達する(佛の救を得るの

意)の語から名づけられた。春分秋分の日には晝夜同一時間で時正とも天正とも稱した。古注に

此の彼岸の果の日を時正と言つて吉日であると注したのは誤りであると思はれる。

(四) 此の人は評判の美しい人で、薫君も想を懸けてゐる由が匂宮の巻に出てゐる。

(五) 伊勢物語の繪巻物。

(六) トヨノアカリノセチエと讀む。即ち五節の事で新嘗會の際辰の日に行はれる。五節の舞も此の日に舞はれる。トヨノアカリとは饗宴の意で、此の日に饗宴を臣下に賜ふから豊明の節會といふ。

(七) 「らうらうじ」は老老じとも萬萬じとも解せられる。何れにしても老成してゐるの意である。一説に良々じの意といふ(雅言集覽)。

(八) 此の時代には匂といふ語は香りよりも色の美しい方に多く言つた。こゝの匂はまたそれとも一寸違つて、才能の光りとても譯すべき言葉である。

四十八 早 蕨

(薰君二十五歳の正月二月の事)

年は明けても、中君の心には春の日は射さなかつた。山の阿闍梨の所から、蕨土筆などを贈つてよこしたので、そのお禮に中君は、

此の春は誰にか見せむ亡き人のかたみにつめる峰(こさねらひ)の早蕨

(かたみは形見に籠かごを懸けた。籠に摘んで贈られた此の山の蕨も、今年の春は姉君もゐないので、誰に見せようあてもなく、ただ、言葉の音も通ふ亡き人の形見と見るのみです。)と書き送つた。

都では、匂宮と薰君と相會して、話し合ふ日が多かつたが、薰君はその時にも、先づ宇治の姫君の事が思ひ出されるので、亡き大君をしのびつゝ、その思ひ出話をして、せめてもの慰めとしてゐた。

二月の初め、中君は都の二條院へ移る事になつたので、薰君はその世話をした。併し、匂宮

の喜びに引き返へて、薰君の心は暗かつた。せめてもの大君の形見と思ふ中君は、匂宮のものとなつて、薰君はすべてを奪はれた形である。その淋しい心を慰めようと、時々中君を訪れては、思ひ出話にふける事もあつた。

かくて二月の七日に中君は二條院へ移つた。匂宮の喜びは言ふまでもなく、世間の人々も此の噂で持ちきつた。

薰君は二月廿日過ぎに、六條院から三條宮へ移る爲めに、その邸の新築の監督をしてゐたが、二條院とは程近いあたりなので、中君の新居をば奥ゆかしく思ひやつた。夕霧左大臣も此の話を聞いて、六の君を匂宮に添はせようといふ望みの外れた事を、口惜しく思ひ、薰君と六の君は叔父姪の關係にあるが、此の人を他人の婿にするのも残念なので、それでは六の君を薰君の妻にと相談を持ちかけたが、薰君の心は大君を思ふ情で一杯なので、六の君の事などは念頭にもおかずに斷つた。

花盛りの頃、薰君は二條院へ遊びに行つて、中君と昔の事を話してゐる時、匂宮が奥から出て来て、嫉妬がましい皮肉な言葉を言つたやうな事もあつた。

○
大君を失つた薫君は、亡き人を慕ふとともに、大君の形見とも思はれる中君に何となく愛着を感じて来た。匂宮はまた時として、此の二人の間に疑惑の眼を向ける事もあつた。中君は宇治を離れ、都の二條院へ移つて匂宮と同棲し、薫君はその附近の三條宮へ越す。漸く三者の交渉が迫つて来る。併し此の巻にはクライマックスの後の疲れがある。後の部分へ移る中間の巻とも見られる。巻の長さも短い。

大君の死によつて事件は一轉し、前半の一段落となる。さうして、宇治十帖全體の主要事件とも云ふべき、浮舟を中心としての物語が次に展開せられて来る。大君に對する薫君の愛も、その大君の死も、實は浮舟を展出する爲めの前景に過ぎぬ。眞面目で、現世的な戀を厭ふ薫君が、信仰に厚い優婆塞の宮の弟子となつてより、その姫君にして、これも質實で浮華な戀愛を嫌ふ大君へ愛着を感じるやうになり、それからやがて浮舟を得るまでの薫君の心理的變化は極めて自然である。作者は此の自然な心的推移を描くが爲めに、大君を中心とする前四帖を添へて、次巻以下の本舞臺に入らうとするのである。

此の薫君の心理の推移は、前篇で、源氏君が亡き母桐壺更衣に對する愛情から藤壺に對する戀となり、更に紫上を得るに至る經過と類似するものがあつて、同じ作者によつて心理的洞察の深さが示されてゐる一例である。

(一) 卷名の出所。

(二) 此の建物は前に焼失したがこゝに新築をしてゐるのである。

(三) 二條の次が三條であるから兩方の通りの間は近い。

(四) 實は柏木の子であるから血縁はない。但し當時は叔父姪伯母甥の婚姻は認められてゐた。奈良時代までは異母兄妹の婚姻も認められたが此の當時はもうそれは認めなかつた。同母兄妹の婚姻は古代から罪惡とせられてゐた。

後紀 壯年期——浮舟君の話

宇治十帖の二

四十九宿

木

(薰君二十四歳の夏より二十六歳の夏迄の事)

一名 貌かたは鳥

其の頃、藤壺女御と申し上げる方は、故左大臣の姫君で、帝が未だ東宮であらせられた時分に、明石中宮などより先きに参られて、御寵愛が深かつたが、女二宮ただ一人を儲けられたのみで、此の姫宮の十四になられた年の夏、はかなく死んでしまはれた。帝はたゞ一人残された姫宮を托すべき人物を物色すると、薰君より他には適當な人もゐないので、或る秋の夕暮、園基に事よせて、此の事を話されたが、薰君は心を動かす様子もなかつた。夕霧左大臣も六の君を薰君に娶はさうと思つたが、女二宮の話をきいて、薰君の事は諦めた。その代り、明石中宮

から匂宮に勧めて貰つた所、色好みの匂宮は、まんざらでもない様子であつたが、匂宮は、またかの按察大納言の御娘、紅梅の君をも、ひそかに想を懸けてゐた。

翌年の八月頃、遂に夕霧左大臣の六の君と匂宮は華燭の典をあげる事になつた。此の話を聞いて、二條院に圍はれてゐた宇治の中君は、悲しみに堪へなかつたが、何にも知らぬ顔をして過してゐた。薰君も、中君の胸中を察して、慰めに行つては、源氏君がなくなる前二三年間の淋しい思ひ出話などを、しんみりと話した。匂宮も亦中君をば、いつもよりは、愛しく思つて寵愛してゐた。それは、此の五月頃から中君は匂宮の胤を宿してゐたからである。併し、八月十六日、匂宮が初めて六の君の所へ行く當日となつたので、匂宮はさすがに中君に對して氣兼ねしつゝも、左大臣邸に泊つて、結婚の初夜の晩が過ぎた。翌朝二條院へ歸つて來た匂宮は、中君の愛嬌ある姿を見ては、此の人に及ぶ女はあるまいと思つたが、また昨晚の六の君の姿にも心がひかれた。その日中君は、匂宮に會つた時には、さすがに泣かずには居られなかつた。翌日も、夕方早く匂宮は二條院を出て行つた。三日目は三日の夜の祝の式の行はれる日である。夕霧の北方雲井雁の兄弟達、また薰中納言もその式に列して、華やかに舉行された。薰君

は、かういふ式に列するにつけても、あの宇治の大君の事が思ひ出されるのであつた。今自分に話のある、今上の女二宮が、若し大君によく似て居られたならば、どんなに嬉しい事であらうか、とも思つた。そしてその晩は、薫君が他の女よりは稍々想を寄せてゐる、母女三宮の侍女按察の君といふ女房の部屋に泊つた。六の君は年二十一、盛りの花と見える人である。かくて此の夜の後は、匂宮は中君の所で寝ずに、左大臣邸に泊る事が多かつた。それも尤もな事であるとは思つたが、中君は悔しさ悲しさに、宇治を出て都へ移つた事が、ひたすら後悔せられるのであつた。

或る日中君は、薫君に、父八宮の三年忌を、薫君が鄭重にしてくれた禮狀を厚く書いて差し上げた。その翌日の夕方、薫君は二條院の中君の所へやつて來た。薫君の感情は複雑である。大君を失つて後、大君に似た人を得たいといふ心持は、やがて中君に對する思慕の情と變つた。それに此の頃は、匂宮は夕霧の六の君の婚となつたので、かしこに泊る事が多く、中君の淋しい心持を察すると、薫君は一層中君に同情されて、戀心は増した。その苦しい心中を、事に托し時に觸れて、今までも、時々中君に洩らした事があつたが、今晚はいつもよりも一層中

君の傍近くによつて、夕暮の薄闇の中に、中君を匂宮に取り持つた過去の事を取り返したい、その胸中を、忍びやかに語るのであつた。遂には中君の袖を捉へて、その傍らに添ひ臥しつゝ、かき口説いたが、やがて思ひ返して、甲斐なき戀を嘆じつゝ歸つて行つた。それは未だ宵の間と思つたのに、いつか明け方に近い頃となつてゐた。中君は、匂宮の事といひ、眞面目な頼もしい人と思つてゐた薫君の妙な素振といひ、男といふものが一向信用出来ないものやうに思はれてならなかつた。翌日、六の君の所から歸つて來た匂宮は、中君の着物に、まぎれもせぬ、かの薫君の移り香が残つてゐたので、二人の間の關係に一層疑惑の念を抱くやうになつた。その後、薫君は折にふれて、中君に着物を贈つたり、手紙に思ひのたけを書いて贈つたりするので、中君は却つて迷惑に思つてゐた。

或る靜かな夕方、また薫君は中君を訪れた。そしていつもの通り、中君の傍近くよつて、かき口説くのであつたが、返答に困つた中君は、ふと思ひついた事があつて薫君に話した。「今まで少しも存じませんでした、私には一人腹違ひの妹妹がありまして、此の夏頃、遠くの國から都へ歸つて參りました。先だつてその妹に會ひますと、不思議なほどまでに姉君に似て居り

ました。お母さんが違ふのにどうしてあんなに似てゐるのだらうと、皆話してゐたのでございます。」此の話聞いて、薫君の心は甚だ動いたが、詳しい事は聞く事が出来ずに、その日はそのまま歸つた。

九月廿日過ぎには、久し振りに宇治を訪れて、辨尼君や阿闍梨にも會つた。その際辨尼は、かの異腹の妹君について詳しく語つた。八宮が未だ宇治に引き籠らぬ以前、中將の君といふ上藤とひそかに關係を結んで、一人の女の子が生まれた。その後八宮は、聖りとなられたので、中將君は陸奥守の妻となつてかの國へ下り、數年前都へ歸つた時には、姫君も丈夫だといふ事を、八宮にも知らせて來た。その中、夫が、また常陸介となつて東國へ下つたので、中將君も都を遠ざかつて、今まで音信不通であつたが、今春また都へ歸つて來たとの事。その姫君は今年二十ばかりであらう。そして、その母君は、八宮の故北方の姪で、辨尼とも親類關係に當る人なので、そのうち薫君の思召しがある事を、かの君にも傳へておきませう、などと話してゐるうちに夜が明けたので、薫君は都へ歸る爲めに、匂宮への土産として、深山木に這ひかゝつてゐる葛などを折り取つて、次のやうな歌を詠んだ。

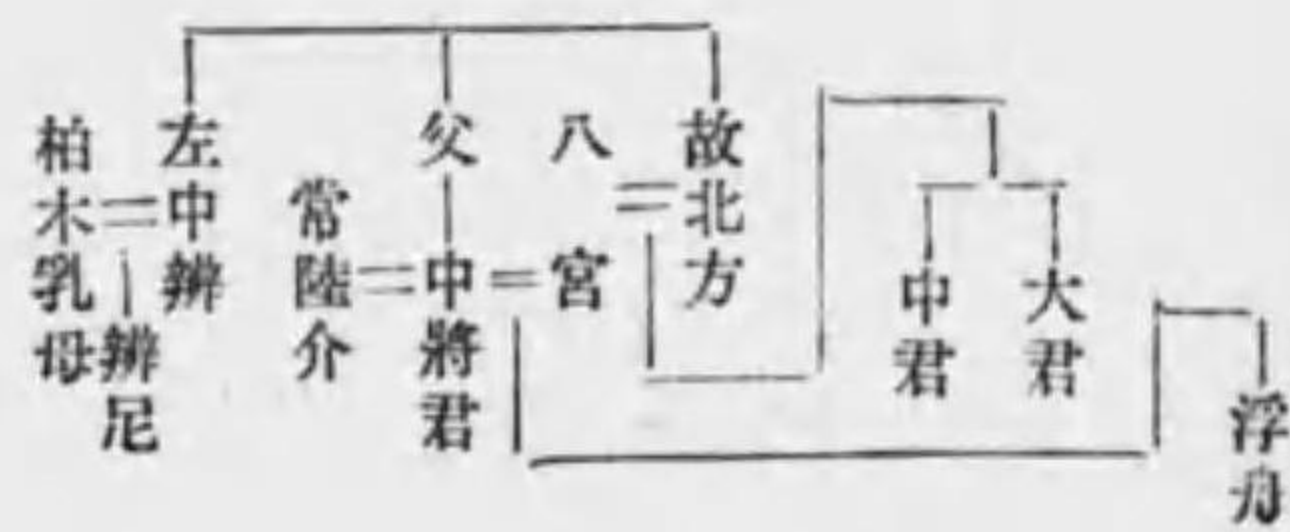
宿り木と思ひ出ですば木の下もとの旅寝もいかに寂しからまし

(此の葛などが木に宿る如く、自分も嘗つては宇治へ來て、大君の所に泊つた事もあるといふ思ひ出があるので、慰めにもなるが、若しさやうな思ひ出が全くないのであるならば、此の宇治の旅宿もどんなに寂しい事であらうか。)

此の葛を薫君は中君に贈つた。それを匂宮が見つけて、中君に皮肉な言葉を言つたりした。

年が明けて正月もすぎ、二月には、薫君は權大納言兼右大將となつた。その翌日の曉には、中君が男の子を生んだので、匂宮の喜びは云ふまでもなく、薫君もともに喜んで祝ひをしてやつた。

その月の廿日過ぎには、女二宮の御装束の式が行はれ、次いでその翌日には、いよいよ薫君が女二宮の婿となつて、女二宮の所に通つて行く事になつた。三日の夜の祝なども甚だ盛んであつた。併し薫君には新婚の喜びもなく、大君の事を憶つては、匂宮の若君の五十日の祝に、



中君の所へ来て、心にもなき結婚をかこち、涙ぐんで訴へたりした。四月の朔日には、女二宮を宮中より自分の邸三條宮へ引き取る事になつたので、その前夜に、宮中では女二宮の居られる藤壺で、名残りの藤見の宴が催されて、その際に、紅梅大納言が、薫君に、自分の娘を貰はずに、帝の御婿となつたのを怨む歌を差し上げたやうな事もあつた。その翌晩、盛大な行列をつくつて女二宮は三條宮へ移つた。

四月の廿日過ぎに、薫君は、昨年の九月來、宇治の八宮の邸を、寺院に造り改めてゐた、その普請を檢る爲めに、宇治へ出かけた。丁度かの浮舟の姫君も、初瀬詣での歸り道、辨尼の所に立ち寄つた時なので、その次の朝、旅の疲れに日蘭けて起き出でた浮舟の姿を、薫君が障子の隙間からのぞいて見ると、それはかの中君の言葉の如く、全く大君に生き寫したつたので、今更のやうに昔の事が思ひ出されて、涙が落ちた。辨尼と話をしてゐるその聲も、大君によく似通つてゐると思つた。それで、懐かしさのあまり、薫君は辨尼を通して、次のやうな歌を浮舟に言ひ傳へさせた。

貌鳥（二）の聲も聞きしに通ふやと繁みを分けて今日ぞたづぬる

（貌鳥はいかなる鳥か不明。こゝに貌鳥と言つたのは、浮舟の顔が大君に似てゐる事を含めた。浮舟は、顔のみならず、聲までも、かの大君によく似てゐるかどうかと、わざわざ草の繁みを分けて、今日此の宇治にやつて來たのです。）

○
此の卷に至つて、初めて浮舟の事が出て來た。此の宇治十帖全篇の女主人公を出す爲めに、宇治の姫君を主とする長い物語を今まで書いて來た。まことに結構雄大、布置整然、描寫も詳細にして適確、雄篇傑作なる事を思はしめる。

大君に對する戀から、それによく似た浮舟を戀するに至るのは、前にも云つたやうに、前篇において、源氏君が母桐壺更衣を慕ふあまりに、母によく似た藤壺を戀するに至ると似た構想である。併し、人情の機微はやはりかういふ所にあるのであらう。さうして一方では、匂宮は夕霧の六の君と結婚し、薫君は女二宮と結婚して、それ／＼の身を固めた。しかも、何れも本當の愛人は別にあるのである。

匂宮の新婦と中君の心情、しかも中君は妊娠中の身の上であり、薫君は中君に熱烈なる思慕

の情を寄せてゐる。一方では女二宮と結婚しなければならぬ。此の兩主人公は中君を中心として、それ／＼の運命に悩んでゐる。此の複雑な感情が、絲の亂れの解けぬ如くもつれあつて、しかも作者は、少しの混亂もなく、はつきりとそれ／＼の心持を明確に描き出してゐる。さうして最後に、此の絲のもつれは、自然に浮舟の身の上に落ちて、此所に一つのさばき口を求めて来る。まことに巧妙な脚色である。

篇中登場人物も甚だ多い。時に薫君の思ひ人であつた按察あせちの君といふ女を一寸出して、匂宮と夕霧の六の君との結婚式當夜の、薫君の感情を吐かせて見たり、薫君にその娘を娶せようとした紅梅大納言を一寸出して、薫君の結婚を恨ませて見たり、端役を時々出しては、刺身のつまとする。しかもそれが甚だ有効に働いてゐるのに驚く。紅梅大納言の如きは、前の竹河の巻に書かれてゐる事なども連關があるので、一層此の點出が内容上有機的な關係を以つて、有効に働くのである。

初めに「その頃藤壺と聞ゆるは」と改まつて、話は前卷早蕨の巻よりも一年前に立ち返り、新人物女二宮の事を書き出したのも、此の女性は一篇中の主要な人物ではないけれども、薫君

の心情と、その立場と、一篇の構想を複雑にするが爲めに、此の巻に特に點出した人物であつて、要するに、此の一卷は構想の雄大と脚色の複雑とよりして、まことに傑れた巻といふ事が出来る。巻の長さも他の巻に比して甚だ長く、宇治十帖の中で最長である。

大君中君について、浮舟と薫君の最初の出會も宇治である。何處までも宇治が中心となる。物語はこれより佳境に入る。

(一) 其の頃とは推本の巻の始頃。姫君の十四になつた年とは推本の終總角の巻と同年。

(二) 此の方の事は梅枝の巻に出てゐる麗景殿女御と稱す。その後藤壺に移つたのである。(梅枝の巻参照)。

(三) 總角の巻の記事と稍々矛盾する所がある。

(四) 紅梅の巻に出た人物なのでかく稱した。かの巻の按察大納言の中君である。

(五) 此の時の薫君の詞は雲隱の巻の解説の中に引いた。

(六) 當時の結婚式は先づ媒介人(なかだち)が仲にたつて男女の間を周旋し、縁談が成立すれば吉日を選んで男が女の所に夜忍んで行く。翌朝男が歸れば女の所に後朝の文を贈る。かくて二日

目も夜忍んで行き、三日目の夜に三日の夜の祝と云つて女の方で酒肴を用意して男を歡待し、特に餅を男女とも三つづつ食す。これを三日の餅といふ。また女の兩親に對面して舅婿が初めて挨拶する。これを露顯(ところあらはし)の式といふ。これが終つて始めて正式に女の婿となつたので晝夜妻の所に行く事が出来る。但し露顯の式は三日の夜の一二日後にも行はれる事がある。

(七) 浮舟と稱する。手習の君ともいふ。

(八) 宮中に仕へてゐる上席の女官。

(九) 卷名の出所。「寄生」とも書く。

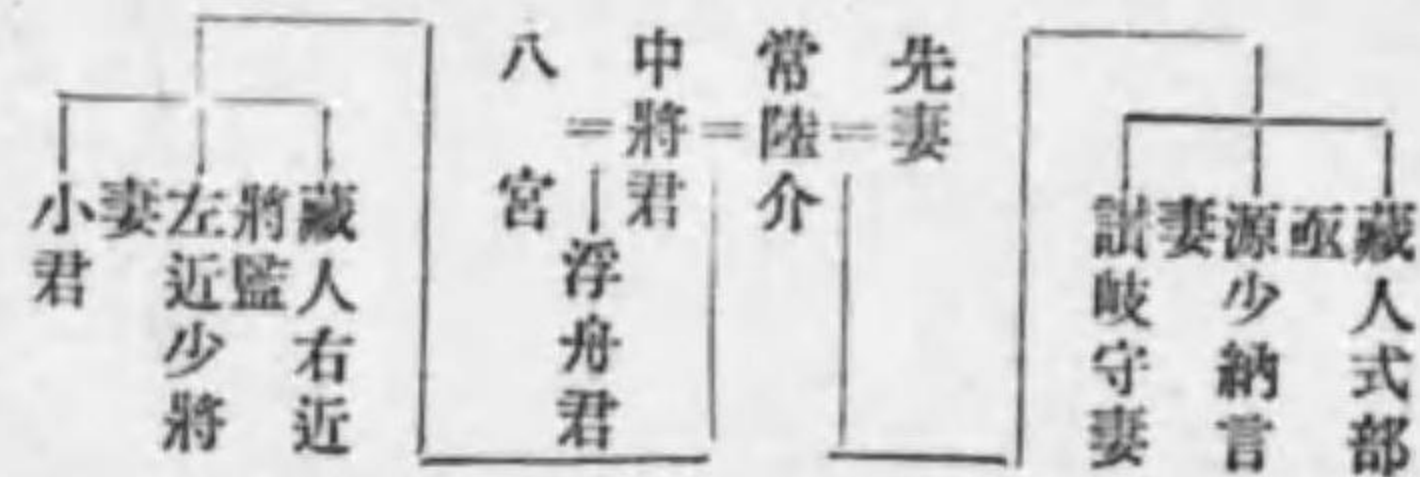
(一〇) 當時の障子は今の襖に當る。今の紙一枚を張つた障子を當時は明障子あかりと言つた。明りを入れる爲めの障子としたからである。

(一一) 卷の一名の出所。

(一二) 顔よき鳥の總稱といふ。又鶯鶯の一名とも翡翠とも呼子鳥とも閑古鳥の一名とも諸説があつて一定しない。

五十 東 屋 (薰君二十六歳の秋迄の事)

その後、辨尼は度々浮舟の母に、薰君の望みを言つて遣つたが、母の中將君は本當とは思はなかつた。併し娘も年頃なので、早く婿を探さなければならぬと、ひそかにその人を物色してゐた。常陸介(二)の前妻の腹に生れた女の子も二三人ゐたが、それは皆それ／＼片付いてゐる。此の後妻の中將君と常陸介との間に生れた女の子も、皆年頃となつてゐた。此の家にかやうに女の子が大勢居ると聞いて、心をかけてゐる青年が多く、特に浮舟君は美しいといふ評判が高いので、青年達は互ひに心を盡してゐたが、中に左近少將といふ年二十三の青年が、優れた人のやうに思はれた。それで浮舟の母は、夫常陸介にも相談せず、ひそかに此の人に白羽の矢をたてて、八月頃に結婚させる事とした。併し、少將は媒介人からよく事情を聞いて見ると、浮舟は常陸



介の繼子であるといふ事なので、元來利に倣く、打算的な此の青年は、浮舟の母には祕密で、媒介人に頼んで、常陸介の實子なる年十五六の妹娘と結婚してしまつた。此の事を聞いた母も甚だ失望すれば、浮舟の乳母も、今にあの薫君のやうな立派な方を婿にとつて見せると負惜しみを云つて、ひどく怨み悲しんだ。その上、新しい婿のもてなしに、常陸介の邸内も狭苦しいほどなので、浮舟は乳母と共に、しばらく二條院なる中君の所へ行つて、こゝに假住ひをする事にした。そして母君も二三日はともに二條院に行つてゐた。自分の夫常陸介よりも位の高い人でも、匂宮の前に出ると、皆膝まづき畏まつてしまふ。いや、常陸介の所では立派な人と思つてゐた少將の如きは、此の匂宮の前に出ると、すつかり畏れ入つて、物でもないやうな様子なので、浮舟の母君はただ驚くのみであつた。また、匂宮と中君の仲の睦まじい事を羨ましく思つたが、併し浮舟の美しさは、匂宮と並べて見ても決して似合はしくない事はないと思つて、ひそかに心を慰めた。そして、中君に、浮舟の事をいろ／＼頼み込んで話してゐる時、薫君もそこへ來合せたので、中君は薫君に、浮舟が此所に来てゐる事を告げた。母も薫君の御立派な姿を見て、此んな人を娘の婿にする事が出來たならと、心がひかれたのであつた。翌日の朝早く母は歸つて行つた。

その後、或る日、匂宮はふと浮舟の姿を見つけて、その部屋に入りこみ、添寝をしてかき口説いてゐる時に、宮中からのお召しがあつて、匂宮は本意なく立ち去つたので、浮舟はほつと一息ついたが、中君に變に思はれないかと心配したやうな事もあつた。常陸介の邸では、常陸介が、北方の、浮舟ばかり大切に、他の娘を顧みないのを怒つたりした。浮舟は匂宮との事があつたその翌朝には、中君に氣兼ねしてゐる様子なので、中君はそれを慰めようと隔意なく話をした。そして、此の浮舟の顔形をつく／＼見ると、全く亡き大君にそのまゝの生き寫であつた。それは多分

「故宮にいとよく似奉りたるなめりかし。故姫君は宮の御方さまに、我は母上に似奉りたりとこそは、古人ども云ふなりしか。げに似たる人はいみじき物なりけりと思し較ぶるに、涙ぐみで見給ふ。彼は限りなく貴に氣高き物から、懐かしうなよ／＼かに、かたはなるまで、なよ／＼とたわみたる様し給へりしにこそ。此は未だもてなしの初々しげに、萬の事を慎ましうのみ思ひたる故にや、見所多かる艶めかしさぞ劣りたる。故々しき氣配だに持て付けたら

ば、大將の見給はむにも、更にかたはなるまじなど、姉このかみでころ心に思ひ扱はれ給ふ。」(此の浮君は亡き父八宮によく似てゐるからであらう。姉君は父上の方に、自分は母上に似てゐると、老人達も言つてゐた。實際似る人といふものはよくも似るものだ、大君と浮舟君との姿を思ひ較べるにつけても、中君は涙ぐみつゝ、浮舟の顔を見守つた。大君は此の上もなく上品に氣高い人ではあつたが、また物懐かしく優しい所があつて、餘りに片寄つたと思はれるまで、弱々しく柔かすぎた有様であつたが、此の浮舟は、その態度が未だ若々しく、萬事遠慮がちなせむか、見榮はなのする艶めかしい所は大君よりも劣つてゐる。併し、此の人に、物馴れて落ち着いた態度が添はつて来たならば、薫君のお相手としても耻かしい事はあるまい、などと、中君は姉らしい心持で、浮舟の事をいろいろ心配するのであつた。)

翌日、浮舟の乳母は、常陸介邸へ歸つて、母君に、昨晚匂宮が浮舟と添寝をした事を話したので、母君は義理ある中君の手前大いに驚いて、丁度三條の邊に、此の母君が、かねて浮舟の爲めに、小さな家を造り設けておいたので、中君の留めるのも振り切つて、浮舟を乳母とともにそこへ移り住まはせた。

秋深くなり行く頃、かの宇治の御堂が落成したと聞いて、薫君は宇治に出向いた。その際、かの浮舟が三條邊に移つたといふ事を、辨尼から聞いて、それはよい機會であるから、明後日に、是非辨尼が都へ出て、その住家に伴つてくれるやうにと頼みこんだ。そして、その日の早朝には、薫君の所から宇治に迎への車が来て、その夜、薫君は辨尼とともに浮舟の所へ忍んで行つた。折からの時雨に、薫君は此の荒れた小家の縁側に立つて、次のやうな歌を詠じた。

さしとむる葎むらや繁はらき東屋ひがしやの餘り程ふる雨そゝぎかな

(程經るに、降るを言ひかけた。私を家の中にも入れず、此んな所に待たせておくのは、誰か他に邪魔をする人でもあるのですか。餘りに戸の開けやうが遅過ぎます。おまけに雨まで降つて來ましたのに。東屋の餘りと言ひかけたのは、催馬樂の一句を取つて、常陸國は東國であるから、常陸介の妻女の家を東屋と言つた。時雨が降り、門に立つて雨垂に濡れる所も催馬樂の歌と同じ趣きであるから、それを連想したのである。葎は雜草の事。それを仇し男に譬へた。)

かくて此の夜浮舟に逢ふ事の出來た薫君は、翌朝早く浮舟をかき抱いて、車に乗せ、宇治に

連れて行つた。時は九月十三日、河原を過ぎ法性寺の邊で夜が明けた。辨尼や浮舟おつきの女房の侍従もお供をした。宇治につくと、此の御堂の邊に浮舟を住まはせ、自分も數日を此所に過して、甘い戀の歡樂に酔ふ事が出来た。

○
此の巻で、浮舟は舞臺の中心人物となる。事件は浮舟を中心として廻る。浮舟は大君によく似てゐる。併しその間に稍々資性の差がある事は、挿入の原文の通りである。

先夫の子を連れて後妻となつてゐる中將君の心持や、常陸守との間に時々醸される家庭の不和、かうした事情のもとにある家庭の有様がよく描き出されてゐる。繼子苛めの物語は、この物語の以前にも、住吉物語や落窪物語等、多かつたらしい。併し此のやうな事情の、しかも當時の社會としてはかなりあり得べきかうした家庭の葛藤、繼父と連子との間に立つ母の氣苦勞などを、かくも如實に描いた小説は、實は此の物語の此の巻より他には殆どないのである。當時の中産階級の生活、勿論それは上流貴族社會を主として、かなり侮蔑的な態度で書かれてはゐるが、中流社會の家庭を本當に描き出したのも亦此の巻である。常陸介の無風流な世俗的性

格、婚の少將の打算的態度、結婚の仲介人の賤しい口振等、今のそれと少しも變らぬ。

浮舟の性格は前篇の夕顔を思はせる。若々しくなよ／＼として、意志の弱い男子の言ひなりになる女性、それは夕顔の復活である。さう思へば、此の巻の終の方は夕顔の巻とよく似てゐる。何ちらも中流以下の家庭に生立つた女、(それが此の作者の理想的女性の隠れてゐる階級である)、匂宮は取りも直さず頭中將で、薫君は即ち源氏君、三條邊の小家は、五條邊の小家がちのあたり、源氏君が夕顔を車に乗せて連れ出せば、薫君も亦浮舟を誘ひ出す。同じ趣向の重出してゐる事を思はせる。浮舟は遂に宇治に連れ出された。中君の去つた宇治へ。何處までも宇治が中心である。

(一) 物語に出て来る常陸介一家の人物の系圖を示す。(三四九頁)。

(二) 卷名の出所。催馬樂の「東屋」の歌は「東屋のまやの餘りの雨そよぎ、我立ち濡れぬ、その殿戸開かせ、かすがひも戸さしもあらばこそ、その殿戸我ささめ押開いて來ませ、我や人妻」なほ拾芥抄に、此の卷名の下に狭席(さむしう)と記したのは、或ひは此の巻の一名であるかも知

れぬが此の巻名の出所は巻中に見えず、且つ狹席といふ續篇があつた事は他書にも見える所なので、今これを取らぬ。

(三) 加茂川の河岸。

(四) 加茂川の東九條の南今の東福寺の近くにあつた。伏見街道に添うてゐる。藤原忠通の開基。

五十一 浮舟

(薰君二十七歳の正月より三月末迄の事)

匂宮は、かの一夜ほのかに見た浮舟の姿が忘れなかつた。年も明けて、正月のはじめ、浮舟の所から中君に手紙が來た。折節居合せた匂宮は、女の文をゆかしく思ひ、その手紙の主を問ひたゞして、あの夜の女が、今宇治に居る事をはじめ知つた。それとともに、去年の秋頃から、薰君が熱心に宇治に通ふ事も思ひ合せて、あの眞面目な薰君が夢中になつてゐるからは、なみ／＼の女ではあるまい。果してあの夜の女が、薰君の戀人であるかどうかを明かにしたいと思つた。都合のよい事には、匂宮の家來の大内記は、薰君の邸にも出入をしてゐて、向うの事情をよく知つてゐる人であるから、此の人を案内者として、薰君が宇治に行かない時を窺つて、匂宮は宇治へ出かけた。夜更けて宇治に着いたので、格子の隙間から家の中をのぞきこんで、かの女の姿を見ると、それは紛れもなく、かねてゆかしく思つてゐた美しいあの夜の女なので、匂宮は心もそゞろに、ひそかに妻戸を叩いて案内を乞うた。此の家の、心ぎきの女

房なる右近は、薄暗い火影に、薫君によく似た匂宮の姿を、薫君と思ひ込んで、少しも疑はずに、浮舟の室に導いた。匂宮も亦薫君の様子を装うて、一夜の契を交したのであるが、浮舟は、男の姿をあらぬ人と覺つて、淺ましくも恥かしく思ひつゝ、その人をよく見ると、それはかの匂宮だったので、ただ泣くより他はなかつた。女房の右近も、それと氣がついたが、今は致し方もなく、ただ事を秘密に取り計らふのに苦心するのみであつた。けれども、翌日も匂宮は歸らなかつた。浮舟の母君の所から石山參詣の迎への人が來たが、それも月の障りがあるからとて歸してしまつた。そして匂宮は、薫君が初めて浮舟の所に通つて來た時の事などを問うたりして、一日を暮した。二日目の朝、匂宮はいつまでも此所に居るわけには行かぬので、都よりの迎への者とともに、惜しい別れを告げて、歸つて行つた。その夕方、薫君が匂宮の所へ遊びに來たので、さすがに匂宮の心は平靜でなかつた。

翌月となつた。久しぶりに薫君は宇治を訪れると、浮舟は秘密を覺られはしないかとおそれて、物悲しさうな様子をしてゐるので、これは自分が浮舟を都へ引き取る事の遅れたのを怨んでゐるのだと思ひ、近い中に浮舟を都へ引き取る積りだ。その爲めに今造らせてゐる家も、近

い中に出來上る。自分の邸の三條宮からも程近い所であるから、毎日逢ふ事も出来るだらう、などと言つて慰めた。

二月十日、宮中で作文(三つせん)の會のあつた翌日、匂宮は雪の降り積つた中を、宇治に遊びに行つた。匂宮は浮舟を抱いて、小船に乗せ、右近は留守居に残しておいて、もう一人の重だつた女房なる侍従を伴ひ、宇治川の中にある橋の小島に、船遊びをしたりして、のどかな一日を暮した。橋(はし)の小島で、匂宮が、自分のそなたを愛する心はいつまでも變らぬと言つた言葉に對して、浮舟は

橋の小島は色も變らしを此の浮舟ぞ行方知られぬ

(あなたは此の小島の名の、橋の常磐木なる如く、いつまでも心は變らぬと仰せになりますが、私は、此の川上に浮んでゐる小舟の、行方も知らず上り下るが如く、將來の運命はどうなるか少しも分らないのでございます。)

と答へた。かくて、匂宮は二日を此所に暮して、そのうち浮舟をひそかに都へ伴ひ行く積りだから、その姿を隠してしまふやうにと、くれんも浮舟に言ひ含めておいて、都へ歸つた。そ

の後に、薫君から懇切な手紙が来たのを見ても、浮舟は良心の苛責に堪へかねて、よよと泣かれたのであつた。

薫君がひそかに都に造つてゐた新邸も大方出来上つたので、四月十日に浮舟を都へ移す事にきめた。匂宮はその事を大内記の口から聞いて、それよりも前、三月の晦日に浮舟を連れ出さうと決心した。此のやうな話を聞くにつけても、浮舟は心も落ちつかず、何うなる身の上かと、淋しく思つてゐた。

その頃、浮舟の母が宇治に遊びに来た。常陸守の家庭の話、いろ／＼な世間話のついでに、此の水勢滔々たる宇治川の水音を聞いて、人々は、せんだつて此の川に、渡守の孫の子供が落ちて死んだなどと、話したりした。そして、浮舟が氣分が悪いといふので、母君はくれ／＼も手當の事などを云ひ置いて歸つて行つた。

その日、匂宮から大内記が手紙を持つて来たが、薫君からも使が來合せて、匂宮の家來なる大内記の姿を見つけて怪しく思ひ、都へ歸つて此の事を薫君に報じた。薫君は匂宮が病氣だといふので、その見舞に行き、匂宮が女の文を一心に讀み耽つてゐるのをそつとのぞき見をし

て、いつもの通りの色事かとかしく思ひつゝ歸つて来た所であるが、その手紙の様子などを詳しく語るのを聞けば、先刻匂宮の見てゐた文は、紛れもなく浮舟からの返事である。さては二人の間に怪しい關係があつたのかと初めて覺つて、温和な薫君も、友達を裏切つた匂宮の態度を甚だ不愉快に思ひ、また、浮舟の貞節なきを怨んで、私の顔に泥をぬるなど手紙を書いてやつた。此の手紙を見て、秘密のあらはれた事を知り、浮舟はひどく胸を痛めた。女房の侍従は、匂宮に好意を寄せてゐるので、浮舟に、一層の事匂宮の所へお行きになつたがよいでせう、と勧め、右近は、とにかく無事にをさまりますやうにと神佛を祈つた。かやうに女房達も心配をしつゝ、さゝやいてゐるのを聞いて、浮舟は、自分の心は必ずしも匂宮を愛してゐるわけではなく、どちらとも心は定まらないのだが、ただ年頃愛されて来た人に別れる事がつらいので、かやうに苦しんでゐるのである。どうしたらよい事かと思ひ亂れてゐる時、かくとは知らぬ匂宮からは、三月廿八日の夜必ず京に迎へるから、その準備をするやうにと、手紙が来た。また匂宮自らもはるばる宇治に出掛けたが、薫君の内命を受けて、此の家を守つてゐた家來達が、荒々しく咎めたので、匂宮は、わづかに女房の侍従に會つて、その口から秘密が

薫君に洩れた一切の事情を知つて、失望怨恨の情を抱きつゝ、空しく都へ歸つた。

これらの事があつて、浮舟の心はますます／＼つらく悲しく、遂に宇治川に身を投げて死なうと、ひそかに思ひ定めて、戀人からの手紙は皆破り棄て、淋しい鐘の音が、風に連れて響くのを聞きながら、夜の更けるのを待つてゐた。

○

宇治十帖のクライマックスは此の卷にある。前卷に續いて、浮舟を中心としての戀愛の三角關係は、此所に一つの渦を巻き起し、キャタストロフィーに達する。そして遂に浮舟の入水となつて、悲劇は終る。(實際は入水したのではない)。しかも作者は入水の所を描かずに、その前の淋しい夜の情景を描いて、入水の事を暗示しつゝ筆を擱いてゐる。妙筆といふ事が出来る。さうして、その入水の心持を引き出す爲めに、前に、宇治川に落ちて死んだ人の事などを世間話として出してゐる。此の箇所を輕々に看過してはならぬ。此の作者はある心理的過程を描くに、大抵その遠因となるものを前に出してゐる。従つて心的發展が極めて自然となり、前後脈絡して無駄な箇所がない。作者の才能はさういふ所に現はれてゐるのであるから、此の物

語を読む上に、その點を注意すべきであらう。

此の卷は、かやうな複雑な過程を敘するには、今少し描寫を精細にして、三角關係の始終の心理描寫を、もつと詳しく描いて貰ひたかつたと思はれる所があるが、とにかく興味深い卷である。

浮舟の女房のうち、右近は寧ろ薫君の方に心を寄せ、侍従は匂宮に好意を有する人として描かれてゐる。その事が、二人の動作の中に、露骨鮮明ではなく自然に現はされて、その心持の相違を作者は巧みに描き分けてゐるのである。

- (一) 官名。中務省に屬する書記官。詔勅を作り、禁中の動靜を記録する。大内記少内記の二階級あり。此の人の實名は道定と出てゐる。此の作品の中でも、身分の低い人は、惟光、良清などの如く實名を出してゐるが、高い身分の人の實名は、敬し憚かつて、これを記さないの、殆どすべてわからない。

(二) 文は詩の事。詩の會。

(三) 今の宇治橋の南、橋姫社の近傍の島であらうといふ。此の島は、平家物語宇治川の條によると、

平等院の丑寅(東北)の方にある島である。なほ八宮の邸は、橘姫の巻の記載によると、丁度平等院の對岸頃に位するやうに想像せられる。

(四) 卷名の出所。また此の女性を浮舟と名付けたるのも此の歌による。

五十二 蜻蛉

(薰君二十七歳の三月末より秋迄の事)

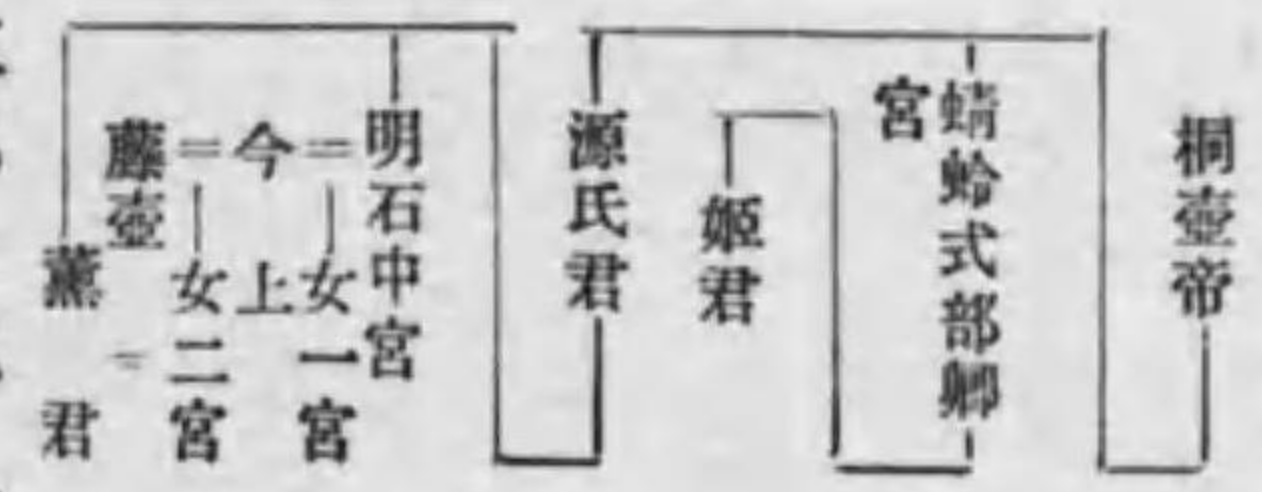
宇治では、浮舟の姿が見えなくなつたので、乳母をはじめ、人々は大騒ぎをしたが、遂にその姿を見出す事は出来なかつた。此の事を知つた母君の嘆き、匂宮の驚きはいふまでもない。浮舟の書き残した歌、その他の事情から、河に身を投じたのであらうと、女房達は推測した。では、此の激流にその死體を求める事は到底不可能な事なので、浮舟の着物、蒲團などを遺骸の代りに焼いて葬儀をすました。

薰君は、母女三の尼宮が病氣なので、その祈禱の爲めに、石山にお籠りをしてゐた所であつたから、此の報知に接して、驚き悲しんだが、自ら行く事は出来ず、たゞ使を遣はして、薰君に相談をもせず、急いで葬儀を行つた事を、咎めてやつた。そして都へ歸つてからも、ただ呆然として、亡き人の事のみが思ひ出された。匂宮も亦悲しみのあまり病氣になつたので、此の事を聞いた薰君は、さてはやはりかねて思つた通りだつたと思ひ當つて、それとなく匂宮を

見舞つて、互ひに悲しい話を取り交した。

その後匂宮は、浮舟の女房なる侍従を手許に呼び寄せて、その折の事を詳しく聞いた。薰君も宇治に出かけて、右近に、匂宮との関係について、隠す所なく委しく問ひたゞした。また浮舟の母にも、懇ろなくやみの手紙をやつたりした。

匂宮薰君二人ともに悲しい心持を抱きつゝ、月日は過ぎて行つた。蓮の花の盛りなる頃、明石中宮は、源氏君と紫上との供養の爲めに、法華八講を行つた。薰君もそれに出席したが、五日目結願（こけつがん）の日に、何心なく、西の渡殿（にせわただ）の局をのぞいて見た時、部屋の中にあつた女は、言はん方もないほどに美しい人であつた。それは、薰君の北方女二宮の腹違ひの御姉女一宮である。その美しさは自分の妻よりは以上であると思つた。その後此の人の事が氣にかゝるので、薰君は、自分の妻女二宮に、姉君に手紙をやるやうな事があるかと尋ねたり、明石中宮にも、その様子を問うたりした。そして美しい繪本を女一宮に贈つたが、思ひ返して見れば、それも結局煩ひの種、大君さへ生きてゐたなら、自分は此んなに苦しむ事も



なく、人に想をも懸けずにすまず事も出来ようと、戀しくもつらくも思ひ亂れるのであつた。その頃、此の春なくなつた式部卿（しきぶ）の宮の忘れ形見なる姫君は、繼母があるだけで、他にみよりの人とてもなかつたが、その繼母が姫君につらくあたるといふ事なので、明石中宮が可哀さうに思つて、此の姫君を自分の所に引き取つた。匂宮は、浮舟に別れて、いつかその悲しさも忘れたか、例の浮氣心がまた出て来て、此の姫君に想を懸けてゐるのであつた。薰君も、此の姫君の話を知りて、同情の心が動く事もあつた。

秋の盛りになれば、匂宮ははや例の通り、女を漁つて歩いてゐたが、薰君は宮中へ行つて、女房達と冗談を言ひ、慕はしく思ふ女一宮の所に遊びに行つても、心は慰まずに、やはり思ひ出されるのは、かの宇治の姫君の事であつた。秋の暮、蜻蛉の飛び交ふのを見て、淋しさのあまり、

有りて見て手には取られず見ればまた行方も知らず消えし蜻蛉（せうてい）

（大君浮舟等の果敢なく死んだ事を蜻蛉の生命の果敢なきに譬へ、また上句は、虫のかけろふを陽炎にも見たてて、眼には見えるが、手には取られないと言つたのである。）

と獨り言ちた。

○

クライマックスから下り坂となつて、感情は沈靜し、薫君も匂宮も、それ／＼心の激動が落ち着くと、また時に他の女に心がかゝる事にもなる。その間に、匂宮は浮氣な特色を發揮し、薫君は實直で絶えず故人を思ひ出して反省する心持を描いて、それ／＼の個性を書き分けた。薫君が女一宮をふと見そめたりするのも、愛のない結婚をした妻に對する、満たされぬ心からであるが、しかも、むやみに、さういふ心に溺れる事なく、靜かにこれを思ひ返すのが薫君らしい所である。併し卷全體としては、少しくどく、餘計な事が入りすぎた。此んな所はもつと端折つて、浮舟の卷の描寫と結構、變化に努力した方がよかつたらうと思ふ。

(一) 法華經八卷を毎日二卷づゝ講ずるので四日で終る。五日目は即ちその満願の日である。

(二) 寢殿から西の對の屋に通ずる廊下に添うて造つてある局。

(三) 此の人は東屋の卷で常陸介の妻中將君の言葉の中に一寸出る他、此の卷にも一寸出てくるだけ

である。故に蜻蛉式部卿宮と名づける。桐壺帝の御子であるから明石中宮と式部卿宮の姫君とは従姉妹の間柄である。

(四) 卷名の出所。

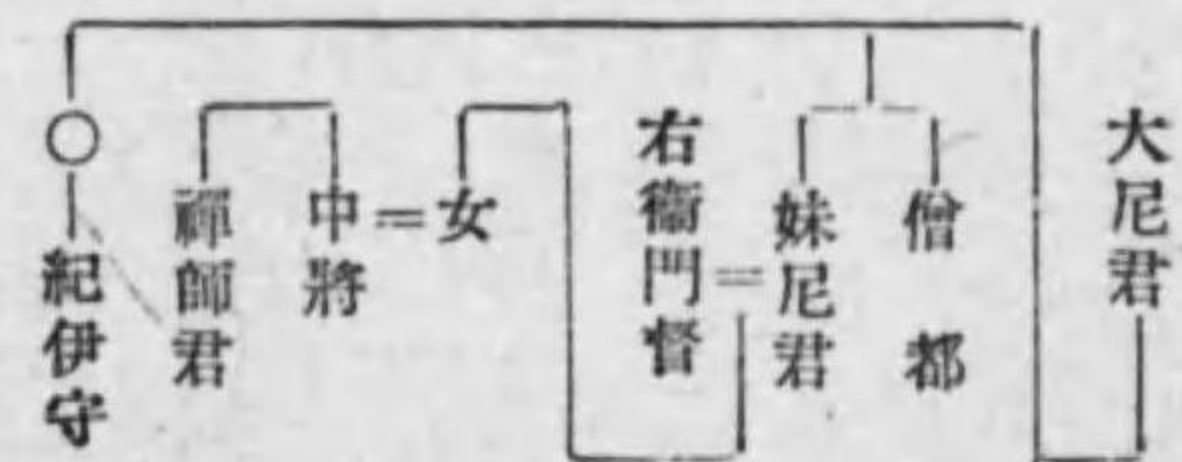
その頃、横川(こよがし)に某僧都(なにかし)といふ六十餘の高徳の僧があつた。八十餘りの老母と五十ばかりの妹は尼になつて、僧都と離れ、一所に小野の里に住んでゐた。此の母の大尼君が長谷詣での歸り道、宇治で病氣になつたので、知人の家に泊つた。その晩弟子の阿闍梨は、此の家の後方の森の木の下に、白衣の美女が倒れてゐるのを見つけて、種々介抱した。尼君達も御祈禱をして、看護したので、漸く蘇生した。此の女は即ち浮舟である。下人達が行方不明になつた浮舟の話をしてゐるのを聞いて、さてはその人ではないかとも思つたが、女は素性も語らずにただ泣いてゐるばかり、そのうち尼君の病もよくなつたので、浮舟を伴つて、京のほとり、比叡山の麓なる小野の里に歸つた。

此の人の病氣の療養に月日もたつて、四月五月も過ぎた。比叡の山にお籠りをしてゐる僧都を、無理に呼び下して、宇治での事を話して、此の女の加持を頼むと、僧都も熱心に祈禱をし

たので、さすがに頑固な憑物(つゑもの)も、自分は昔修行してゐた法師であるが、いさゝか世に怨をとゞめる事があるので、自分の靈が浮れ歩いて、美しい女の數多住む所にありつき、半ばは女をとり殺したが、此の人の世をはかなみ死なうとする心があるのによつて、憑りついたのであると語つたが、やがて、僧都の祈りに負けたと云つて憑物は去り、漸く浮舟の病氣は本復した。その語る所によれば、かの夜、浮舟は川に身を投げようとして、ふら／＼と家を出たが、途中で美しい男に掻き抱かれると見て、その後は夢中で何も覚えぬと言ふ。そして尼になりたいときりに希望するので、遂にその願の如く、五戒(ごかい)だけを授けてやつた。妹の尼君はもと右衛門督をしてゐた人の妻女であつて、一人の娘を儲けたが、その娘の死んだ事を悲しむあまりに、尼となつたので、今浮舟を得て、本當の娘が生き返つたかのやうに喜び、いろ／＼と世話をしてゐた。此の妹の尼君の娘の婿であつた中將は、弟の禪師の君が僧都の弟子となつてゐるので、その庵室に遊びに來た。年廿七八の男で、姑の尼君にもあつて、昔話をした。そのうち、浮舟の姿を見つけて、いたく心を動かして、その身の上を尋ね、昔の妻の代りに、此の人を妻にしたいと熱心に望んだ。併し浮舟は勿論そんな氣持は全くないので、相手にもしなかつた。

八月の十日過ぎ、小鷹狩のついでに、中將は此の庵室を訪れて、尼君もともく、その心に従ふやうに勸めたが、管絃の遊びをしたのみで、浮舟の返事は聞く事が出来なかつた。九月に成つて、此の尼君は長谷に詣でた。その留守をねらつて、また中將がやつて来て、いろく口説いたが、例によつて空しく歸つて行つた。静かなる夜、尼達ははや寝静まつてあたりは淋しく、浮舟は物思ふ事が多い。暫くして、山に籠つてゐた僧都が、女一宮の病氣の祈禱に召されて、参内する途中、小野に立ち寄つた。浮舟は久しぶりに僧都に會つて、尼君の留守を幸ひに、無理に願つて、到頭髮の毛を切り、尼の姿になつてしまつた。此の事を聞いて、中將の失望は甚だしかつた。

今上の女一宮の御病氣は、此の僧都の祈禱の效力で恢復したので、世間の人々もその徳をほめて尊崇する事一方ならず、母の明石中宮も、僧都を招いて、夜居(よぐゑ)の僧としてお置きになつた。或る夜の物語りに、僧都は浮舟の事を詳しく中宮にお話した。それを聞いて、中宮もおつきの女房の小宰相の君も、宇治で薫君の想ひ人が、行方不明になつたといふ噂をかねて聞いて



欠

欠

で、此の巻の浮舟の蘇生が一層生きて来る。そして舞臺は、宇治よりも更に淋しい小野に轉じて、枯瘦たる尼法師達の生活を描いたが、しかも作者は、中將なる懸想人を點出して、一片の色彩を點する事を忘れない。遂に浮舟は尼となつて、色界の身は聖僧の境涯に入り、肉情を許さず、萬事休した後において、薫君は畢生の戀人浮舟の存在を初めて聞くに至るまで、一卷神彩奕々たるものがある。さうして此の巻は、浮舟を主として描いたが、その最後に、薫君をして浮舟の存在を知らしめるのが此の巻のやまで、それに續いて、次巻の悲劇的感情の最高調に達せしめるのである。

なほ、薫君が浮舟の異父弟小君を引き取つて、次の巻では浮舟に對する文の使に使つてゐる所は、前篇で源氏君が空蟬の弟小君を引き取つて使とする所と一寸似た趣向である。やはり同じ作者の同じ手法が知らず／＼の間に出たものといふべきであらうか。

小野の里も、前に夕霧の巻で使はれ、夕霧が小野の落葉宮の所に通つて行つたが、今また浮舟を此所に置いて薫君を引きつけるのである。これも同じ作者が此の土地を愛した心の現はれであらう。或は又、當時一般に、此の土地に對して抱かれてゐた、ある寂寥の感じの持味が、

此の作品にも好んで用ひられるに至つた所以であらう。

- (一) 比叡三塔の一。當時根本中堂と並んで最も勢力のあつた堂塔である。
- (二) 五戒を受けただけでは優婆夷即ち俗體の道心者で未だ尼僧となつたのではない。
- (三) 秋期に行はれる鷹狩。鶉雲雀などの小鳥を狩るより名づけた。また始鳥狩(はつとがり)ともいふ。冬期に行はれる狩を大鷹狩といふに對する語。鷹狩とは鷹隼等の猛禽を使つて鳥を捕る狩。
- (四) 垂尼と云つて髪を肩の邊で切つて先を剪り揃へる。これが當時の若い尼の姿である。即ち近頃の女の斷髮姿に似る。浮舟は今まで五戒を受けただけで俗人の姿をしてゐて尼にはならなかつた。
- (五) 加持祈禱の爲めに夜間貴人の家に宿直してゐる僧。當時高家に出入してゐる僧は大抵夜居を勤めた。迷信深い當時の人々は夜の魔物を特に怖れたからであらう。
- (六) 此の當時の人は信仰深くて潔い尼の姿をしてゐる女を犯す事は到底なし能はぬ事と考へてゐた。
- (七) 卷名の出所。此の卷の中には浮舟が歌を手習に書いてゐるといふ事が五箇所に出ゐるので此の卷を手習の卷と名づけ、また浮舟の名をも手習の君ともいふ。殊に尼の姿となつた後の浮舟を手習の尼君と稱してゐる。
- (八) その神佛に縁のある日。即ち神佛の示現降臨、寺社の建造の日などで祭典供養が行はれる日。

五十四 夢の浮橋

(薰君二十八歳四月の事)

一名 法 の 師

薰君は比叡山に參詣して、その翌日横川の僧都を訪れた。そして、かの宇治で救つた女の話
を聞きたくして見ると、それは確かに浮舟で違ひなかつた。それで薰君は、自分を小野に案内
してくれるやうに僧都に頼んだが、僧都はきかなかつた。では、此の供に連れてゐる童は、浮
舟と親しい關係の者であるから、此の者に自分の手紙を持たして浮舟の所にやりたい。ついて
は、僧都の添書をつけてくれるやうにと頼んで、手紙を書いて貰つて、横川より坂本に降り、
小野の尼君のあたりを通つて都に歸つた。

間もなく、僧都は小野の尼君の所に、薰君訪問の事を知らせてやつたので、何うした事かと
尼君も怪しんでゐた。薰君も直ぐさま、小君に僧都の文及び自らの手紙を持たして、小野に遣
はした。小君も姉の姿を見たく思ひ、浮舟も弟を懐かしく思つて、互ひに楽しく暮した幼い時

の事が夢のやうに思ひ出されたが、ひたすらに汚い過去を埋めてしまひたい、世間の人々から、自分の生きてゐる事を知られまいと願ふ浮舟は、薫君の手紙を受け取つたばかりで、遂に弟にも會はなかつた。その手紙には、「私は是非一度あなたに會つて『淺ましかりし世の夢語』
(淺ましい過去の昔話)をしたいと思ひます。

法の師(しんぼう)と尋ねる道を導者(しんぼう)にて思はぬ山に踏み惑ふかな」

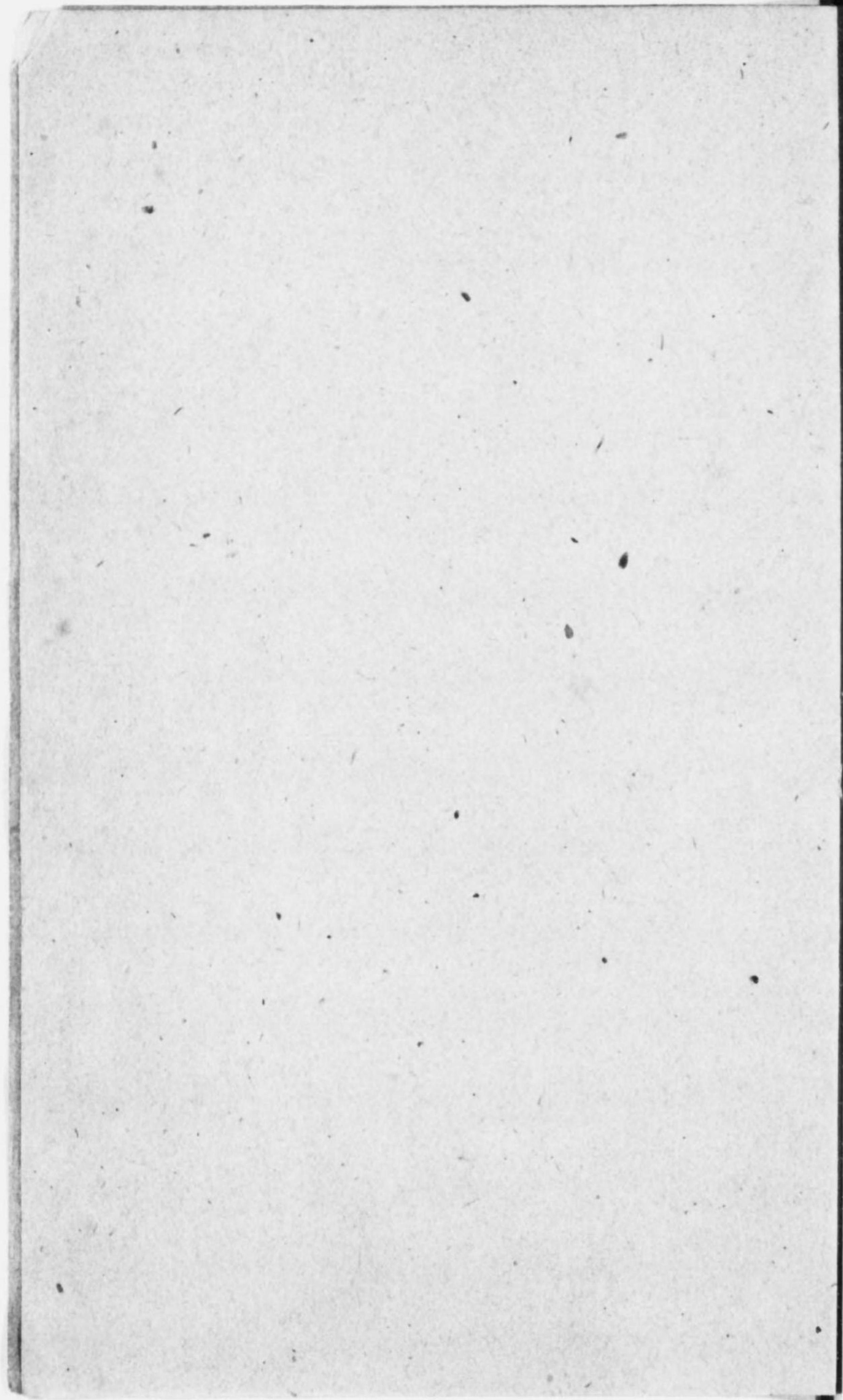
(佛法の師として教を尋ねる僧都の導きで、思ひもかけず、佛法ならぬ浮舟の存生を知つて、私の心は悲しみに昏れ惑うて居ります。)

と書いてあつた。それを見て、さすがに浮舟は、悲しさに泣き伏したが、心強く、宛名違ひであらうなどと言つて、返事も書かずに、薫君の手紙を押し返して、小君を歸した。小君は姉の無情を恨みつゝ空しく歸つて行つた。

○

薫君が浮舟に會ひに行くのは、さすがに不遠慮すぎるので、此所に小君といふ人物を出して、姉弟の會合といふ悲劇的な場面を書いて、終りに、一度佛道に入つては過去を全く潔めた

欠



欠

963.36

F67

終

